南方民族圖譜

B.S.G.
91
10-6-1

M93A06
11

人口問題研究所 書庫
人口民族部 蔵書

南方民族圖譜

人口問題研究所

購入図書		
	受入年月	昭和 18年 11月 17日
	受入番号	才 号
	分類	030
	番号	305

昭和18年 6月 17日
第 — 號
厚生省研究所人口民族部

厚生省研究所人口民族部編

例　　言

一、本圖譜は當研究所において蒐集せる研究資料の一部であつて、南方諸地域（佛印、タイ、マライ、スマトラ、ジャワ、小スンダ列島、ボルネオ、セレベス、フィリッピン）に住む民族の人種體型、生活樣式、文化等の實態を平易に圖版によつて示さうとしたものである。

一、我國人士の南方に對する關心いよいよ深きを加ふる折から、本圖譜によつて南方諸民族に關する正確なる認識が幾分でも高められるならば、本出版の目的は達せられたといふべきであらう。

倘ほ他の諸地域に對しても續刊の豫定である。

一、本圖譜の編輯企劃は主に研究官小山榮三、圖版の蒐集、解說は囑託甲野勇がこれに當つた。

目　　次

例　　言……3

佛領印度支那……11

安　南　族……20

カンボヂャ族……23

ラ　オ　ス　族……24

チ　ャ　ム　族……26

マ　　ン　族……26

マン・ラン・タン族……26

マ　ン・タ・バ　ン族……28

白泰族・黑泰族……29

ノ　　ン　族……30

ミ　ャ　オ　族……31

モ　　イ　族……33

タ　　イ　國……36

タ　　イ　人……38

山　地　部　族……42

カ　　ー　族……42

ラ　　フ　族……42

リ　　ス　族……42

マライ半島……44
マライ族……46
ジャクン族……47
セマン族……48
サカイ族……51
オラン・ラウト族……52
スマトラ……53
アチェー族……55
ガヨ族……56
バタ族……57
メナンカボー族……59
ランポン族……61
パレンバン族……61
クブ族……63
ニアス族……65
エンガノ族……68
メンタウェー族……69
ジャワ……72
ジャワ族……77
マヅラ族……78
スンダ族……78

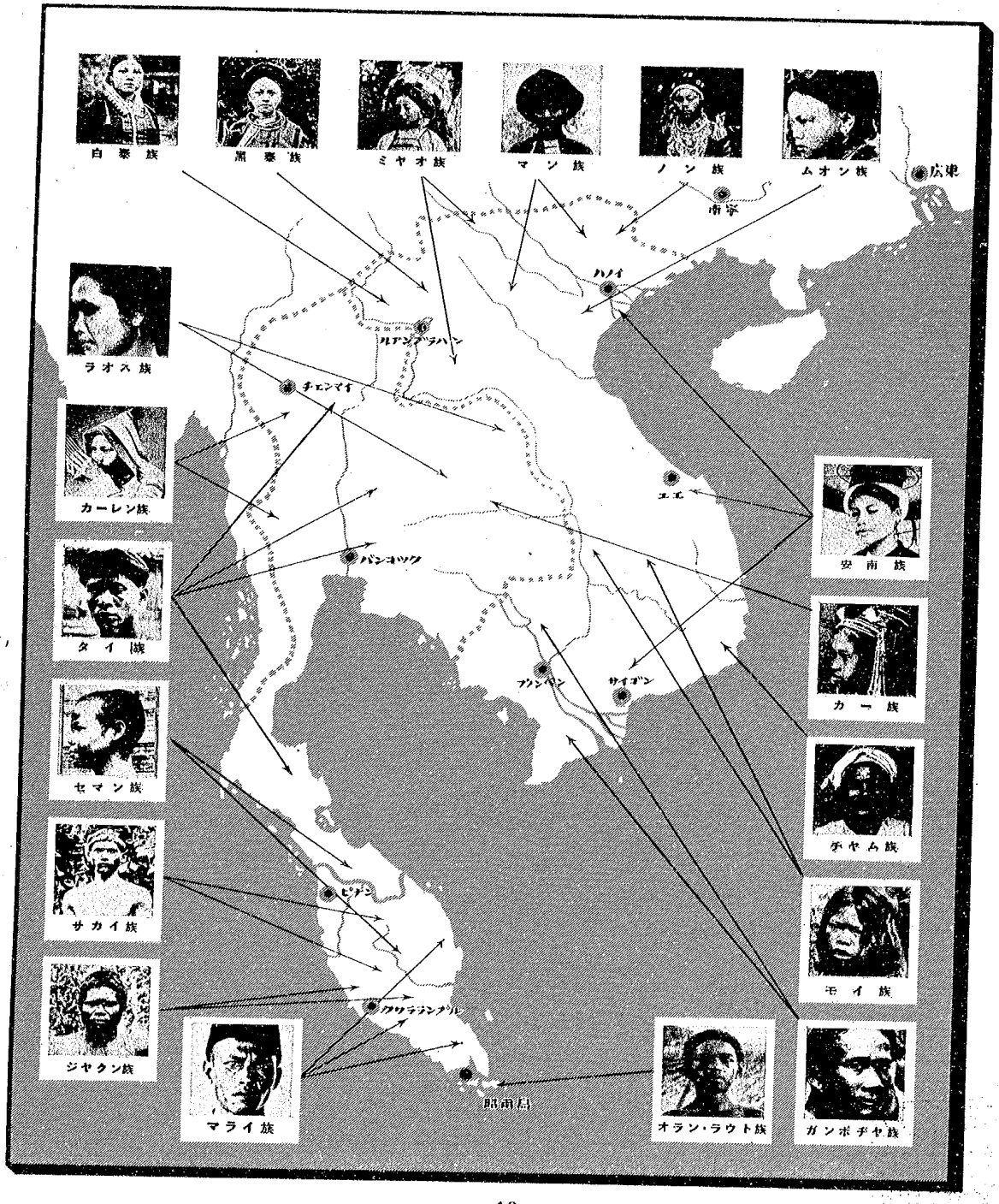
小スンダ列島……79
バリ族……80
その他の諸族……82
ボルネオ……84
カーヤン族……85
ケニヤ族……88
クレマンタン族……89
イバン族……90
ムールート族……92
プナン族……93
セレベス……94
ミナハサ族……95
ブギ族……95
トラジャ族……96
トアラ族……97
フィリッピン諸島……99
ビサヤ族……101
タガログ族……101
イロカノ族……101
ビコール族……102
パンガシナン族……102

アエタ族……102
バゴボ族……104
カリンガ族……105
マンダヤ族……105
スバスン族……106
マノボ族……106
イロンゴット族……107
イゴロット族……108
イフガオ族……110
モロ族……112

印度支那半島民族分布圖……10
東印度諸島民族分布圖……70
フィリッピン民族分布圖……98
參考文献……114

南方民族圖譜

印度支那半島民族分布圖



佛領印度支那

佛領印度支那は印度支那半島の東半部を占め、その總面積 7,404,000 粁（このうちパイクライ、カンボヂャ兩地域の 69,100平方粁を昭和17年7月、タイ國に返還）、中央部は起伏僅少の高原性山地を爲し、西側にはヒマラヤ山系の末端に屬する山脈、北側には雲南山脈に屬する連山が聳え、東側には幾多の山塊より成る安南背梁山脈が弧形を描いて海岸線に並走してゐる。平野は紅河の形成するトンキンデルタ地帶とメコンデルタ地帶に發達し、安南の細長い海岸平野はこの二つの平野を連ねる。

行政的に安南、カンボヂャ、交趾支那、ラオス、トンキンの五地方に分けられるが、純然たる佛領植民地はこれ等の中で交趾支那及びトンキンのみであり、安南、カンボヂャ、ラオス等は保護國とされてゐる。安南には安南王政府が存在し、適度の慣習法が認められ、フランスはこれを監督する形式を採り、カンボヂャにも舊王朝が存續し、ラオスにもまたルアン・プラバン王室が殘存するが、その政治的實權は殆どなく、有名無實に近い。

人口は 23,853,500 で、平均1平方粁當り 31 人であるが、地方別に見ればトンキンは最も稠密で、交趾これに續き、安南、ラオスは最も少い。就中、トンキンデルタ及びメコンデルタ地帶は最も人口密度の稠密なる地域であるが、その周圍の山地に至れば急激に減少する。このデルタ地帶における稠密なる人口を誘引したものは水田耕作であり、この地帶の原住民は民族的にも生產樣式の點からも周圍山地住民と區別される。

民族別人口は**第1表**に示す通りである。卽ち住民の大部分を占めるものは安南族で全人口の 72.4 %、カンボヂャ族がこれに續き 12.7 %、マンその他の原始農耕民はこれ等に比すれば極めて少く 0.9 %、華僑は 1.4 %、ミュンフォン、卽ち華僑と安南人との混血兒は 0.3 %、歐洲人及び日本人を含めた者は僅か 0.2 %に過ぎない。

安南族の人口は年次增加の傾向を示してゐる。試みに全市殆ど安南族によつて占められてゐるハノイ市における 1925 年より 1938 年に至る出生死亡數に就て檢するに、出生數の增加に對し死亡數は低下する傾向を示し（**第2表**）、また全市在住安南人乳幼兒死亡率の如きも年と共に減少しつつある（**第3表**）。

第1表：印度支那半島種族別人口

日本人・歐洲人		47,000
安南族		17,966,000
ムオン族		227,000
タイ族	ラオス族	635,000
	その他	847,000
マン族・ミャオ族		23,000
インドネシア族		1,095,000
カンボヂャ族		3,151,000
ミュンフォン		79,000
マライ族・チャム族		1,121,000
その他の原住民		62,000
支那人		351,000
印度人その他		6,000

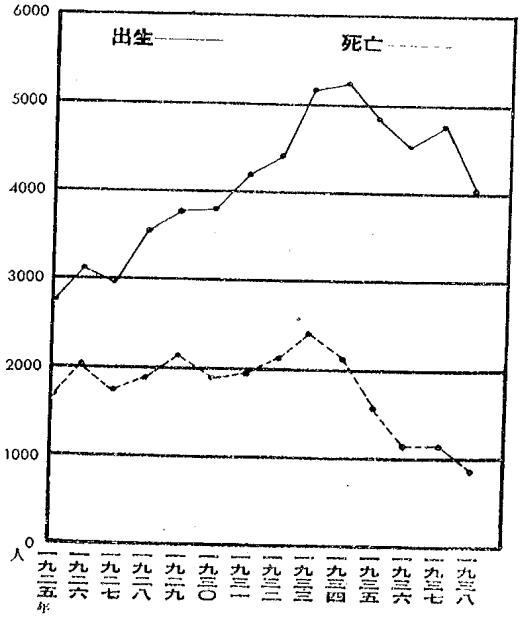
カンボヂャ族の人口動態に關する資料としては據る可きものが發表されてゐないため、これを明らかにし得ないが、一般に安南族と反對に衰退の一路をたどりつつある民族と考へられてゐる。

華僑は主として交趾支那に集中し、以前は原住民より相當の尊敬を受け、安南の明郷王の如きは、その政策として安南婦女と華僑との雜婚を奬勵したとさへ傳へられてゐる。從つて安南族と華僑との混血兒は多數にのぼり、これ等はミュンフォンと呼ばれ、佛印政廳は彼等を華僑と區別して待遇してゐるが、彼等自身もまたその國土に同化し、故國に對する關心は一般に稀薄となる傾向を示してゐる。近年に至つて原住民の華僑に對する感情は昔日とやや異なり、これを輕視する傾向が認められるやうになつたとのことである。然し華僑の多くは米穀、棉花等の取引業に從事し、その經濟的勢力は依然として牢固たるものがある。

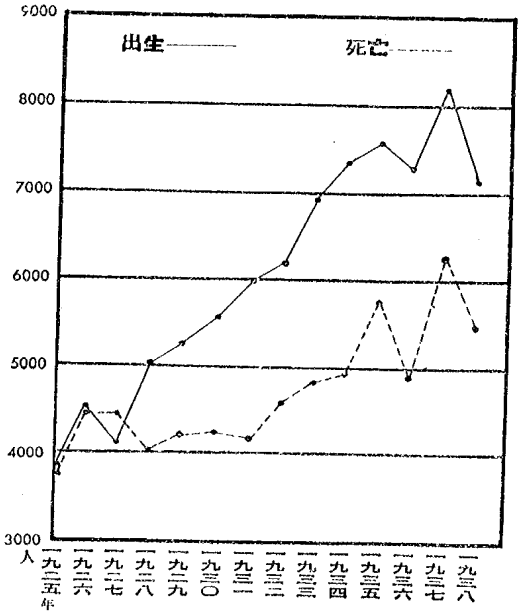
原住民に對する教育の普及は不十分で、文化程度の比較的高い安南族ですら中等學校程度の課程をふむ者は上層階級の子弟に限られ、更に進んで高等教育を受ける者に至つては極めて少い。然し山地において原始鋤耕生活を營む山地原住民の間にも教育思想は漸次普及し、現在これ等の地方に200餘の初等教育程度の學校が設置され、最も原始生活を行ふ部落の子弟の間にすら、そこで教育を受ける者が若干生じたことは、これ等民族の自覺の發露と解することも出來よう。

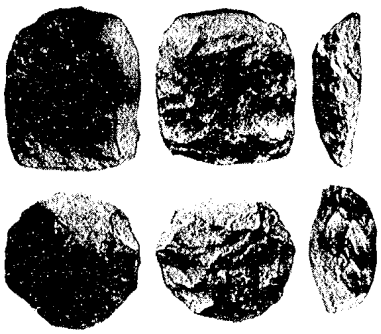
この地方における民族史の曙光は原新石器時代より始まる。明確に舊石器時代に屬すると斷定し得る遺物は、現在のところではまだ發見されてゐない。即ちこの半島に人類が移住し始めたのは、地質學的にいへば沖積紀初頭からであらう。バット、マンスイを經てコラニに至る研究の成果に據れば、印度支那の石器時代はだいたい三つの時期に分れる。第1期はホアビン型石器、第2期はバクソン型石

第2表：ハノイ市安南人出生死亡數



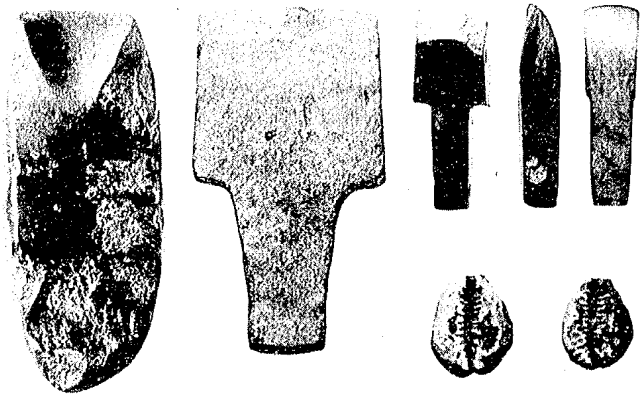
第3表：ハノイ市出生死亡數





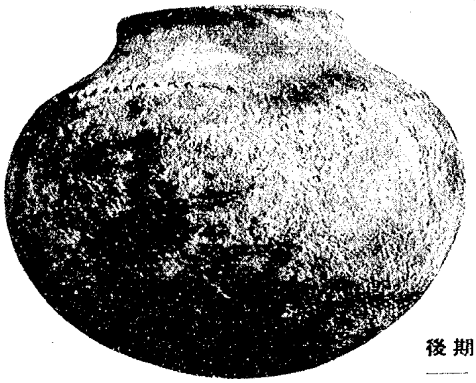
バクソン型石器

ホアビン型石器



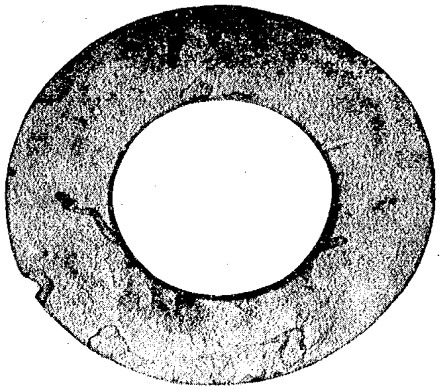
後期石器時代——
有肩石斧・圓鑿石斧

寶貝製飾玉

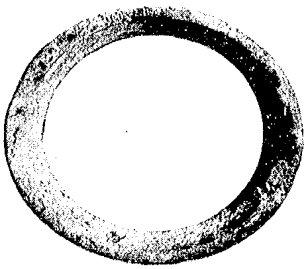


後期石器時代
—— 土器

後期石器時代
—— 土器



後期石器時代
—— 土製耳飾



佛印後期石器時代人骨

ネグリトー的特徴を呈する小兒頭蓋骨並に伴出せる貝製頸飾

器、第3期は有肩石斧によつて標示される。

第1期には石器を磨製する技術を缺き打製のみ行はれ、第2期には僅かに磨製技術を生じ、第3期に至れば磨製技術は極盛に達するが、反對に打製技術は退化する。第1期及び第2期に屬する遺跡は割合に高い臺地の上、或は山間の洞窟内等に發見され、これに反して第3期のものは沖積地に接する比較的低平の地において見出される傾向がある。かくの如き遺跡分布上の差異は、前二者が農耕技術を全く解さなかつた狩獵民であり、後者が極く低度にせよ、とにかく簡單な鋤耕を營んだ原始農耕民であつたため、その住居地域を自ら異にしてゐた結果生じたものと想像される。

また文化階梯の上から見ると、第1期は「中石器時代」乃至「原新石器時代」に屬し、第2期は「新石器時代」、第3期は「新石器時代末期」乃至「金石併用時代」に相當する。この第1期遺物に伴つてメラネシア的特徴を具有した古人骨が發掘されたことによつて、この種の人類は該石器使用者と認定され、彼等の遺跡を探究した結果、「中石器時代」乃至「原新石器時代」には、印度支那半島及びインドネシア諸島の一部は、このメラネシア的民族によつて占據されてゐたことが明らかにされるに至つたのである。

磨製技術を獲得した第2期及び第3期住民は、その骨骼上インドネシア的特徴を示すものも見出される。殊に第3期の民族は最も特徴的なる有肩石斧を使用する者で、既に金屬に對する若干の知識を備へてゐたが、彼等は西北方より移動を開始してこの半島を南下し、舊文化の所有者を驅逐するに至つたのであるといはれてゐる。かかる說の當否は暫く措くも、とに角、この半島部においては、極めて舊い頃から民族の移動と混交のあつたことだけは事實である。

なほドンソンにおいては、第3期に屬する新しい磨製石器類が漢代の銅器類と伴出したが、これによつて印度支那における石器時代の終末期は、だいたい漢代に平衡するものと推定されてゐる。

印度支那の歷史は、卽ち印度支那半島に割據する諸民族の興亡史である。トンキン、メコンデルタは地味豐饒で、米作も最も適する地帶であり、人口も最も稠密で、何れも古來

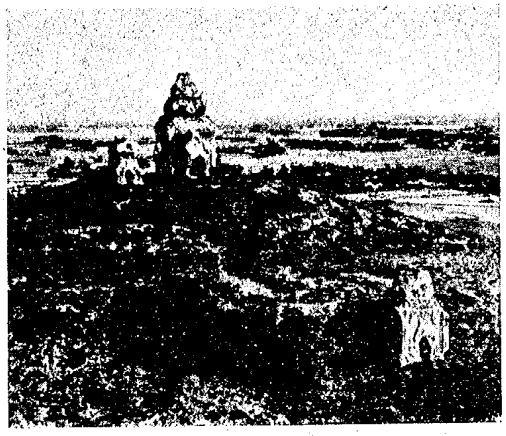
この半島部における文化の中心を形成し、トンキンデルタは安南族、メコンデルタはカンボヂャ族、メナムデルタには泰族が占據し、互に民族的爭覇を繼續し、一方この半島部の北邊に勢力を伸張した漢族は絶えず半島內部へ侵入の機を窺ひ、テナセリウム山脈の西側のビルマ族は常にメコンデルタ地帶に進出することを企圖した。

古代安南族は、西紀前6世紀頃、浙江省を中心として發展した越國人と流を一にし、この國が楚によつて滅ぼされたのち、越人は集團的に南遷し、その一分派の西甌（貉越）は更に南下してトンキンデルタ地帶に移住してここに封建的國家を建設した。然しこの地方は秦の遠征によつてその領土と化したが、秦末の爭亂に乘じ南海尉、趙佗なる者が自立し甌貉、桂林、南海に據つて南越國を建て、武王と稱した。然し南越は永續せず、漢武帝の平定するところとなつた（前111年）。

その後、漢族の施政方針に不滿を持つた安南民族は西紀 40 年に至つて徵姉妹と稱する女傑が主謀者となり再獨立を計つたが、僅か4年にして漢光武帝の將馬援によつて壓伏され、全く漢族の支配するところとなつた。

そののち安南族は唐末の內亂に乘じ再び獨立運動を開始し、吳權がその指導者となり、遂にこれに成功し、この獨立によつて安南に對する支那の支配權は一時完全に消失した（939 年）。然し治世宜しきを得ず國政紊亂し、1010 年、李公蘊が大越を建て、內政に力を盡すに及んで初めて平靜に歸した。內治に成功した李朝は宋の遠征軍を擊破し、轉じて從來南境を窺ひ續けた占城國征討を企て、その首都を陷れ、これを降伏せしめた。占城（占婆、林邑ともいふ）は安南の南部及び交趾支那北部一帶の地にチャム族によつて建設された國家で、印度文明の影響を受けた古代文明國の一であり、漢族が安南を支配してゐた時代から屢々その南境に進出を試みたことがある。

1257 年，元の世祖は安南征服を企て、數回に亘り遠征軍を派遣したが、安南族は宿敵に

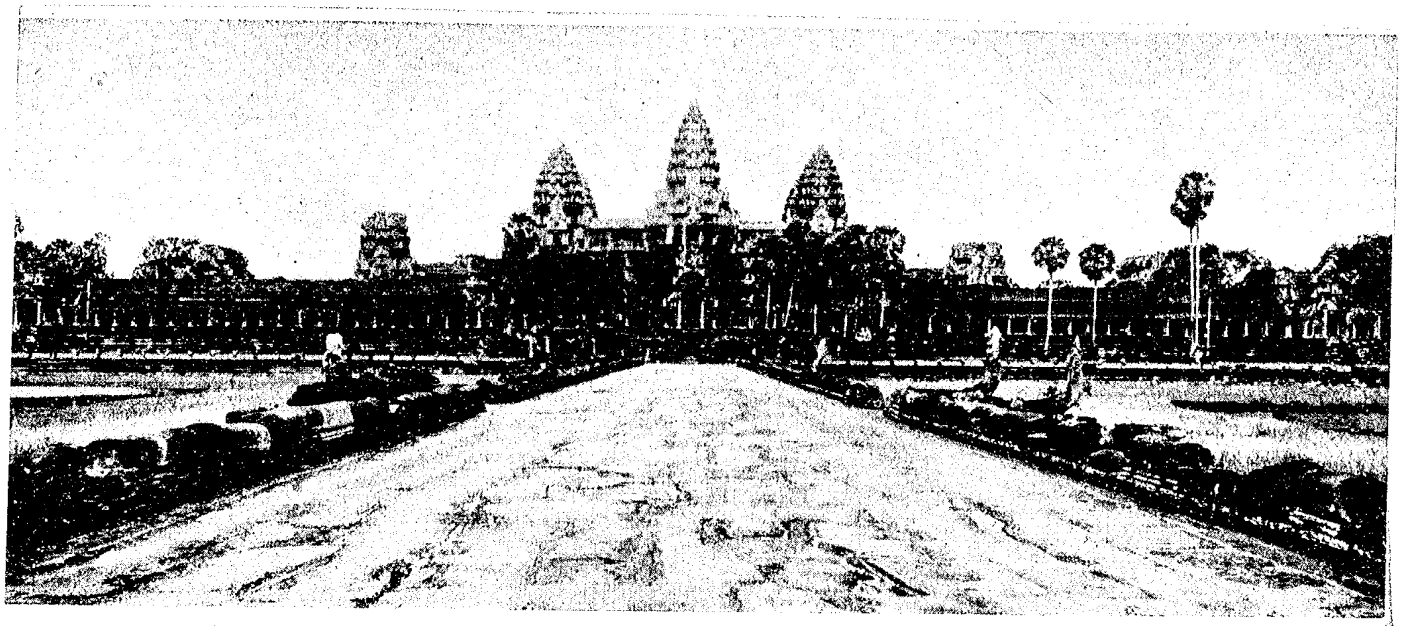


チャム族の古塔

る占城と結合してこの外寇に當り、勇戰奮鬪よくその企圖を挫折せしめることを得た。然し占城との和平は永續せず、戰ひ終るや再びこの間に抗爭が開始された。

他方、支那民族はその傳統的政策である安南征定の野望を放棄することなく、明の成祖は大軍を以て侵略し、極端なる同化政策を行ひ、文身染齒の風及び檳榔樹の實を嚙む風を禁止し、安南族の日常生活を徹底的に支那化するやうな政略を用ひたが、これは却つて逆効果を生じ、安南族の反抗を買つた。その結果、1428 年、黎利なる者が現れて明の勢力を驅逐し、黎朝を組織した。そして 1470 年には占城を陷れ、これを朝貢せしめ、チャム族國家衰亡の緒を開いた。

占城の西方に扶南といふ國が舊くからあつた。これに就て晉書扶南傳に『扶南は林邑の西三千餘里、大灣中にあり、領土は三千里もあり、城市宮城がある。住民は皮膚が黑く、拳髮裸體跣足である。性正直、掠盜を行はず、耕作を爲し、一度播種すれば三年の收獲がある。精巧な彫刻を好み、食器は銀製品を使用する。貢物には金銀寶珠、香料を以て賦め、府庫を有し、文字は胡の文字に似てゐる。葬婚の風は林邑と同樣である。國王は女子で葉柳といつた云々』と誌されてゐる。また南齊書、梁書、新唐書等にも、これに關する大同



アンコール・ワット全景

小異の記事が見えてゐる。

この扶南國の建國の時期は明らかでないが、それは一種の封建國家であつて、その最盛時における領域はカンボヂャ、交趾支那、タイ國等を包有し、マライ半島の一部にまで及んでゐたものらしい。6世紀の中頃、その統治下にあつたカンボヂャは自立し、扶南を攻略して、その支配權を獲得した。眞臘が卽ちこれである。

眞臘國に就ては隋書、舊唐書、新唐書等にその輪廓を述べた記事を散見することが出來る。殊に新唐書に『眞臘は一名吉蔑(クメー)といつて、もと扶南の屬國であつた云々』とあり、それがクメール族の國家であつたことを明示してゐる。この國は8世紀に至つて水眞臘と陸眞臘に分裂し、相抗爭したが間もなく統一され、その版圖は昔の扶南國に匹敵するものとなつた。アンコールワット寺院の建設やアンコールトム都市の設立は、印度文化を受容したこの國の最盛期文化を象徴するものである。然し1394年、この國の疲弊に乘じ泰族はこれに侵入し、爾來、この兩民族間の抗爭は繼續的に行はれ、加ふるに占城を征服した安南の攻擊にあつて疲弊の極に達し、遂に1863年、フランスの謀略によつてその保護領と化し、フランスはここに全印度支那征壓の基地を獲得した。

安南族が漢族の數次の征略と絶えざる壓力とを受け、しかも屢々征服されつつも、その都度頑強に反撥し、同民族による獨立國家を組織し得たのは、ひとへに比較的單一民族より成立する國家特有の民族的凝結と、同民族の人的資源の豐富とに基くものであり、彼等が現在においても強く心に懷いてゐる愛鄉の精神は、漢民族の脅威によつて傳統的に育成されたものと考へることが出來る。

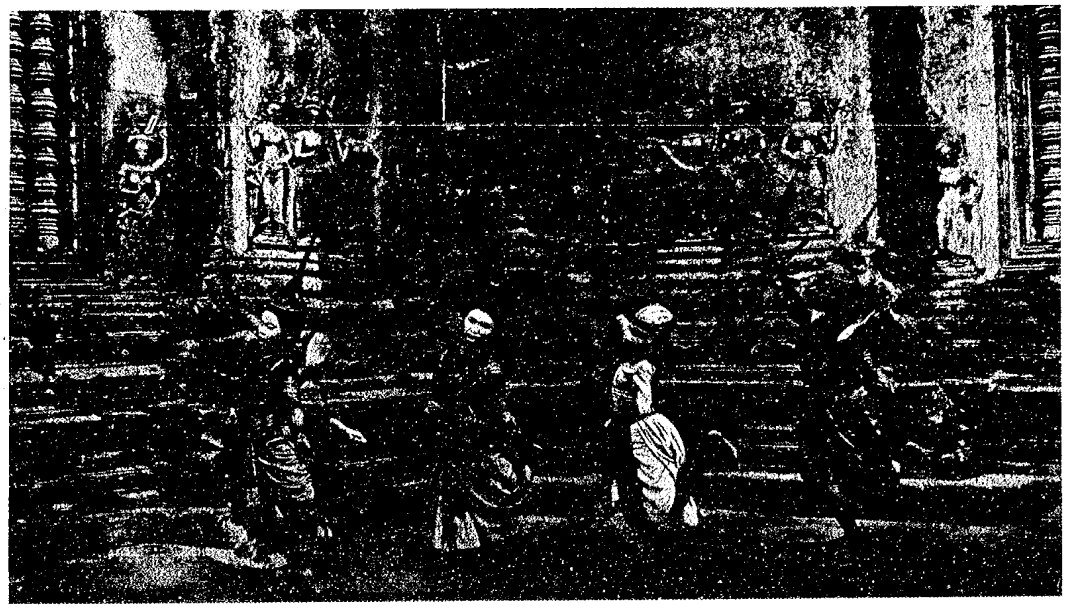
これに反して印度文明を受容し、扶南、眞臘の如き古代文明國家を組織したカンボヂャ族が周邊の諸民族より壓縮せられ、今日の如き悲境におかれるに至つたのは、これ等の國家が幾多の異民族より成る封建國家であつた結果、內部的崩壞を生じ、嘗て統率せる小國家により反攻されたためである。

古代安南族の文化は、主として漢族のそれの影響のもとに育成されたものであり、カンボヂャ文化は印度文明の傳統を引いたものであつた。現代の彼等が保持する文化は、安南族においては彼等が漢族の支配に絶えず反抗しつつも、その日常生活においては階級の如何を問はず、彼等の影響を多分に受けてゐる。これに反しカンボヂャ族は、その上層階級者の生活、或は特殊行事、舞踊等において

"ヴィシュヌ神の勝利"

"アプサラの踊子"

アンコール・ワットの浮彫



アンコール・ワット内で踊るカンボヂャの踊子

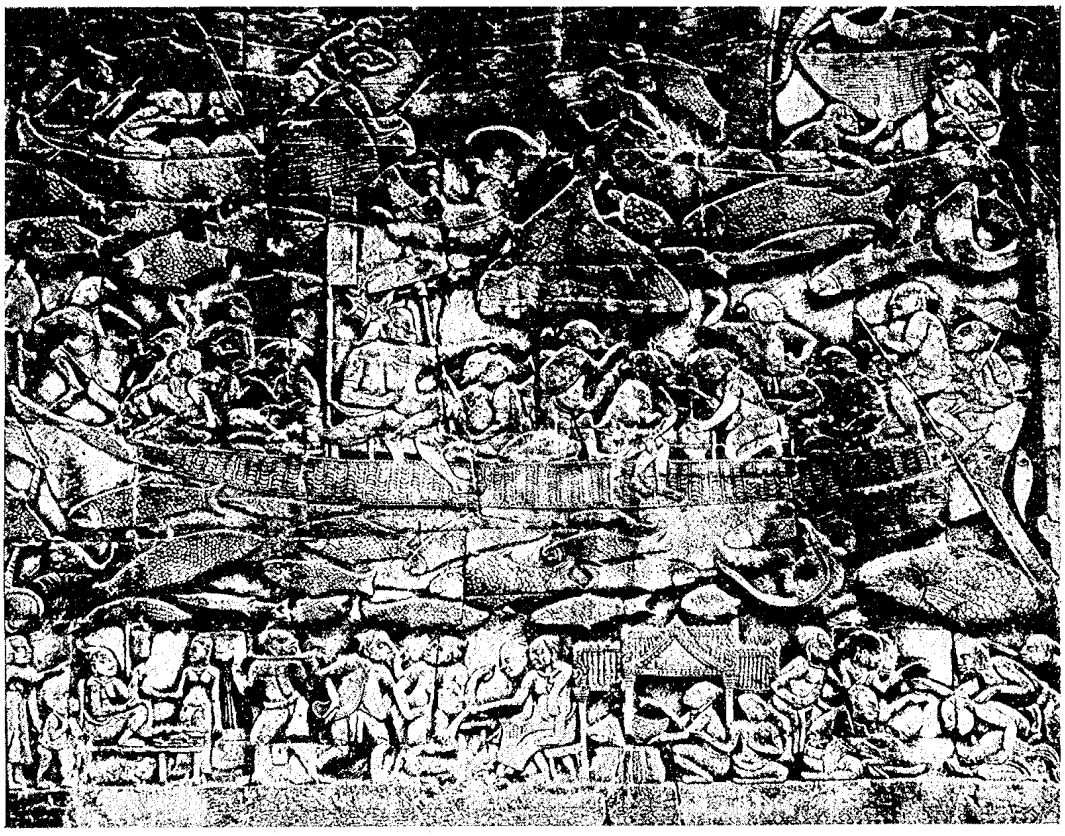
こそ、印度文明の傳統を保有してゐるが、他にその見る可きものを殘しいゐない。かやうな現象は執拗にして侵潤性に富める支那文明と、絢爛たるものはあるが浸透性に乏しい印度文明の性格とを反映してゐるものとも考へられるのである。

印度支那半島における民族の分布は、極めて錯雜した狀態にある。

佛領印度支那において最も有力なる民族は安南族である。彼等は現在もトンキン、安南平野に占據し、その民族史の示す如く强靱なる肉體と性格を未だに保有してゐる。これに反して嘗て安南族と匹敵する强力國家を組織し壯麗なる古代文明を展開せしめたカンボヂャ族は、體質的にはマライ、タイ、ヒンヅーの血を混へたもので、約200年前に安南族がカンボヂャに南下する以前には同地方の大部分を占有してゐたが、漸次、後來者に壓迫され、現在ではその一隅に偏在してゐる。またマライ系民族で往年の占城國の建設者であつたチャム族は安南の南部及びカンボヂャの一部に蹋踏し、昔日の面影を全く消失した敗殘民族として生存を續けてゐる。ラオス地方にはタイ族と體質的にも文化的にも近緣を持つラオス族がゐる。

少數民族としてはトンキン北部山地にマン(蠻)、ドン・ヴァン、及びムオン・クン、タイの北部山地に苗、パオ・ロクにはロロ(猓玀)、パ・カ、ムオン・クンにはシャンの一族であるパイ・イ(擺夷、白夷)、ホアン・ス・ピイ、ドン・ヴァンにはリャオ(獠)、トウジェン(獞人)等の諸族が居住する。

(左) アンコール・トムのバイヨン塔の一部——ヒンヅー藝術の傳統を繼承してゐるが、人物の容貌はクメール族の人種的特徴を正確に表現してゐる。(右) アンコール・トムの北城門



バイヨン塔下部廣間內の浮彫・古代クメール族の生活風俗を示す

彼等は何れも南支奥地にかけて分布するもので、マン族はヤオ(猺)族とも呼ばれ、トンキン北部のものはその風俗の上からマン・ラン・タン、マン・タ・パン、マン・シャオ・パン、その他の諸部族に分類され、苗族もまた衣服の色彩に基いて白苗、黑苗、青苗、花苗等に分けられてゐる。

この他トウジェン（土人）は明江流域に、白泰族は東北部ソンチャイ、紅河、黑河上流地帶に、黑泰族は黑河沿岸地方に占據してゐる。これ等はいづれも山地居住民であるが、ただミュオン族はトンキン平野、紅河及び黑河の沿岸の低地に進出してゐる點で、他とやや趣を異にしてゐる。

以上の諸民族のうち、安南族、カンボヂャ族及びラオス族は多少高い文化を持ち、他の少數民族も既に未開狀態を逸脫してゐる。

印度支那半島における先住民族の殘存物と考へられてゐるのは、安南山地に現在でも未開生活を送つてゐるモイ族である。モイ族とはこれら山地原住民の總稱で、安南語で蠻族の意を持つ稱呼である。彼等は言語と體質とを異にする幾多の部族より成るが、大體においてインドネシア系民族と考へられ、印度支那居住の他の民族とは文化的にも體質的にも顯著なる相違を示してゐる。

安南族の男子

安南族の女子

安　南　族

佛領印度支那、トンキン平野、安南及び交趾支那の海岸地帶、及びタイ國の一部に分布し、人口 17,966,000、身長 159.0糎（トンキン）157.1糎（交趾）、頭型指數 83.8（トンキン）82.8（交趾）、鼻型指數 86.0（トンキン）83.3（交趾）、體軀均齊は比較的よく、顏面は幅が廣く多少扁平で、皮膚の色はチョコレート色、或は黃白色を呈し、黑色の硬い直毛を持つてゐる。

衣服は支那服と類似し、男子は側面で留める長衣を着け、寬いズボンをはく。女子の服も男子のそれと同樣であるが、ただ色調が多少異つてゐる。男子は髮を短く刈り、女子は髻に結つてターバンをまき、外出には蒲葵で編んだ笠を用ひ、齒を黑く染める風がある。

主食は米で、玉蜀黍もまた代用食として食用に供される。副食物は野菜、魚、鷄、豚で調理法は支那料理の影響を強く受けてゐる。調味料としては魚醬が使用される。魚醬は魚肉に塩を入れ醱酵させて造る。

家は大體において支那建築の延長で、高床建築はない。屋根は草葺、又は瓦葺で、壁は普通土壁で、軒は地上に低く垂れ、窓は小さく、その數も少い。從つて室內は常に薄暗く陰氣で、住心地が惡さうである。かやうな建築樣式は、ハノイ、トンキンの如き極めて高溫多濕なる夏に見舞はれる地方には、一見甚だ不適當なものの如くに考へられるが、それにもかかはらず傳統的にこの樣式が踏襲されてゐるのは、その土壁と屋根とが高溫なる外氣を遮斷し、室內溫度を多少低く保たしめるためであるといふ。屋內は數室に分割され、中央に客間を取り祭壇を置く。

彼等の性格はやや傲慢なところもあるが、祖國や鄉土に對する愛情は相當強烈である。

安南族の大半は農業生活を營み、主として水田耕作に從事してゐる。農業樣式は水牛を使役する犂耕で、灌漑設備、收獲法等は一般に原始的である。

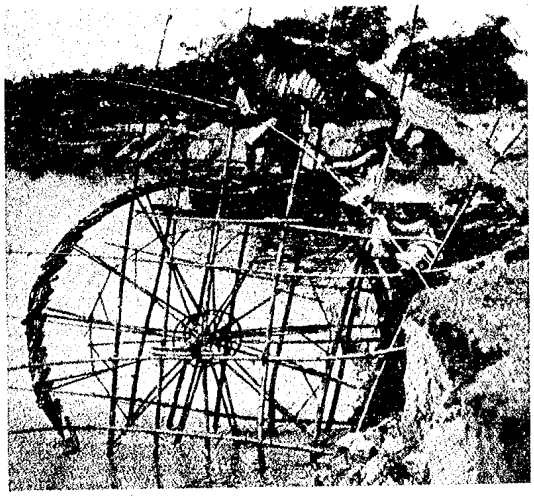
家族制度は父長制で祖先崇拜を根幹としてをり、相續權は長男がこれを確保する。妻の權限は微弱で、一夫多妻が認められてゐる。

宗教は佛教、道教等が支配的であるが、その教理はあまり理解されず、精靈崇拜から派生したと考へられる一種の迷信が、これらの中に浸透してゐる。

安南の水田

安南の漁村

安南の漁夫



安南の灌漑法

安南の物資婦

カンボヂャ族の男子

カンボヂャの舞姫

カンボヂャの女漁師

アンコール・ワットに祈るカンボヂャ人

カンボヂャ族の住居

カンボデヤ族

カンボヂヤ地方及びタイ國のこれに接する地域に居住し、人口 3,151,000、クメールと自稱してゐる。身長 166.39 糎、頭型指數 82.4、毛髪は波狀を呈し、眼は往々にして斜眼のものもある。その人種系統についてハッドンは、クイ、マライ及びヒンヅーの諸族の混血したものであらうと說いてゐる。

男子は木綿の上衣をまとひ、褌を穿つ。女子の服裝もこれとほぼ同樣であるが、時には肩掛と腰卷を用ひることもある。裝身具としては腕輪、頸飾等を好み、耳に穿孔して栓狀を呈する象牙、或は木製の耳飾を附ける。

米を主食とし、玉蜀黍を以てこれを補ひ、獸魚肉、野菜を副食物とする。食事は一日に二回とり、右手で手掴みにして食ふ。煙草を好み、檳榔の實を嚙む。水稻を栽培し、耕作には水牛を使用する。家畜としては水牛、豚、鷄、その他がある。

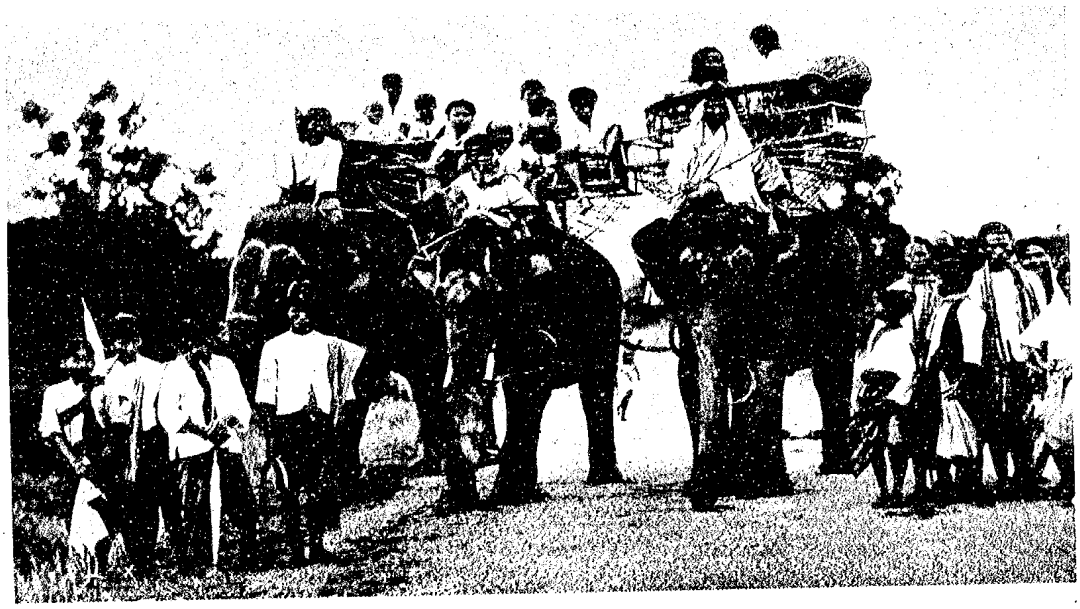
家は高床住居で、屋根はアタップといふ木の葉をもつて葺き、壁にもまたこれを用ひる。入口には階段、或は梯子を設け、これを上れば直ちに居室となる。入口の左右に小窓を設け、突上戸を裝備する。室內には床と臺座があり、臺座には身分の高い者がすわる。性情は溫順で、禮儀正しく、善良であるが、その反面、無氣力で怠惰であるといふ。

農業、漁業等に從事してゐるが、その技術は原始的である。織物その他の手工藝に長じ、民藝品には優れたものもある。

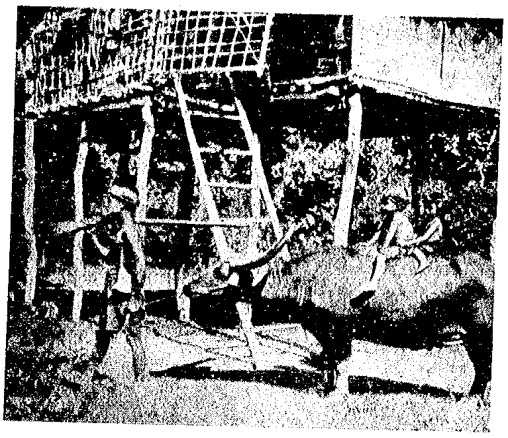
父長制であり、女子の社會的位置は低く、一夫多妻が認められてゐるが、これには正妻の承認を必要とする。

宗教は佛教（小乘佛教）で、住民の間に根强く浸潤し、僧侶（ボンズ）の社會的勢力は著しい。僧院における戒律は表面的には甚だ嚴格であり、僧侶は五戒を嚴奉し、托鉢によつて生活する。

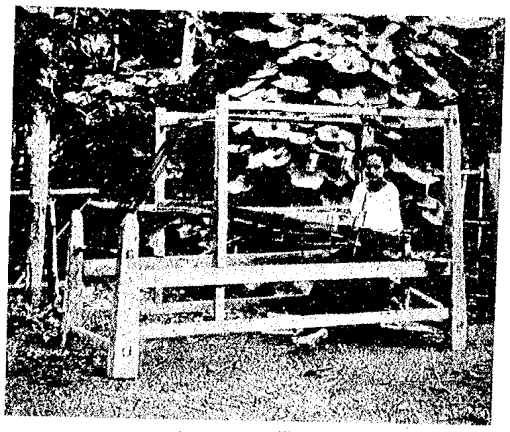
死者は體を白い經帷巾で包み、口に銀貨、或は金銀環をふくませ、納棺して火葬とする。



古來、カンボヂヤ族の交通機關として重要な位置を占める象



ラオス族の高床家屋



ラオス族の機織婦

ラ　オ　ス　族

佛印ラオス地方及びタイ國の西南部に分布し、人口 635,000、身長 159糎、頭型指數 83.6、均齊的な體軀を有する。

男子は下半身に腰卷をつけ、その端を股間を通して腰邊にとめるサンポットと呼ばれる一種の褌をつけ、上半身には縞模様のある肩掛を用ひ、女子は縞織の腰卷と肩掛とを使用する。地方によつて文身を行ふ風があり、その文様は龍を主題とし、青、赤、黑等の顏料を使用する。この文身は猛獸の害をさける効果があると信じられてゐる。

食事は米飯をむすびとし、これにカレーの如きものをつけて食ふ。野菜、牛豚、魚肉等を副食物とし、魚醬に類似するパデックと呼ぶものを調味料とする。

農業によつて生活するが、多くの場合これは女子の任務である。主として水稻が作られ耕作には水牛が使役される。男子は叢林中において狩獵を行ひ、又は河川に入つて漁をなす。狩には弩弓、各種の罠の類が使用される。特に猛獸を捕へる罠の類には、堅牢且つ的確な裝置を持つものが工夫されてゐる。漁勞には投網、簗等が用ひられる。

ラオス族の弩弓

ラオス族の陷穽・鋭い竹の櫛

ラオス族の男子

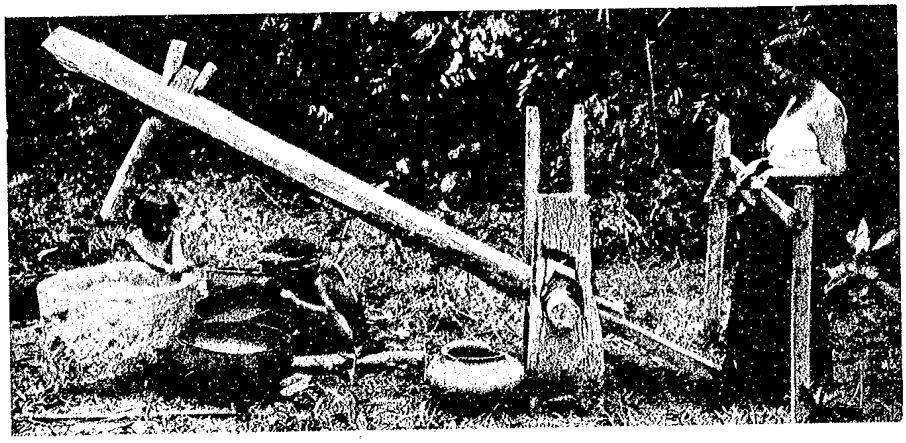
ラオス族の女子

家は高床家屋で、入口は東方に面し、前面に露臺風のものを設けたものもある。階段によつて出入し、床下は物置や家畜置場に利用される。

父長制で、女子の位置は低く、蓄妾の風が認められてゐる。

宗教は小乘佛教であるが、教理は殆ど理解されてゐないし、一般には精靈崇拜の要素が多分に殘存してゐる。然し僧侶は彼等の間において唯一の知識階級者で、教育にも從事してゐる。戒律は嚴しく、托鉢によつて生活する。

死者があれば遺骸を棺に納め、これを一定の期間その家に安置する。長いのは半年から1年に及ぶものもある。その後これを荼毘に附す。變死者の屍體は火葬されず、そのまゝ土に埋められる。然し土葬者の靈は昇天し得ないと信じられてゐる。



ラオス族の米搗

チャム族の頭目と婦

チャム族

チャム族は嘗て印度文明を受容し、この半島に覇を唱へた古城王國建設民族の後裔であるが、現在では極度に衰退し、全く昔日の面影なく、僅かに安南の南部及びカンボヂャに蹲踞し、余喘を保つ老衰民族で、その人口は10萬くらゐである。

頭型指數 83.2、鼻は鷲鼻で、眼は涙阜壁を持つものがなく、波狀の縮毛を有し、暗色の皮膚を持つてゐる。

チャム族の言語はマライシア語系と類似し、印度起原の文字によつて示された彼等の言語は、フィリッピンの方言を彷彿せしめるものがある。彼等はマライ族にインドユーロピアンの血を混へたものと考へられてゐる。

女子は暗綠の胸衣に赤、綠等の縞のあるスカートをつけ、ターバンを卷き、象牙、又は木製の耳環をはめ、富裕なるものは金銀で造つた耳輪や聯珠を頸にかけ、男は袴をつけ、長い上衣を着て、ターバンを卷く。

米を主食とし、農耕生活を營む。主として水稻を作り、耕作には水牛を使役する。

家は高床家屋で、母系制度を持ち、宗教は回教と婆羅門教を信奉する。婆羅門教は古城國時代に繁榮したもので、現在安南方面に居住する住民は多くこれを固守してゐる。回教は 7-8 世紀頃、アラビア人によつて布教されたものといはれてゐる。回教徒は土葬、婆羅門教徒は火葬を行ふ。

マン（蠻）族

マン族は支那廣西省、廣東省、雲南省、湖南省の一部に現住するヤオ(猺)族の別派をなすものといはれてゐる。佛印においてはトンキン北部山地から國境地帶に分布し、その人口約 106,000 を算する。身長は 158.3 糎、頭型指數 78.12（トンキン山地）、角張つた顏面と稍く肥厚した口唇を持ち、頭髮は直毛で黑く皮膚の色は黃味がかつた褐色を呈する。

マン・ラン・タン(蠻藍靛)、マン・タ・パン（蠻戴板）、マン・クッン・チャン（蠻裙妝）、マン・シャン・イ（蠻青衣）、マン・カオ・ラン（蠻高欄）等の諸部族に分たれてゐる。概して勤勉な農業生活者で、平和的である。

マン・ラン・タン(蠻藍靛)族

マン・ラン・タン族はトンキン北部山地及び雲南に接する地帶に占據し、マン族中の代表部族である。身長 158.6 糎、藍衣を纏ふ故、この名がある。

男子は支那風の上衣を纏ひ、短いズボンをはき、ターバンを頭にまく。女子の上衣は長く、下に寬いズボンをつけ、帶をしめる。服の色は兩性共に青色のものを用ひ、女子の服は華美に刺繍されてゐる。女子は眞鍮、或は銀製の耳輪、頸飾類をつけ、頭髮を中央で分けて髷に結び、上に刺繍したターバンを卷く。

家は床の高くない普通の住居で、屋根は草をもつて葺く。

米、玉蜀黍を主食とし、野菜、豚、鶏肉を副食物とする。原始的な燒畑耕作を行ひ、共同勞働をなし、收獲物は公平に分配される。

父長制が行はれ、一夫多妻が容認されてゐる。宗教は精靈崇拜で、巫術師の權力は強い。

結婚は男子の家で擧行され、式には酒盃が交換される。式の費用は夫の負擔であるが、もしこれを支出し得ない場合、夫は妻の家の勞務に服さねばならない。

死者はその口中に錢、或は穀粒を含ませ、土葬、又は火葬とする。

マン・ラン・タン族の女子

マン・ラン・タン族の家の內部

マン族の女子

マン・タ・パン(蠻戴板)族

角蠻とも呼ばれてゐる。何れの名稱もその女子の頭部に角狀の突起を有する帽を戴くことに由來する。トンキン北部の保祿、パ・カ、フォン・ト等に居住し、身長 159.84 糎、風習、家屋等はマン・ラン・タン族と相似してゐる。

女子の禮服は極めて綿密なる刺繍を施した胴衣の上に、胸の開いた上衣を纏ひ、下には紺地に色糸で刺繍したスカートをはく。男子の服裝は蠻藍靛と大差ない。

護符として錢を上衣の前面につけ、或は細紐で頸飾風につるすため、安南族によつて蠻錢とも呼ばれてゐる。

米、玉蜀黍等を主食とする。稻は水稻、陸稻ともに用ゐられ、後者は燒畑耕作によつてこれを栽培する。

男女の交際は自由であるが、婚姻は媒妁人の手を通じて行はれる。

屍體は棺に納め、火葬とする。

この他、マン・クゥン・チャン族はハオハ附近に分布し、裝飾はマン・ラン・タン族と類似するが、家屋は高床住居を營む。

黑泰族の少女

マン・タ・パン族の女子——正裝——夫婦

白泰族の娘の踊

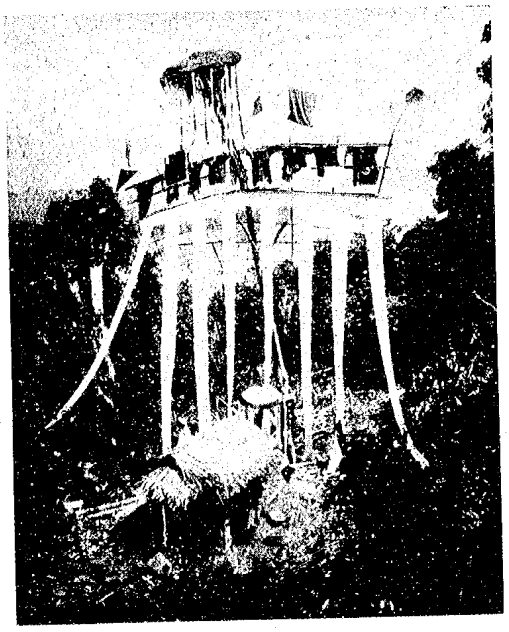
白泰族・黒泰族

白泰族はトンキン族の北部、ソンチャイの上流、紅河及び黒河の流域に、黒泰族はトンキンの北部、黒河に沿ふビン・ル、フォン・ト、パ・カ、ホアン・ス・ビイ等に居住する。身長157.2糎、頭型指數は 81.1、鼻型指數 94.9。

白泰族は青、又は白色の上衣、黒泰族は紺色の上衣を着用し、ズボンをはく。上衣の前面は肋骨狀飾紐のあるボタンで留める。頭にはターバンを卷き、或は編笠をかぶる。裝身具としては耳輪、頸飾等が愛用される。

農業に從事し、米を主食とする。高床家屋に住み、女子の社會的位置は低い。宗教は精靈崇拜で、村には守護神が祀られる。

白泰族は土葬を行ひ、黒泰族は火葬を行ふ。墓には小屋を建て、死者の生前使用した器物を置く。



白泰族の墓・生前に使用したものを飾る

ノ　ン（儂）族

高平東部より老開に至る國境地帶に分布し人口約8萬、比較的均齊のとれた體軀を持つ。身長 159.5 糎、頭型指數 80.5。

男子は上衣と長い股引をはき、ターバンを卷く。女子は上衣と股引をつけ、長いスカートを纏ふ。女子の上衣及びスカートには細かい刺繍を施す。髪を束ねて髻に結び、上にターバンをまく。場合によつてはこの上に更に頭巾を冠ることもある。裝身具を好み、腕輪、耳輪、頸輪をつけ、その多きを誇る。

家は高床に作るが、地方によつて普通の家屋にも住む。屋内は數室に分割され、屋根は草をもつて葺く。

主食は玉蜀黍と米である。水稻、陸稻ともに耕作され、男女とも耕作に從事し、水田にはこれを守護する龍神の像が安置されてゐる。

夫長制で家長の權力は強く、長子相續が行はれてゐる。

ノン族の女子

パイ・イ族の女子

ノン族の住居

竹の水筒を背負ふ花苗族の女

花苗族の女子

ミャオ（苗）族

トンキン地帶のドン・ヴァン、ムオン・クン及びタイ國北部の標高 1,000 米前後の山岳地帶に居住し、人口約 77,000 、その本據は南支那の貴州、雲南、廣西、湖南等にある。印度支那、タイ國に分布する者は、漢族の壓迫によつて比較的近年に南支國境地帶からこの方面に移住して來たといはれてゐる。風俗、習慣及び言語の上から、黑苗、白苗、紅苗、花苗等に分かれてゐる。

身長 155.7 糎、頭型指數 80.2、淚阜壁を持つ者が多い。一般にロロと稍〻類似するが、更に他の民族の血を混へてゐる。

男子の衣服は支那服と類似する上衣と股引より成り、頭部にはターバンを卷く。女子は長い上衣を着け、下にはスカートをはく。い

罌粟畑の苗族

苗族の部落

ピュメオ族の女子

づれも精緻なる刺繍によつて裝飾され、頭部にはターバンを卷き、銀、眞鍮製の耳輪、硝子玉その他の裝飾品をつける。

聚落は1,000米前後の山地に營まれ、普通6-7戸内外の住居より成り、住居は掘立小屋で、そのプランは長方形を呈し、屋根は草葺、又はこけら葺で、たいてい居間と寢室と臺所とに分割されてゐる。床は踏み固めた土床で、居間の一隅には竈が設置されてゐる。

米及び玉蜀黍を主食とし、蕎麥、芋、豆類等を副食物とする。米は高地居住民の間では陸稻が鋤耕され、低地に近接する居住民の間では水稻が犂耕によつて作られる。以上の作物のほかに、彼等は罌粟を栽培し、阿片の原料として支那人と交易し、一方、彼等自身もこれを消費する。

家畜としては牛、水牛、馬、豚、鷄等がある。水牛は一部の者によつて耕作に使役され、馬は乘用、駄用に、豚は食用に供される。

宗教は精靈崇拜で、竈神の信仰が行はれてゐる。

性質は勤勉で勞働をいとはないが、激昂し易く、その結果凶暴性を發揮する事もある。

黑苗族の男女

モイ族の夫婦

彼等の生活は極めて原始的である。衣服は普通、男女とも半裸體で、下半身に腰卷を纏ふのみである。部族によつて男は腰卷の代りに褌を用ひることもある。女は盛裝のときに短い上衣を着け、飾玉をかける。女は髪を束ね、男はターバンを卷く。男女とも耳朶に穿孔し、そこに竹や象牙で造つた管狀、或は滑車狀の耳飾を挿入したり、眞鍮製の耳環を下げたりする。手頸には針金を螺線狀に卷いて腕輪としてゐる。

食物は米と玉蜀黍を主食とし、瓜類、芋類等をも併用する。豚その他の獸肉は彼等の好むところであるが、時には蛇、蜥蜴、昆虫類をも捕食する。

狩獵は男子の仕事であり、獵具としては主として磐弓が使用され、矢には時として毒が塗布されることがある。この矢毒はイボ樹

モ　イ　族

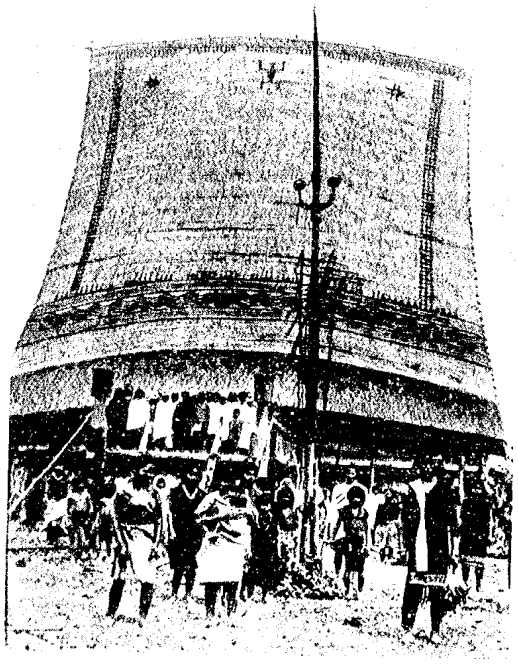
安南山脈の山中に原始生活を營む原住民を普通モイ族と總稱してゐる。然しモイといふのは安南族が彼等に與へた名稱で、カンボヂャ族はこれをプノン、ラオス族はカーと呼んでゐる。すべて命名者の言葉で蠻族を意味する。彼等はジャライ、スダン、ラーデ、カー、プノン、ピュモンその他多くの小部族に分れ、その間に體質、言語等を多少異にしてゐる。彼等に關する詳細なる人類學的、民族學的調査は行はれてゐないが、常識的にインドネシア族の一部に屬するものと考へられてゐる。

ハッドンは彼等の體質に對して頭型指數77.5、身長158.5糎等の數値を擧げてゐるが、いづれの部族において得た成績であるか、明瞭でない。

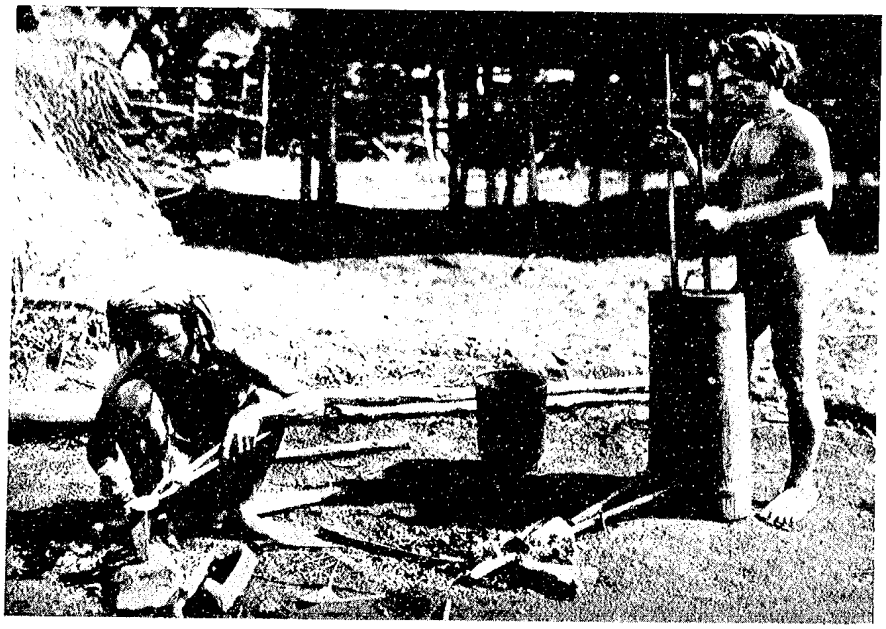
モイ族が印度支那半島に移住して來た時代は極めて古いらしく、その分野も以前は遙かに廣範圍に亘り、平原地帶にまで及んでゐたものらしい。然しその後に移動して來た安南族、カンボヂャ族、タイ族等によつて漸次山間の僻地に追込れてしまつたものであるといふ。

モイ族の女子・耳朶に栓狀耳飾をはめ手頸には眞鍮製の針金を螺旋狀に卷いて釧とする

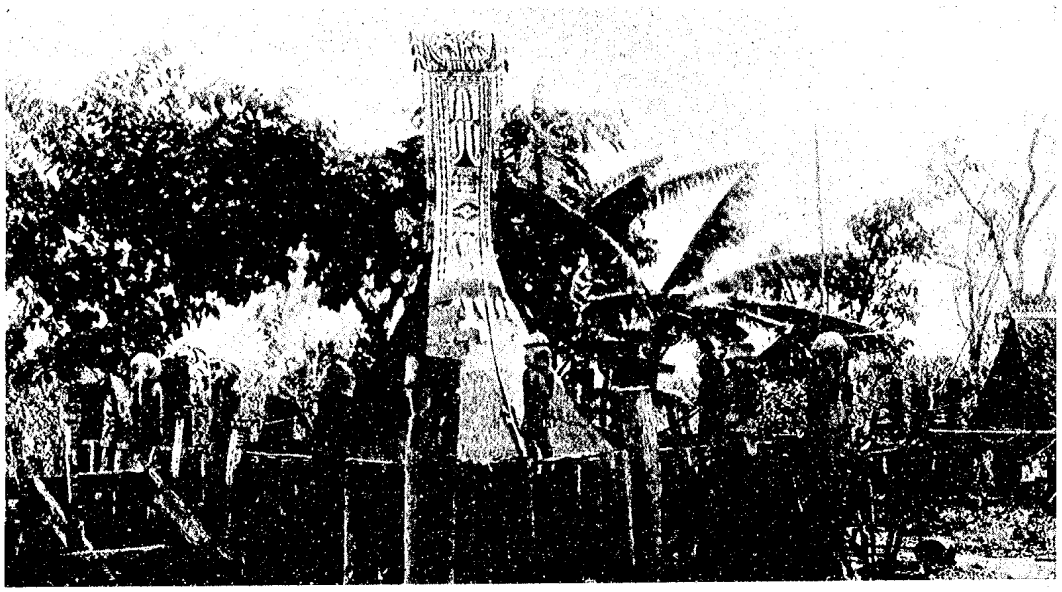
モイ族の住居



モイ族の集會所



モイ族の
鍛冶師



モイ族の墓

（Antaris）の樹液から製造され、猛毒を有し、その調製は巫術者のみが行ふといふ。

米は陸稲で、耕作は火田法が採用されてゐる。農具は簡單な鍬、或は掘棒で、播種及び收獲の際には各種の儀式が行はれる。

住居は木や竹で作られた草葺の高床家屋であるが、所によつてそれは地上に營まれることもあり、入口は一つで窓は全くない。

聚落は河流、池沼のほとりに占地し、戸數は餘り多くない。各部落には頭目があつて、これを支配する。家族組織としては父系的なものと、母系的なものとがあり、スダン族の如きは前者に屬し、ジャライ族は後者に屬するといふ。

子供が生れると、父はスパンといふ木の樹液をとつてこれを煎じ、母の元氣が回復するやうに飲ます。母と子は火の近くに寢かされ、母體は生姜で摩擦される。

彼等の宗教は精靈崇拜で、すべてのものに靈があると信じてゐる。彼等は天地雷神等を創造した全能者を信じ、これはアイデ、或はウドッと呼ばれる。

ムノンの村落の入口の小道の側に、地上5-6尺の高さにウドッが降臨するといふ高さに竹の小屋が造られ、入口には小さい階段が取りつけられてゐる。この中には色々な供物が捧げられる。ウドッは夜陰に乘じて地上に降つて來るものと考へられ、それは梯子から小屋に入る。もし供物が整つてゐれば彼は滿足して去る。そしてその年は村に落雷もなく、穀物はよく成長する。この小屋は種蒔時に新築され、次の年まで保持される。

人が死ねば銅鑼を鳴らして部落民を集め、死者は腕輪、頸飾等で裝はれ、仰臥させられ、その側に生前の所有品が山と積まれる。棺は木を削つて造られ、粗雜に彩色される。墓は棺を地上に置き、その上に土をかけて塚をつくる。塚の周圍には木柵がめぐらされ、兩手を頰に當て、蹲つた姿體を示す木偶が各所に建てられ、隨時供物が捧げられる。頭目の墓は竹で編み、赤白の塗彩を施した屋根で覆はれる。

タ　イ　國

タイ國は南部アジアにおける唯一の獨立國で、その北邊には大雪山脈系の連山が連亙し西はソンチャイ山地、タヴォイ山地、テナセリウム山脈によつてビルマと境し、東は安南山脈に連なる高原性の臺地によつて圍繞された肥沃なる平地を持つてゐる。

國土總面積 513,447 方粁、人口總數 14,464,489 (1937 年)、人口密度は1平方粁當り 27 人。人口總數は前回の調査 (1929年) に比し 2,958,282 人の增加を示してゐる。人口密度はメナム河口地帶において最も濃厚である。

種族別人口は**第4表**に示す如く、タイ人が壓倒的に多數で全數の 91.2 %を占め、華僑 (3.9 %)、マライ人、印度人 (3.3%)、カンボヂャ人、安南人 (0.6%)、シャン人、ビルマ人 (0.3%) 等である。1919 年の調査に比し、カンボヂャ人、安南人及びマライ人、印度人が減少してゐるのは注意すべき現象である。

タイ國における華僑は 1929 年の國勢調査においては 445,000 人であり、1937 年の調査においては 524,000 人とされてゐるが、この地は古くから華僑の入國する者多く、彼等の多くはタイ國の女性と結婚したため混血兒 (ルーク・チーン) を多く生じ、彼等はタイの慣習に從つて生活するため、これと純タイ人との區別は今日においては極めて困難となつてゐる。

更にタイ國の國籍法は出生地主義を採つてゐるため、この國に出生した者はすべてタイ人としてゐるから、その實數は前記のものより遙かに多くなるといふ。

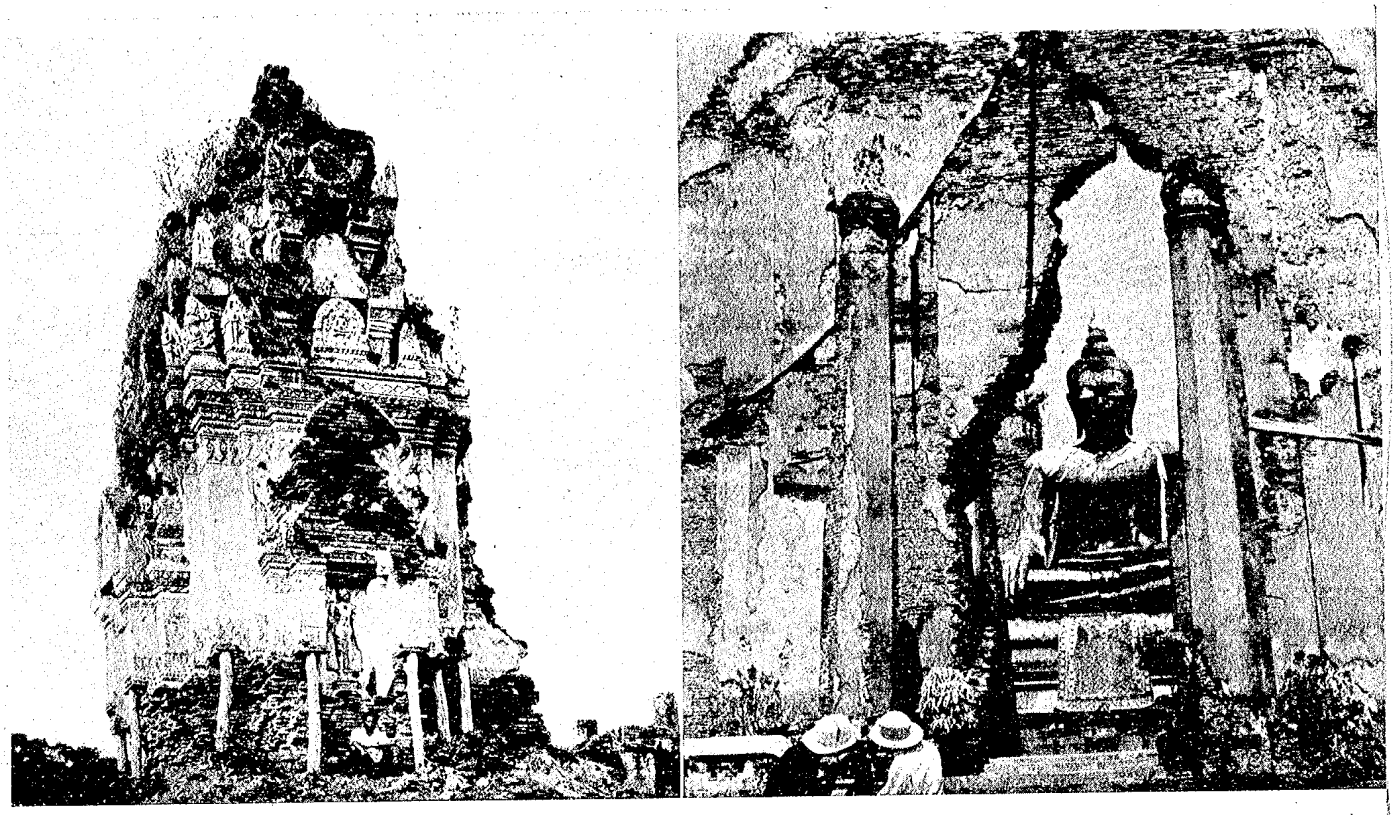
宗教は佛教が支配的勢力を有し、人口總數の 95.2 %は佛教徒で、4.3 %が回教徒、0.4 %が基督教徒である。この回教徒は印度人、マライ人等であるから、タイ人の全部が佛教徒であると考へて差支へない。佛教は小乘佛教で、戒律は嚴しい。

タイ族の故鄕は、西藏高原から江南の地にかけてあつたらしい。ここでタイ族が小集團を作つて生活してゐたことは、支那の史書に散見出來る。西紀 650 年頃に至つて、これは相當强力なる國家を組織し、諸制度を整へ、國號を南詔と稱し、唐と修交關係を締結したが、間もなく和平は破れ、兩者の間にしばしば干戈の交へられることがあつたが、よくこれと對抗し獨立を繼續した。

このタイ族の一部は、その移動年代はよくわからないが、とにかく南詔國家成立と相前後して移住を開始し、その一部はメコン河谷に出で、他はサルウィン河谷に出た。傳說によればプロームといふ者が西紀857年頃、ミュアン・ファン都市を建設し、カンボヂャ王國

第4表：タイ國種族別人口

タ　イ　人	14,334,000
支　那　人	608,000
印度人・マライ人	519,000
カンボヂャ人・安南人	44,000
白　人	3,000
日　本　人	500
そ　の　他	210,000



アユティヤの廢趾

を攻擊したといふ。プロームなる人物の存在はとにかく、この傳說はメコン河谷を南下したタイ族の一部が、この當時、すでに北部タイに獨立國家を形成するに至つたことを示してゐる。

その後、1057年には、ビルマにアヌルタ王なる者が現れ、現在のタイ領の過半をその支配下に置き、更にカンボヂャ王國を攻略した。このアヌルタ王は熱烈なる佛教徒であり、今日のタイ、ビルマの佛教はこの頃に始められたものと考へられてゐる。

またこの王の遠征の結果、カンボヂャ王國は致命的打擊を受け、ビルマ軍撤去の跡には多數のタイ族小國家が樹立された。1238年頃、タイ族小國家とカンボヂャの間に紛爭を生じ、タイは遂にこれを破り、ソコータイ市を占領し、ソコータイ國を建設した。

一方、南詔國は1254年、元の忽必烈汗の遠征にあつて破滅し、多數のタイ族集團は雲南方面から北部タイに向つて大規模なる民族移動を行つた。この新來移住民が先住者と合流した結果、タイ族は豐富なる人的資源に惠まれることとなり、爾後、獨立を持續し得る潛勢力を保有することを得た。

またこれ等のタイ族と別個にメナム河下流地帶に南下集結したタイ族の一派は、その地に據つて漸次勢力を伸長し、ソコータイ國を攻略してアユティヤ王國を設立し、メナム河中の島上にアユティヤ都市を建設し、ここに大規模なる城塞を構築し、壯嚴なる寺院を建立した。

アユティヤ國はその後益々強大化し、その勢力はマライ半島にまで及ぶやうになつたが、18世紀の中頃、ビルマ民族の侵犯するところとなり、1767年、首都アユティヤは陷落し、王朝は滅亡した。

然しタイ族は直ちに蹶起し、ビルマ族は間もなく驅逐され、獨立は保全されることを得た。その後、首都はバンコックに遷され、ここに近代タイ國の礎を築いたのである。

タイ族の男子

タイ族の女子

タイ國の民族構成も佛印に劣らず複雜である。タイ國家の中樞をなすタイ人は、主としてこの國の南半一帶の地に占據し、これと文化的にも體質的にも近似する昔ての仇敵であつたカンボヂャ族は、この國のコラート・ウボン地方に、安南族はチャンタブン地方に雜居し、タイ族移住以前の先住民であつたモン（タレーン）族は、現在でもバンコック附近に殘存してゐる。北部山地には南支先住民であるラフ（猓黑）、リス（栗粟）、ミャオ（苗）等の諸族が小群を爲して住み、東側の安南山地に連なる高原にはカー族の部落がある。

また兩側のビルマに接する地帶には、ビルマのシャン・ステートに本據を持つシャン族が居住してゐる。シャン族は擺夷（パイ・イ）とも呼ばれ、支那雲南省の一部及び佛印北部山地にも見出すことが出來る。

タイ人（シャム人）

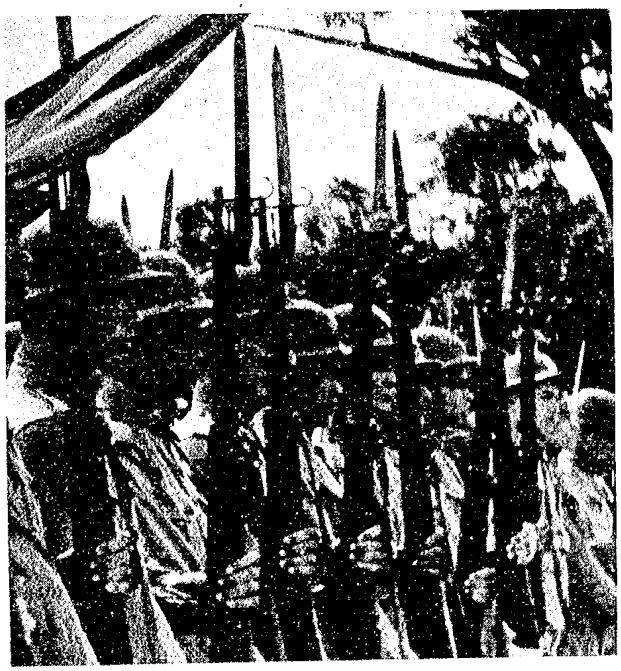
タイ族は蒙古系民族で、南支廣西省から佛印北部、アッサム、ビルマに亘る地方に散在し、その居住地域によつて稱呼、風習を異にしてゐる。タイ人（シャム人）はタイ國南半に分布し、タイ國の支配民族となつてゐる。

古來、混血の程度が著しく、モン族、クメール族、漢族等の血を混へてゐる。身長は159.9糎、頭型指數 82.80。顴骨秀で、眼は斜眼で、鼻は廣鼻型に屬し、頭髮は直毛で、皮膚の色は暗色に近い。

服裝は近年、洋風を模倣する者が增加したが、固有なるパヌンは依然として使用されてゐる。パヌンは褌と腰卷を兼ねたやうなもので、その用法は長さ7呎餘、幅2呎餘の布を腰にまき、前面でこれを結び、餘つた部分を脚間を通して背部にはさむ。男女共にこれを用ひ、男子は無地、女子は模樣附きの布を選ぶ。男子はこの上に白地の結襟服を着け、女

タイの美と傳統に輝くプラ・ケオ王室寺院

タイの近代陸軍



子は屋内にあつては、パホムと呼ばれる袖無のシャツを着るだけであるが、外出する時には薄い上衣と眉掛とを羽織る。

食事は舊い習慣によれば、朝夕2回これをとるのみである。米を主食とし、野菜、魚肉等を副へる。カレーの類が愛好され、一種の魚醬が用ゐられる。稻は水稻を主とし、水牛を使役して犂耕される。この形式の農耕は古代タイ族が、嘗て北方に占據してゐる時代に漢族から學んだもので、犂の體部は木製、鐵製の尖刃がつけられてゐる。農具としては他に數種の耙の類がある。農耕技術は一般に發達せず、灌漑施設の如きも、昔時の風をそのまま踏襲してゐるに過ぎない。

住居はすべて高床建築で、屋根はアタップの葉を以て葺き、壁は板、又はアタップで作り、床は板張りである。北部の竹の產出地帶の家は、柱、屋根、床等、すべて竹材を以て構築される。出入は梯子によつてなされ、こ

村長や地主階級の住むタイの上級の農家

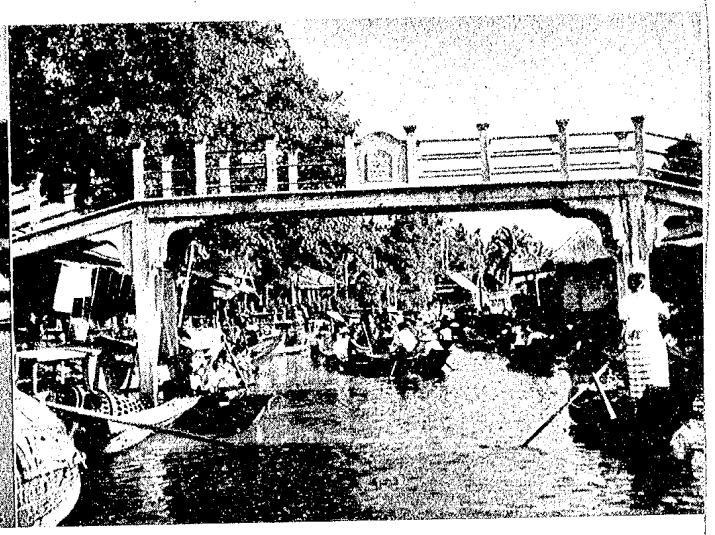
パヌンをはくタイの舞姫

れは室の前面に張出すヴェランダにつけられてゐる。ヴェランダに續いて居間があり、その後に寢室がある。寢室には大抵の場合、寢臺を用ゐず、床に直接寢具を敷いて寢る。臺所は普通、屋根を別にして作られてゐる。

高燥なる平原に建てられた農家では、この床下が家畜の飼育場として利用されるが、メナム河畔の如きクリーク地帶では、杭は水中にたてられ、完全な水上住居をなしてゐる。これらのクリーク地帶には、別に浮家が見られる。浮家とは竹の筏、木舟の上に構築された家で、河岸に杭を打ち、鎖でつないで置く。水中に浮動する舟のことゝて、移動は極めて簡單である。かやうな浮家は、主として小賣店として利用される場合が多いやうである。

タイ人は性溫順、禮儀正しく、宗教心に篤い。佛教を國教とするため、一般社會生活もこれを基準として營まれる。彼等の日常語であるタイ語は、支那語に類緣を有するが、文字はサンスクリットの系統を引くものである。一體に早婚で、一夫多妻が認容されてゐる。

川の上に町を形成するタイの浮家



道路よりも便利なバンコックの堀割

パヌン姿のバンコックの女

タイの年中行事の花祭の花車

タイ國山地部族

カー族

佛領印度支那諸民族の項において述べたモイ族は、體質、文化を多少づつ異にする部族群であるが、カー族もその中の一部族で、ラオス高原に居住してゐる。カーといふ稱呼はラオス人によつて命名されたものらしく、「森の人」といふ意味をもつてゐる。

身長はモイ族より稍々高く（162.7糎）、頭型は短頭である。高床家屋に住み、燒畑耕作によつて陸稻、玉蜀黍等を栽培し、その一部はチーク材の搬出その他の勞働に使役されてゐる。

カー族の女子と子供

リス族の娘・胸の飾りは階級を示す

ラフ族

漢族の影響を受けたシャン族の一派で、雲南方面に居住し、タイ國北部山地に移住せるものもある。長い上衣と、ゆるいズボンをつけ、頭にターバンをまく。高床家屋に住み、屋根は草をもつて葺き、床下には家畜を飼育する。燒畑耕作を行ひ、陸稻、玉蜀黍等をつくる。家畜としては、馬、豚、鷄、犬等がある。

リス族

西藏から雲南にかけての高山地帶を故郷とし、タイ國北部山地地帶に少數分布してゐる。衣服、家屋等はラフ族と類似し、燒畑耕作によつて陸稻、玉蜀黍等をつくる。罌粟を栽培して阿片を造り、これを支那人と交易し、自らも消費する。

以上のほか、カムク、クイ、ロロ等の諸族が、佛印と境を接する地帶に分布してゐる。

カーレン族の女子

ラフ族の一家

ロロ族の女子

上部タイの村落

マライ半島

マライ半島は印度支那半島の南端に突出する細長い半島で、南はマラッカ海峡を隔ててスマトラ島に對し、東はボルネオ海を挾んでボルネオ島に向ひ、北は北緯70度の線でタイ國と境を接する。

舊英領時代はマレー聯邦州として、ペラク、セランゴール、ネグリセムビラン、パハンの四州、非聯邦州としてジョホール、ケダ、ペルリス、ケランタン、トレガンヌの五州に分割されてゐた。

半島の内部には、印度支那山脈の末端に屬する幾つかの山脈が走つてゐるが、その高度2,000米を越える高山は少い。この山間より發する河川のうち、東海岸に注ぐものは砂を多量に運搬し、河口に砂洲を形成するのに對し、西海岸に流出するものは泥深く、その河口附近には濕地性植物の密生する低濕地が發達してゐる。

氣候は熱帶的多雨地帶に屬するため高溫多濕で、熱帶性密林の繁茂を見る。物產は豐富で平地はよく開拓されてゐるため、人口は稠密である。

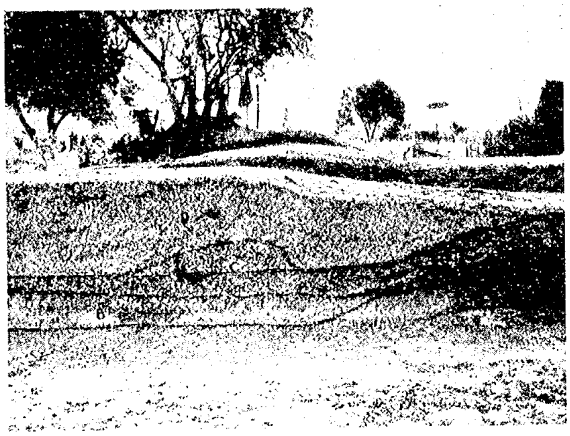
第5表：マライ半島種族別人口（1941年推定）

マライ人	2,315,973
支那人	2,383,857
印度人	745,514
歐亞混血人	19,437
歐洲人	31,575
その他	59,725

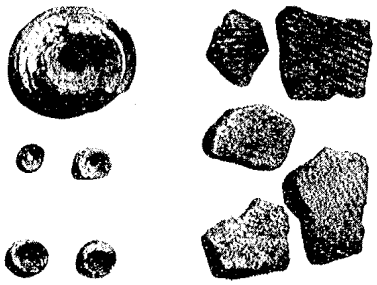
種族別人口は**第5表**に示す如くで、華僑人口が原住民族を稍く凌駕してゐる。この地と支那との關係は相當古く遡れるが、華僑がマライ半島に移住し始めたのは明代以後のことで、1663年度におけるマラッカ人口4,884中、華僑は797人を占めてゐたと誌されてゐる。その後、彼等は漸次に膨脹し、遂に今日の如き繁榮を齎したものである。

マライ半島においても古代人類の遺跡が各所に發見されてゐる。就中、クアラ・ランプール附近のグァ・ケパ貝塚からは古く人類の頭蓋骨が發見され、ハックスレーによつてメラネシア的特徴を有するものと認定されてゐる。近年、この遺跡はカーレンフェルスによつて精査され、貝塚は新舊兩層より成り、古い部分は原新石器時代に屬する事實が明瞭となつた。この舊い層からは佛印のホアビン型石器と同一系統に屬する粗大なる石器のみを出してゐる。この地から嘗て發掘された人骨がメラネシア的體型を有すること、及びホアビン式石器が發見されること等の諸事實に基いて、カーレンフェルスは中石器時代から新石器時代初頭にかけて、印度支那からマライ半島の一部にメラネシア的體質と文化を有する原住民が分布し、そのある者はインドネシア諸島にまで及んでゐたと說いてゐる。磨製技術を獲得した後期新石器時代住民は、彼等より後にマライの地に移動して來たもので、彼等の遺物としては有肩石斧、各種の磨石斧、石環類等がある。マライ族はかやうな石器類を以て、雷の使つた槌であると言傳へてゐる。

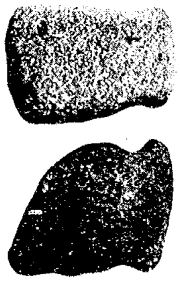
グア・ケパ貝塚の全景



貝塚の文化層斷面—— A古代の海濱・B粘土堆積層・C未攪亂貝層・D破碎せる貝殼層



魚類の脊柱骨で作つた耳飾　　繩文を施せる土器破片



磨製石斧・頭部に柄をつける刻目がある

貝殼層の一部

ホアビン型石器　　石製双器　　石製剝器

マライ半島の中央部ケダ、ペラク、パハンにかけての密林中には、ネグリトー系のセマン族、及びこれと接してヴェダ系のサカイ（セノイ）族（頭形指數 78.3、鼻型指數 91.9、身長 152.4糎）が、原始生活を營む。サカイ族の分布中心は東南ペラク、西北パハンの山地で、その一部はセマン族と雜居してゐる。サカイ族住居地帶の北方ジョホールからマラッカにかけての一帶は、ジャクン族の生活圏である。ジャクン族の皮膚の色は暗赤色、或は銅褐色、直毛で頭型指數 80-83、顏面稍〻扁平、顴骨は突起してゐる。眼は稍〻斜眼で、身長 152.7 糎。原マライ族と考へられ、前二族と混血するものが多い。オラン・マラユ、卽ちマライ族は進取性に富む混血海洋民族で 1160 年頃、スマトラから移住したものである。海洋生活に親しみ、常にその據點を海岸、又は航行に便ある河川の沿岸に求め、漸次內陸に及び、遂にマライ沿岸の地にわたつて繁榮を極むるに至つた。

マライ族の女（昭南島）

マライ族の家（昭南島）

マ　ラ　イ　族

マライ族はスマトラの中部及び東海岸、ジャワの北岸、ボルネオの西部及び南海岸、東印度諸島の各地沿岸に分布する海洋民族で、マライ半島においては、その南端及び沿岸諸地に居住してゐる。人口 23,159,530（1941年推定）、その數において、同地在住の華僑と相對峙してゐる。

10世紀頃、パレンバン方面からこの地に移住し來つた文化マライ族の一派で、身長は162糎、頭型は短頭、鼻は扁平で稍〻廣鼻型に近く、口唇は多少肥厚し、皮膚の色は暗黄褐色、或はオリーブ色を呈する。毛髪は直毛で、その色は青黑色をなし、體毛及び髭に乏しい。

服裝は近年、歐米人の影響を受け、その風を模倣する者もあるが、男子は白色の上衣にサロンを着け、トルコ帽を戴き、女子は色模様のサロンを纏つた上に、長い上衣を着用してゐる。

家はすべて高床建築で、屋根はアタップをもつて葺き、間取は簡單で、1軒に1家族の者が居住する。聚落は水邊に營まれることもある。

米を主食とし、野菜、魚類等を副食とする。水田耕作を行ひ、ある者は漁撈に從事する。家畜としては水牛、山羊、家畜類等があり、水牛は耕作に使役する。

夙に回教に改宗し、ラージャを中心とする農業社會を形成してゐた。

手工藝に秀で、特に彼等の細金細工は、その精緻なる點において有名である。近年はエステートにおいてゴム栽培に雇傭される者が多い。

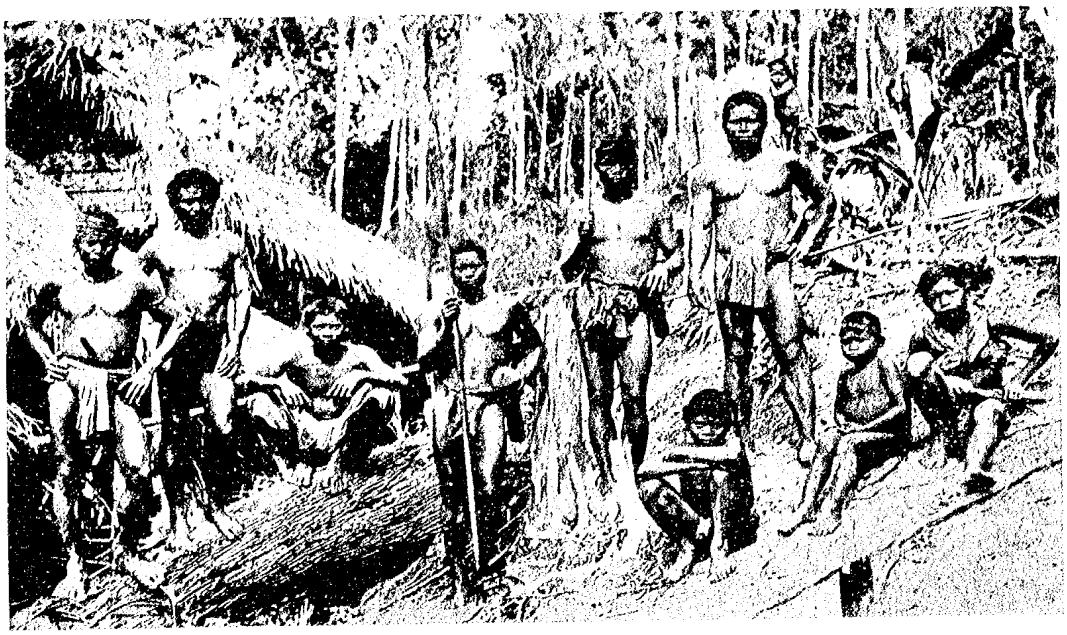
性質は溫順であるが、怠惰、無氣力であるといはれ、社會生活上のあらゆる點において後來移住民である華僑に壓迫されつつある。

ジャクン族

ジャクン族は原マライ族に屬する原住民で、陸ジャクン（オラン・ブキット）及び海ジャクン（オラン・ラウト）より成立してゐる。

彼等の體質は、それと接して分布するセマン、サカイ等の諸族の血を混へるものが多い。身長は152.7糎（♂）、137.8糎（♀）、頭型は短頭に屬し、鼻は扁平で鼻翼がはり、顴骨は高い。眼は斜眼で、光彩の色は暗褐色、口は概して大きく、口唇は肥厚してゐる。皮膚の色はオリーブがかつた褐色、又は暗銅色で、頭髪は直毛で、青黑色を呈してゐる。

ジャクン族はセマン族やサカイ族ほど甚だしい放浪生活を營んだことはないが、陸ジャクンの一部が定生的農耕生活を行ふ以外は、依然として狩獵、魚撈生活をなし、多分に漂泊性を持つてゐる。



ジャクン族とその住居

ジャクン族の女子

吹矢をふくジャクン族

衣服はマライ族のものを模してゐる。男子は木綿の褌、女子は短いサロンを着け、門齒を鑪で磨いて尖らせてゐる。

家は高床建築で、だいたい中央に大きな室があり、これに副室がつけられてゐる間取のものが多い。屋根、或は壁は樹皮で作られる。マラッカ方面の原住民の家には極めて小規模な小屋が見られるが、それでも周圍には虎を防ぐ防塞がめぐらされてゐる。

米、ヤム芋、瓜類等を主食とし、ジョホール附近の陸ジャクンは稻作を行つてゐる。その他の栽培植物としては、砂糖黍、煙草、ドリアン等がある。

吹矢をもつて狩獵を行ひ、叢林の產物を蒐集し、物々交換によつてマライ族から綿布、陶器、鐵器等を得てゐる。

宗教は精靈崇拜で、種々なる呪術的行事が行はれてゐる。

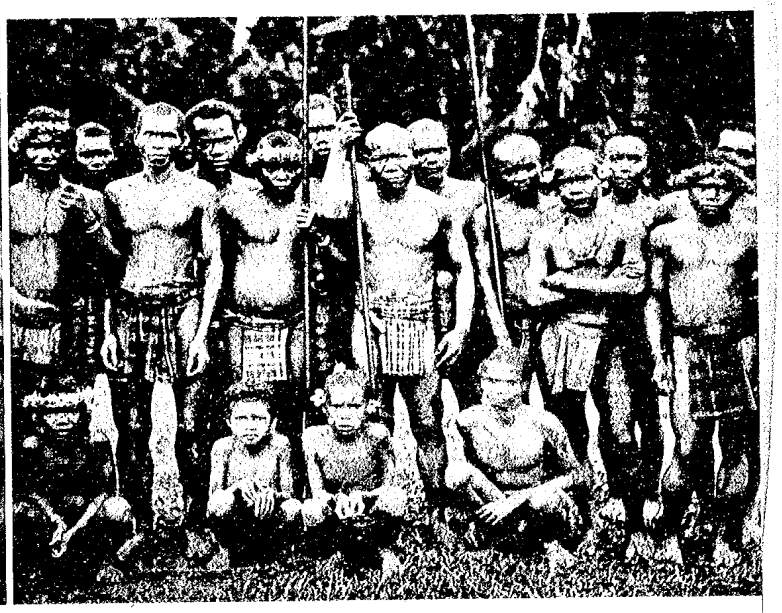
セ　マ　ン　族

タイ國の南隅、マライ半島と境を接するチャイヤ、パタニ地方から、マライ北偶のケダ、中央ペラク、北パハンにかけて分布し、西側に居住するものをメンディ族といひ、東側のものをパンガン族と呼ぶ。

身長 149.1 糎(♂)、140.8 糎(♀)、短頭、又は中頭に屬する者が多く、頭髮は羊毛狀の縮毛で、皮膚の色は暗色セピア、又はチョコレート色を呈する。顴骨は餘り突起せず、鼻は扁平で幅廣い。光彩は暗褐色、又は赤褐色で、眼型は圓く水平で、口吻肥厚し、稍々突出してゐる。ネグリトー族に屬し、アンダマン島住民及びフィリッピンのアエタ族等と親族關係を持ち、サカイ族と共にインドネシア族における最古住民層の一員である。

定住性に乏しく、最も原始的なるものは同一場所に3日と止まることがないといふ。狩

セマン族の主婦（左は剃りたての頭）



セマン族の男子（吹矢を手にする）

獵、漁撈、及び叢林植物の果實、根塊等の蒐集によつて生活するが、一部は極めて低度の農耕を行つてゐる。

樹皮で造つた褌を纏ひ、儀禮の際にはリゾモルフ屬の長い菌絲を束ねて腰帶とする。褌はウパス樹の樹皮纖維で造る。本來、文身、傷痕生成の風を持たなかつたが、少數の者はサカイ族から後者を學び、これを行つてゐる。

家屋は原始的な岩陰住居か、樹上住居、又は地上住居で、木の葉をもつて屋根及び壁を造る。最も進歩した家屋は長方形のプランを持ち、內部には竹製の寢臺が置かれてゐる。

狩獵具としては弓矢及び吹矢があるが、後者はサカイ族、ジャクン族等から傳承したものである。矢には猛毒液が塗布されるが、この毒液はイポ樹の樹液から製造される。

舟はないが、川を渡るに筏を使用することを知つてゐる。

樂器は竹製で、鼻孔に當てて吹く鼻笛や、口琴の類がある。

食物は野生の果實、塊根等がその主なもので、鼠や栗鼠の肉もまた食用とされる。竹筒に食物を容れ、これを遠火にかけて炊事する。彼等はまた有毒性の芋類をも食糧としてゐるが、これ等の毒を消して無害の食物とする調理法を心得てゐる。

宗教は精靈崇拜で、カクとプレと呼ばれる最上神の存在を信じてゐる。

女子は頭髮に櫛をさしてゐるが、この櫛には魔力があり、病氣、災害から佩用者を救つてくれるものと考へてゐる。

結婚は極めて簡單であるが、一夫一婦制が嚴重に守られてゐる。

マライ族は、セマン族について、かつて彼等はその死屍を食ひ盡し、頭部のみを殘して埋葬する風があつたと稱してゐるが、現在では、屍體はそのまま埋葬される。サカイ族、ジャクン族等は死者の靈を極度に恐怖するが、セマン族の間では死靈に對する恐怖心はさのみ強くないやうである。

サカイ族の樹上住居

サカイ族の一群（女はマライ風の服裝）

サカイ族の一家（鼻の裝飾に注意）

樂器を奏するサカイ族

サカイ族

サカイ族はセノイとも呼ばれてゐる。マライ半島の東南ペラク、西北パハンの山地に分布し、セランゴール、マラッカにまで及んでゐる。大部分の者は定住性に乏しく、食物を追つて放浪生活を行つてゐる。

體質は、マルチンによれば身長 150.4 糎、(♂)、143.7 糎 (♀)、頭型は長頭で、顏面は多少長く且つ廣く、顎部は稍〻突出し、口唇は厚く、下唇は多少外反する。

毛髮は黑いが、褐色がかつた髭を持ち、波狀を呈する。ヴェダ族と近似せる體型を示し、スマトラのクブ族、セレベスのトアラ族と共に、インドネシア最古人種層の一と考へられてゐる。

高床家屋に居住し、時には樹上に家屋を建設することもある。

男子は樹皮製の褌、女子は同じ原料の腰卷を纏ふが、近年はマライ風のサロンを使用する者が多くなつて來た。入墨及び傷痕生成の風、身體塗彩の風も盛んに行はれる。

割禮はなく、齒牙を人口的に變形する風も稀である。特異な裝飾としては、鼻中隔に穿孔して金輪をはめ、或はヤマアラシの刺毛を通す風が一般に行はれてゐる。

極めて原始的な燒畑耕作を行ひ、農具として掘棒を使用してゐる。時に叢林中の物產を採取して來てマライ族と交易する。

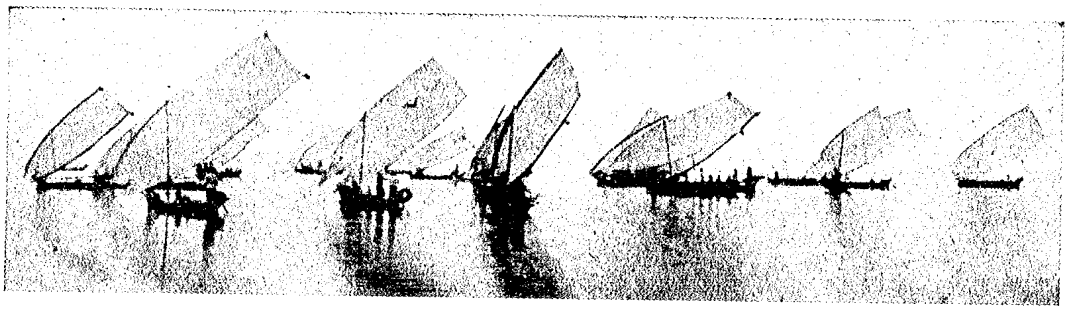
宗教は精靈崇拜で、セマン族と類似し、ツハンといふ神の存在を信じてゐる。セマンと同樣に一夫一婦制が嚴守されてゐる。

彼等は死者を甚だしく恐れるが、これは死者の靈を恐怖するためで、死者があつた場合、住居を他に移轉することは決して珍しくない。

サカイ族の發火法（丸木に籐蔓を擦摩して發火さす）

サカイ族の炊事（米を竹筒に入れて遠火にかける）

人口問題研究所



バジョー族の舟

オラン・ラウト族

オラン・ラウト（水の人）族はジャクン族の一派で、バジョーとも呼ばれ、マライ半島のジョホール諸島、バンカ、ビリトン島からボルネオ、セレベス諸島の沿岸地帶に散在する海上生活民族である。

彼等のうちでズールー海沿岸に移住した者はサマール族と呼ばれ、セレベス方面にゐるものに對してはバジョーといふ名稱が與へられてゐるが、彼等自身はオラン・サマと自稱してゐる。

かやうな放浪生活を行つてゐるため、彼等は他の色々な種族と混血してゐるので、その體質は一樣でないし、文化程度もまた一定してゐない。ジョホール諸島附近の者は、その生活程度から見ると原マライ族の面影を殘してゐるが、ビリトン島に據る彼等の一派であるオラン・セカーの如きは、立派な船舶を造つてゐるし、セレベスのバジョー族の如きも往年、海賊として附近を航海する人々を恐怖せしめたこともある。バジョーといふ名稱も、ジャワ語のバジャグ（海賊）から出たものといはれてゐる。

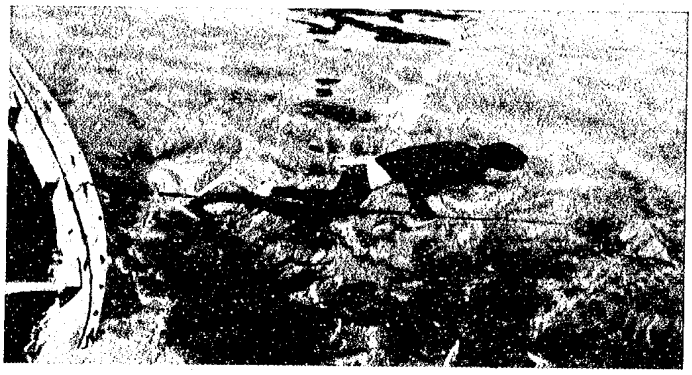
然しオラン・ラウト族のすべてが常に舟上生活をしてゐるのではない。今日、彼等の多くは沿海地帶に定住するやうになつて來た。

彼等の家は高床建築で、主として水中に建造されてをり、簡單な農耕に從事してゐる。

衣服は以前には樹皮製の褌を用ひたが、現在では全く廢絶し、回教徒的服裝をなす者が多くなつた。

宗教は回教を信奉し、現在、彼等の習俗には回教の影響を受けたものが多い。

オラン・ラウト族の男子



バジョー族の潜水

スマトラ

スマトラは大スンダ諸島の最西に位し、マラッカ海峡を隔ててマライ半島に向ひ、その面積 471,550 平方粁、世界第五の大島である。西海岸に沿ふて西側に急で、東側に緩やかに傾斜するバリサン山脈が縱走してゐる。平野は東海岸に發達してゐるが、この附近にはマングローブの叢生する沼澤地が多く、不健康地となつてゐる。

低地の氣溫は平均 26 度内外であるが、山地の氣溫はこれより低い。

人口は總數 8,238,000、種族別人口は、原住民 7,733,000、華僑 448,000、日本人及び歐洲人28,000、東洋人28,000等である。

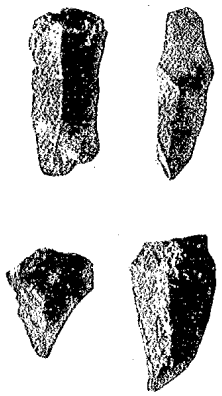
人口の最も稠密なる地帶はパダン地方で、東海岸のシャク、カンバン、インデラギリ河口の低濕地帶は、瘴癘の地に屬するため極めて少く、全く無住地となつてゐるところも相當の面積に上つてゐる。

スマトラ人口の主流をなすマライ族は、いはゆる海岸マライで、新來住民層に屬するものであるが、この地の歴史が示す如く、これ等は過去において幾多の民族の血を受けた混血民族である。

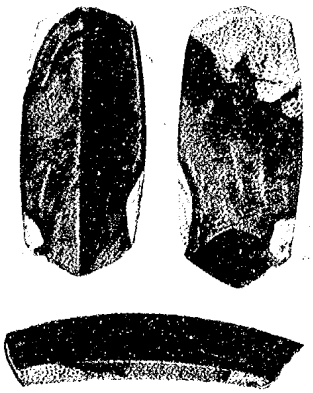
古人類の遺跡は數ヶ所に發見されてゐる。從來の研究の結果によれば、スマトラ先史文化は二系統より成立してゐるらしい。一つは中央部山地の洞窟遺跡より見出される打製剝片石器文化で、他は東海岸貝塚中より發見される打製石斧文化である。後者は佛印ホアビニアン文化の流れを汲むものと考へられてをり、剝片石器を出す洞窟からはヴェダ族に類似する體質を具有した骨格を出してゐる。

この地が歴史に現れはじめるのは1世紀頃で、當時既に印度、或は支那の貿易者にしてこの島を訪れる者があつたといふ。就中、ヒンヅーの移住者は漸次に增加し、西紀500年

手斧



石小刀



嘴狀石斧

スマトラの石器

スマトラ石器時代及びヒンヅー植民時代の文化・パレンバン附近發見の青銅佛（8—9世紀頃の作品）

スマトラの貝塚

ムアラ・トクスの廢塔

頃、彼等はそこに小國家を形成した。その後パレンバン附近にスリヴィジア國が建設され、700年頃、四方を平定した。この國は室利佛逝、又は三佛齊として唐宋代の支那人に知られ、彼等のあるものは遠くこの地に赴き、これと交易した。その後、スリヴィジアは衰亡し、當時ジャワに起つたマジャパイト王國の治下に屬するやうになつた。これ等の諸國家は婆羅門教を信奉してゐたが、1300年頃、回教の侵入を見て以來、住民のこれに轉宗するもの續出し、佛教、婆羅門教は全く衰へ、多數の回教徒小國の分立を見た。これ等の中で最も強大なのはパレンバン及びアチェーの兩國であつた。殊にアチェーの如きは1511年にマラッカを占有せる葡萄牙と覇を爭ひ、メナンカボー・マライを征服し、ジョホール國の一部を占領する等、その權勢は附近小國を壓した。後にスマトラ島がオランダ統治下に置かれて以來、アチェーのみは反服常ならず、植民地爲政者をして全く困惑せしむるに至つたことは、周く世の知るところである。

島内には約12種類の民族が割據し、1餘種類の言語が話されてゐる。島の西北部海岸地帶には、人種的にはアラボ、インドネシア混血種といはれ、往年の大アチェー國を建設したアチェー族がをり、人口83萬、性慓悍、回教を信奉する。この邊の山地には原マライ系民族のガヨ（人口2萬）、アラス（1萬3千）等の諸族が未開生活を營み、これに接してト

バ湖を中心としたバタ族（人口100萬）が居り、往古ヒンヅー文明の輕い影響を受けて形成された特殊の文化を保持してゐる。

クブ族はパレンバン地方の山中に居住し、文化程度は前者より遙かに低級で、體質的にはヴェダ族及び中部山地のサカイ族と類似する。ヴェダ的體質を所有してゐるものとしては、このほかにルブ、ウル、アキット、ママク等の諸族がある。中部スマトラの西海岸には、バタンを中心としてメナンカボー・マライ族が占據する。人口145萬。この地は現在各地に散在繁榮するマライ族の故郷と考へられ、往時、獨立國家を形成し、その文化にも見る可きものがある。以上の諸族の分布地域の他の部分、即ちスマトラの東南側過半部はマライ族によつて占められてゐる。これ等はその占據する地方によつてパレンバン族、レジャン族、ランポン族その他に分けられ、いづれも新來住民層に屬してゐる。また、西海岸のニアス島には壯大なる古代文化の傳統を持續してゐるインドネシア種のニアス族が占據してゐるし、メンタウェー島には同じ系統のメンタウェー、エンガノの諸族が居住するが、彼等の文化は低く、生活は原始的である。

アチェー族

アチェー族はスマトラ北部に居住する海岸マライ族の一派で、古來混血の甚だしい民族である。體質は一般マライ族と大差なく、頭型指數は 81.5 を算する。

衣服は海岸住民と山地住民との間にかなりの相違があるが、兩者とも太いズボンをはき、その上にサロンを卷き、海岸住民はシャツを着けるが、山地住民は布片を肩にかけ、前方中央でこれを結ぶ。普通、クピアと呼ばれる圓筒型の色帽をかぶる。女子も男子と同樣、ズボンの上にサロンを着けるが、海岸住民はその丈けが長く、山地民ではこれが短い。上

アチェー族の男女

にシャツ樣のものを着け、スカーフを纏ふ。

住居は高床家屋で、高さ2米くらゐの床上に作られ、間取は前中後3室より成り、扉によつて相通ずるやうになつてゐる。屋根はサゴ椰子の葉をもつて葺かれ、壁は板、又は屋根と同種の物を編んで造り、外側に雨戸のある窓が開けられてゐる。前室は寢室で、ここは最も神聖な室とされ、華美に裝飾され、床には敷物を敷き、天井には赤布が一面に張ら

アチェー族の住居

れてゐる。寢臺はなく、直接床上に布團を敷いて寢る。多少暮しのよい者の家は、屋根を別にし、臺所をつくる。

聚落はカンポンと呼ばれ、住居地域と耕地より成り、家は特別の配置なく、それに混つて青年集會所及びモスクが建てられてゐる。

米を主食とし、野菜、魚肉等を副食とする。獸肉は牛、水牛、山羊、羊等を食用とするが、平時に用ひることは殆どない。往年オランダ政府に對し最後まで反抗した勇敢な民族であるが、勤勉で明かるい性質を持つてゐる。水田耕作を營み、水牛を使役する。

回教を信奉することあつく、回教文化の影響を強く受けてゐる。

ガ　ヨ　族

スマトラ西北部の內陸に居住し、その人口約20,000。その地の東南に占據するアラス族と共に原マライ系に屬する民族である。

服裝は一般マライ族と大差なく、男子は長いシャツのやうな上衣に、ゆるいズボンをはき、女子は主としてサロンを纏ふ。

米を主食とし、玉蜀黍その他の野菜類、乾魚を副食物となし、鹿の肉、カラボーの凝乳等をも食用とする。米は水稻で、水牛を使役して犂耕し、水田は河水をひいて灌漑する。

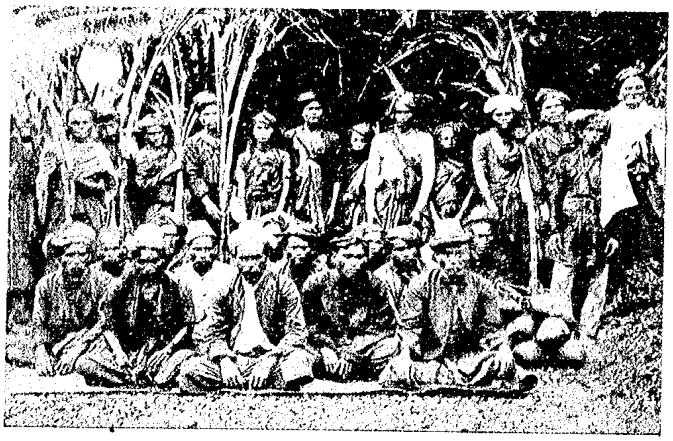
畑畠には玉蜀黍、砂糖黍、棉、煙草、野菜類の栽培を行つてゐるが、20年から25年目くらゐに時として起る凶作の際には、多數の餓死者を出すことがあるといふ。

家畜としては水牛、羊、山羊等が飼育されるが、それらの肉は儀式の際にのみ用ゐられる。

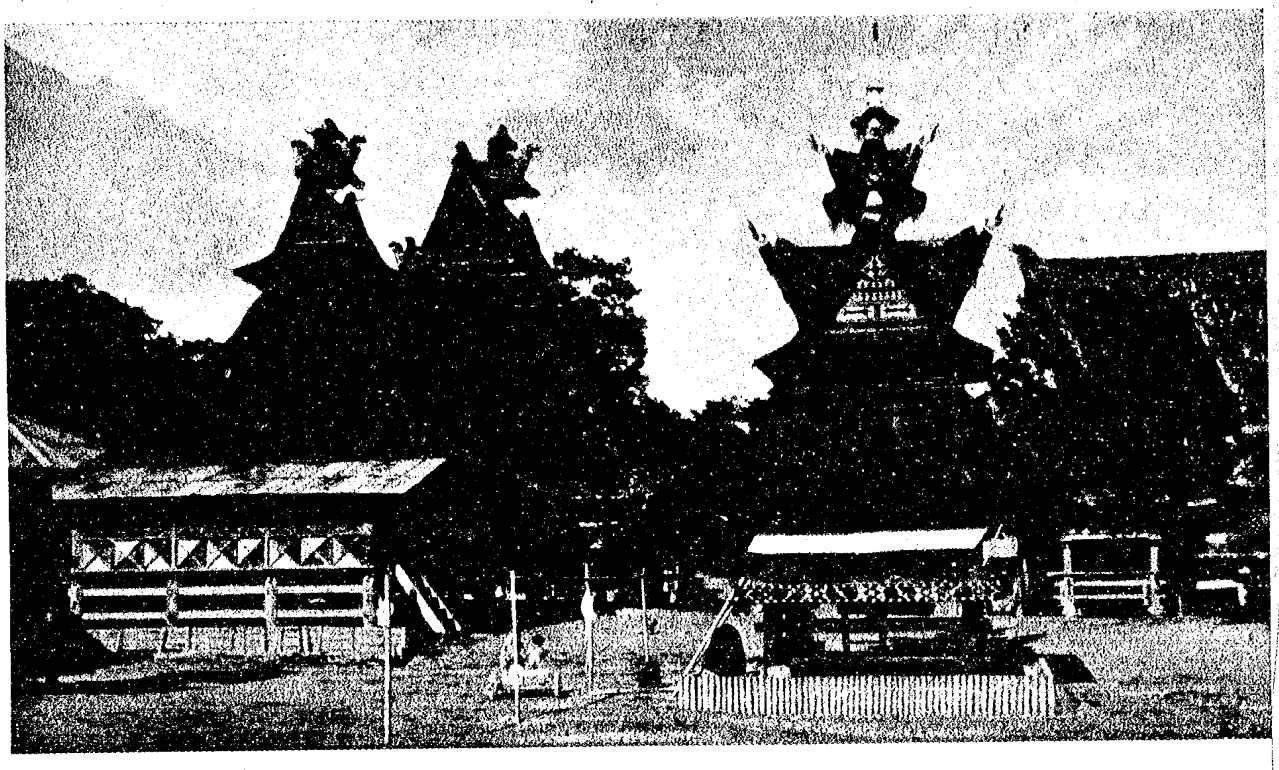
村落（カンポン）は川に沿ふて設けられ、村には住宅（ウマー）、青年集合所（メレサー）、穀倉等がつくられてゐる。

住宅は高床建築で、緣族によつて共用される。この家は數室に區分され、前室（ラディ）は男子專用、後室（ウヂュン）は女子專用とされ、中央はビレックと呼ばれ、既婚者家族の室となつてゐる。ビレックにはその家族の私有財產が保管され、爐が設けられ、そこで炊事が出來るやうになつてゐる。女子は戶外の仕事を持たないときには、たいていウヂュンで生活するが、ラディは結婚式とか割禮とかいふ特別の場合にのみ使用される。青年達の宿る集合所（メレサー）は、住居から少し離れた場所に作られた板敷き板壁の高床建築で、中には暖房兼燈火用の爐が設けられてゐる。

ガヨ族の男子（長髮型）



ガヨ族の男子



バタ族の村落

バ　タ　族

バタ族についての正確な記錄を殘したのはマルスデンで、彼は1783年に、食人の蠻風を持つ人間が可成り高度の文化と文字とを持つてゐることについて誌してゐる。

今日のバタ族は人口約100萬を有し、身長159.93糎、頭型指數80.3。現在南部に住む大部分の者は回教徒となり、8萬餘が基督教に改宗し、他は依然として原始宗教を保持してゐる。

言語上、シンケル、パクパク、ダイリ、トバ、マンデリン等の諸群に分割される。彼等が行つてゐる水稻耕作、及び耕作具である犂、家屋の構造、綿布、紡錘具、文字、象棋等はヒンヅー文化の影響を受けて生じたもので、言語や宗教思想中にもこの片影をうかがひ得るものがあるといふ。

土壘や竹柵で圍まれた大聚落を營み、一つの狹き門によつて外部と交通される。村は住屋（ルマー）、集會所（ジャンブル）、穀倉、

バタ族の巫術師

頭目の祖先の遺骸を納めた舟型棺
（両端に男女の木偶を安置する）

鑿歯した少女（耳飾は眞鍮や銀で造られ耳に穿孔してつける）

少女に鑿歯を施す（米の靈を怒らせないために行ふ）

バタ族の巫術書

米搗場から成り、部落によつては鍛冶師（ペルパンデン）と頭骨置場（ゲリテン）等が附加されてゐる。普通8家族くらゐが1軒の家に共同生活を營んでゐる。

家はすべて高床家屋で、地上1-2米の高さに作られ、屋根は砂糖椰子の繊維（イジュツク）、或は板材で葺かれ、その形は鞍狀を呈し、棟の突端には水牛の角が飾られてゐる。家の内部は壁によつて區切られず、夜間のみ編筵を下げて仕切をつける。家内にはたいてい數ケ所に爐を設け、煙は屋根に抜けるやうになつてゐる。窓がないため室内は常に薄暗い。夜間の照明にはバナナの繊維を束ねた炬火が使用される。

米を主食とし、玉蜀黍、馬鈴薯、タロ、ヤム芋等を副食とする。肉食としては豚、犬、鷄等が好まれ、蛙、野鼠、幼虫、白蟻等も時に食膳に供される。飲用水である清水は村落

バタ族の米搗場

中にある泉から汲み取られ、椰子酒も彼等自身の手によつて醸造される。檳榔の實を嚙む風も普通に見られ、煙草も愛用されるが、女子は喫煙しない。

米は水稻、陸稻が併用され、農具としては犂（ティンガラ）、掘棒（ペルレベン）、馬鍬（サビ、セケル）等がある。

衣服はマライ族の影響が強く、シャツ風の短衣とサロンとをつけ、女子はターバンを卷く。赤、青、黑等の色調が好まれ、海岸地帶の住民は黃色を使用する。U字形を呈し、兩端が渦卷狀をなす耳飾をつけ、齒牙を打缺き黑く染める風が行はれてゐる。

武器としては槍、投槍、劔、山刀（クレワン）がある。昔時には弓（パナー）、矢（ソレ）、楯（アンパン）等も使用されたが、現在ではこれ等を見ることが出來ない。吹矢は狩獵に使はれ、矢には毒液を塗る。

メナンカボー族

中央スマトラの西部に占據し、人口 1,450,000 餘を算する。身長 157.0糎、頭型指數 82.18。

メナンカボーの名が最初に記錄に現れるのは 1395 年、ジャワのマジャパイト王國に貢稅するスマトラ諸國の一として、この國名を見出すことが出來る。この地はマライ族發生の地と考へられてをり、最初に約 1,500,000 人位のマライ族が、固有メナンカボーとしてこの地に殘り、これとほぼ同數の者がヒンヅー時代にマラッカ及びマライ半島に移住した。

これ等のマライ族は屢々デュトロ・マライと呼ばれ、その言語は現在においては祖國メナンカボーのそれと多少相違してゐる。

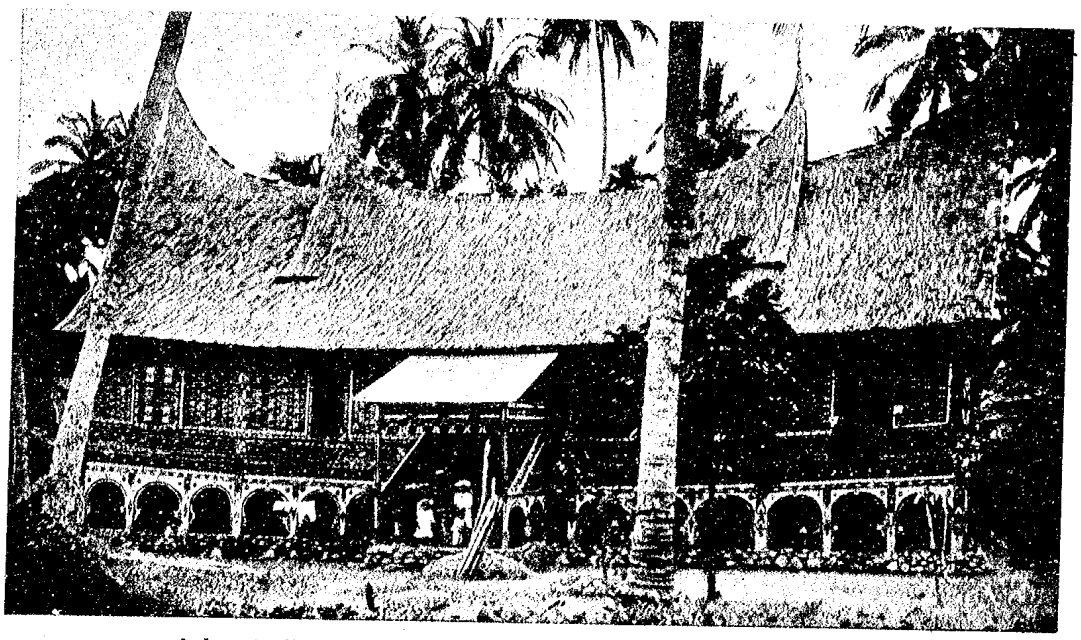
14 世紀から 15 世紀にかけてメナンカボー王國はその最盛に達し、彼等はスマトラ中央の殆ど全部を領有してゐた。この國に回教が輸入されたのは 14 世紀後半に、アチェーの海賊がこの地を攻略した頃に始まるといふ。

ヒンヅー時代のメナンカボーは、多くの村落（ネガリ）に分割されてゐた。ネガリは卽

メナンカボー族の男子

メナンカボー族の新郎

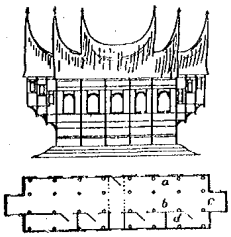
晴着をきたメナンカボー族の婦



メナンカボー族の住居(屋根は草で葺き外壁に彫刻を施し塗料を用ひる)

ち梵語のナガラで、都市を意味する。ネガリは町と耕地、未開拓地から成立し、この中で人の居住する町の部分は木柵、塀等で圍まれてゐたといふ。町は住居と穀倉、集會所（バライ）から成つてゐる。

家は高床家屋で、地上 1-2 米の高さの床を有し、二つの柱の間は1室に區分される。それ故、柱の多い家ほど居室が多くなり、居室の多いことは又、そこに住む集合家族員數の豐富さを示すこととなる。この家の片側、或は兩側に、床を更に高くした家が附加されてゐるが、これは彼等の間でアンヂェンと呼ばれるもので、普通客間として使用されてゐる。これ等の家の屋根は甚だ典型的な形を示し、棟は兩端が弓狀に上反して、その兩端は



メナンカボー族住居の正面圖及び平面圖

角狀を呈してゐる。家の外壁は唐草風の模樣を彫刻し、或は鏡をモザイク式に嵌込むこともある。

衣服は男子が家にをり、或は畑に働いてゐるときには、サロンと膝まであるズボンをはき、上半身は裸體であるが、儀式の際にはターバンを卷き、半衣、ズボン、サロンを着け紐をもつてこの上をしめる。頭目の帶鈎には金銀の金具や寶石の裝飾がつけられてゐる。

武器は歐洲から輸入した獵銃の他には、クリス、投槍、短劍等で、これ等はすべて彼等自身の手によつて製作され、華美に裝飾されてゐる。

主要食糧は米で、陸稻と水稻とが併用され耕地は男女共働してこれを作る。

ランポン族の子女

ランポン族及びパレンバン族

ランポン族はスマトラの最南部に分布するマライ族の一派で、山地にゐるものをオラン・アブン、平地に居住する者をオラン・パブランと呼んでゐる。前者は恐らく古くからこの地域に居住してゐた者で、後者はジャワ方面から來たスンダ族の影響を身心共に受けてゐるやうである。

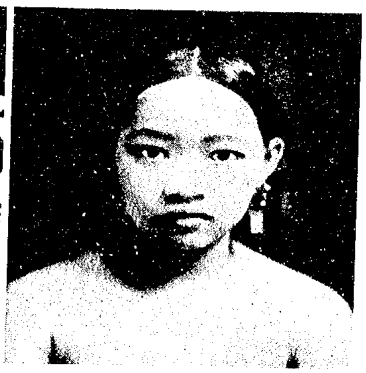
衣服はずつと以前、樹皮布をもつて作られたといふが、現在ではすべて綿布がこれに代り、男女ともにジャワ族等と殆ど異らない服裝をしてゐる。裝身具は若き女性に最も愛好され、未婚の女子は祭禮の時などには極めて派手に身を裝ふ。男子も相當に裝飾好きで、たいてい指環をつけ、こまかい細工を施したクリスを身につけてゐる。

家は高床家屋で、河岸に建てられ、數戸群集したところには、たいてい集會所が作られてゐる。家は木、竹等を以て作られ、その周圍には垣根がめぐらされ、屋内は客間、居間、寢室、臺所等に區分されてゐる。

米を主食とし、水稻を栽培する。以前は犂の使用を知らなかつたらしいが、近年、ジャワよりこれを獲て使用するに至つた。家畜としてはカラボーと山羊を飼育してゐる。

原始型

顧古型



マライ族と支那人の混血女子

パレンバンのマライ族の女子

パレンバン族の新郎新婦

パレンバン族は、パレンバンを中心として分布するマライ族の一派で、體質、風習共にランポン族と類似してゐる。

この地方は昔時繁榮を極めた室利佛逝（三佛齊）王國の中心地で、往古、ヒンヅー族の渡來する者多く、また支那商人の來航する者も少くなかつたため、住民の間にはこれ等諸族の血を混へたものも少くない。

パレンバンといふ都市の名稱が既に元代頃から存在してゐたことは、島夷誌略に「浡淋邦」といふ字が使用されてゐることによつて知るを得よう。

パレンバン族の水上住居

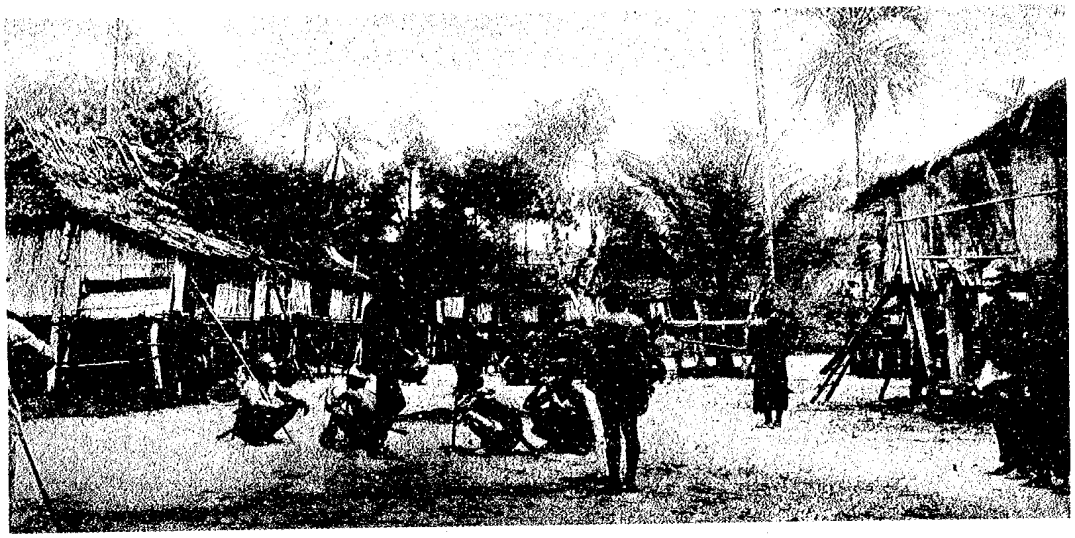
クブ族

クブ族はスマトラ南部、パレンバン地方のムシ、ラワス、テンベシ、バタン、ハリ諸河沿岸の沼澤地帶に占居し、1907 年の調査に據れば、その人口は 7,590くらゐであつた。身長158.77 糎、頭型指數 79、鼻型指數 87 で、幅の廣い鼻と厚い口唇を持ち、屢々涙阜襞のある眼を持つ者も見出すことが出來る。皮膚の色は赤褐色で、頭髪は稍く波狀を呈してゐる。體格は概して貧弱で、特に女子においてそれが顯著に認められる。

住居は高床家屋で、屋根は木の葉で葺き、床は丸木を竝べてこれを作り、壁はなく、床と屋根との間はせまく、直立して歩くことが出來ない。夫婦子供等がこの慘めな小屋で寢る。普通3戸乃至5戸の家が、稍く高燥なる叢林の中に集合して聚落をなす。これをシルッブと呼ぶ。

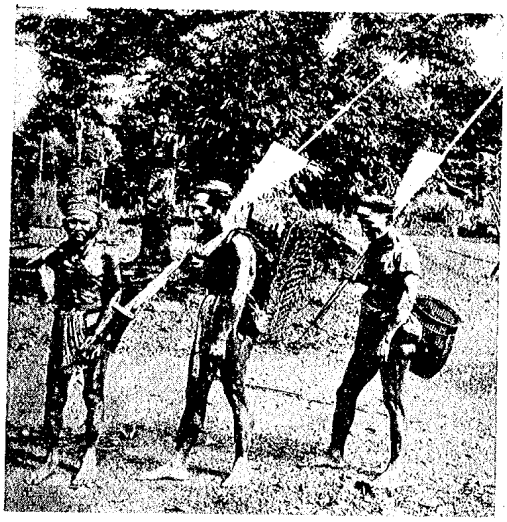
男女共に裸體生活を營み、タパ（樹皮布）の腰卷を纏ひ、その他の裝飾品をつけない。子供は全く裸體で生活する。

クブ族の男子



クブ族の村落

クブ族の米搗



農具を持つたクブ族

クブ族の女子

米に對する知識は全く缺き、これを食用としようともしない。拾集經濟の階梯に止まり、農耕を殆ど行はない。バナナを最も好み、野生の果實、植物の根塊等を食ふ。動物質食糧としては野豚、猿、龜等で、虫類、蛇、蜥蜴等もまた食用に供する。狩獵には長柄の投槍を用ひ、龜を捕獲するには鐵鈎のついた長槍を使ひ、根塊、昆虫を採集するには竹篦を使用する。調理には鹽を用ひず、肉類は焙つてから食用とする。煙草はマライ族との交易によつて求め、主として男子のみが喫煙する。

彼等は全く水浴を行はず、若し泥土で身體が汚れた場合は、これを拂ひ落すだけである。それ故、彼等の體臭は甚だしく、皮膚病が非常に多い。女子は髪を切らないが、男子は彼等の小刀でそれを短く切る。兩性ともに櫛を用ひて髪を梳く。

彼等は體質的にヴェダ族と類似するものといはれ、インドネシアにおける最古の人種層位にある者と考へられてゐる。文化的にも上記の如く極めて原始階梯にあるため定住性なく、7 日乃至 30 日間くらゐしか同一場所に定住せず、食糧を追ひ求めて常に放浪生活を營んでゐる。

ニアス族

ニアス族はバタ族から分派したものと考へられてゐるが、事實かれ等の體質、言語、風俗習慣等は、バタ族のそれと類似點を多分に持つてゐる。

彼等は體質上より見て原マライ族に屬するが、その中に多少、この地方における古代住民層の一つであるヴェダ層の所有する特質ある者を個人的に見出すことが出來るといはれてゐる。身長は 154.74 糎、頭型指數 80.72、南部住民は北部住民に比して稍々身長が高い。スマトラの原マライ族に比して皮膚の色は稍々明かるく、顴骨はさのみ突出せず、唇は薄く、鼻は多少狹鼻型の傾向を示してゐる。

南部ニアスの家は極めて壯大である。家は高床家屋で、床は地上2-3米のところに作られ、主柱は地上から屋根まで貫通してをり、柱や梁には彫刻が施されてゐる。1屋には數家族の人員が雜居してゐる。聚落は2列の家並を持ち、その中央に辻廣場が作られ、道路は石で敷きつめられてゐる。北部の家は卵形を呈し、南部のものほどその規模が大きくない。

武具をつけたニアス族

男子は褌をしめ、頭にターバンを卷いてゐる。舊時は樹皮布が盛んに使用されたが、現在においては木綿がこれに代りつつある。女子は袖無衣と、褌を着用し、頭の周圍に男と同樣にターバンをまく。これ等の褌はたいてい赤、青、黃等の染料で染められてゐる。頭目は平時にあつてはさのみ美々しく裝ふやうなことをしないが、儀式の際には黃金製裝飾品を以て身を飾る。然し南部ニアスでは、頭目を初め主だつた人々のあひだでは黃金製裝身具が日常佩用されてゐるといふ。またガラス、銅、土製の小玉や、鰐、虎等の齒牙を用ゐた裝飾品も稀でない。金以外の銀、銅、眞

ニアス族の女巫

鍮等の如き金屬も裝飾品（特に耳飾）、武器等を製作するために使用される。

この地において黄金は Kanaká と呼ばれてゐるが、この名稱は梵語の Kanaka に由來するもので、彼等が昔時ヒンヅー文明の影響を受けたことを示してゐる。ペルシヤの舊い記錄に據ると、ニアス族が銅鑛の採掘に從事し始めたのは 10 世紀頃からであるといはれてゐるが、黄金の使用はそれより遙か以前に遡れるやうである。

ニアス族の主食は米、サゴ椰子、タロ、ヤム芋、玉蜀黍等であり、北部では魚類も用ゐられる。ヤム芋は一年を通じて食用とされ、米も少いながら耕作されるし、南部ではココ椰子を栽培する。鹽は重要な調味料で、海岸住民によつて海水を煮て製造され、山地住民との交易品となる。北部では椰子酒が作られるが、これは男子のみの飲料で、女子供は飲むことが出來ない。檳榔樹の實を嚙む風と喫煙の風は盛んである。

家畜としては鷄、山羊、カラボー、豚、家鴨等があるが、すべて儀式の際に食用とされる。

武器としては短劍、槍、刀、銃等があり、槍は最も一般的に使用される。防禦具としては木製の楯が見られる。鎧冑は戰士達によつて着用されるが、それには革製のものと金屬製のものとがあり、戰士達は武裝時に特殊な附髭を用ひることがある。

白人と接觸した結果、固有文化を喪失した北部のニアス族
僅かに祖靈の降臨する石の大椅子にその面影を止めてゐる

ニアス族の頭目の家（前庭の石道は部落に結婚がある毎に二つづつ祝福のため敷かれたもの）

ニアス族の頭目の家の近景

エンガノ族

エンガノ島住民は、インドネシア民族の中で最も原始的生活を營む民族の一である。

彼等は 1770 年頃まで石斧を使用してゐたことが記錄に示されてゐる。然し當時においても彼等は鐵器に對する知識を全く缺除してゐたわけではなく、既に周圍のマライ族と無言貿易によつてココ椰子の果實と古鐵とを交易してゐたとのことである。

エンガノといふ名稱は彼等自身のものではなく、ポルトガル語の「失望」を意味するもので、マライ族はこの島を「プロ・タランギャン」即ち「裸體人の島」と呼んでゐる。この島は 1596 年 7 月 5 日にオランダ航海者によつて正式に發見記錄されたものであるが、1593 年發行の亞細亞地圖には既にその位置が示されてゐる。

エンガノ族が最初異邦人と接觸した頃は、彼等に對し甚だ敵意を持ち、もし異邦船がこの島の沿岸を徘徊すれば、直ちに法螺貝を吹き鳴らして島人を集め、カヌーを操つて群集し、掠奪を試みたが、後にはこれと交易を行ふやうになり、遂に彼等はその妻や娘たちをも連行し、これと彼等の欲する物品とを交換するやうなことを敢てした。かやうな蠻風は當時のニアス、メンタウェー住民の間では、全く見られなかつたところのものである。

彼等の村落はカウダラスと呼ばれ、海岸や川沿ひに營まれる。村落は 5-6 戸乃至 9-10 戸くらゐの家（ウバ）から成立し、周圍には高さ 5 呎餘の木柵をめぐらす。村と村との交通は叢林中に通ずる小徑、或は河川、海岸を通じて行はれ、水上交通には兩側に浮木のつけられたカヌーが使用される。

家は圓形で 6 呎から 20 呎くらゐの高さを持つ鐵木の柱の上に作られる。屋根は竹や木の葉で葺き、床に板材を敷き、屋根の頂きには木偶、又は鳥を模した彫刻品を置くものもある。丸柱に刻目を入れた梯子によつて出入するが、入口は一つで窓が全くないため、室内は常に暗黑である。寢る場合にはパンダナスで編んだ筵を用ひるが、これが彼等の唯一の家具である。然しかやうな家には成年者のみが泊りうるので、年少者は更に貧弱な小屋を宿としてゐる。村にはかうした住居のほかに、四角なプランを持つ集會所（カディオフェ）があり、村のことはそこですべて會議される。

エンガノ族の男子

食物はタロ芋、ヤム芋、ココ椰子、バナナ等、及び野鳥類、魚類の肉であり、飼育する豚は儀式の際にのみ食用とされる。米については 1771 年頃まで、その存在すら知らなかつたやうであるが、1840 年頃、マライ族から交易によつてこれを得、以後引續きこれを欲求するやうになつた。煙草、椰子酒もまたマライ族から傳授されたものである。調理には竹筒を使用し、火は木と木を磨擦して發火させる。

獵には犬を使役し、獵具としては槍が用ひられ、漁撈には網と魚叉とが使用される。

衣服は男女とも殆ど裸體生活を營むが、男子は狩獵の際、黃色のタパで作つた半衣を着

用する。女子は平常タパの細布を腰に纏ひ、畑仕事や魚撈に行くときには、バナナの纖維で編んだ外被をつけ、儀式の場合にはタパ製の半衣を着用する。

武器の主要なるものは槍である。槍は長さ6呎、堅い木で造られ、鋭く尖らせた竹の穂をつけ、魚骨や鮫の齒を列植する。この形式の武器はインドネシアには全くなく、ポリネシア、ミクロネシアのそれと近似してゐる。

防禦具としては高さ6呎、幅3呎餘の大楯がある。ハントマンの見聞によると(1592年)、彼等は當時弓矢を使用してゐたといふが、現在では全く見られない。小刀、斧の類は後世マライ族から交易したもので、彼等固有の器具ではない。

出産は籔の中で行はれ、幼兒の名は悪靈の邪視から免れるために度々變更される。

死者は村の中、或は村の近くに埋葬され、傳染病による死者は裸體にして叢林中に投棄される。姙娠中に死亡した婦人は、タパで包んで叢林中に埋葬する。

メンタウェー族

メンタウェー島は、シベルート、シポラ、南北パゲーの諸島より成る。メンタウェーといふ地名は土語で男性を意味するシ・マントェーに由來するらしく、彼等自身はサカラガン(人間)と自稱してゐる。

聚落は常に海岸から多少隔つたところに、川に沿ふて散在する。各聚落は1戸以上の集會所(ウマ)と、住屋(ラレップ)及び獨身者專用家屋より成立し、これ等の周邊は放飼ひしておく豚や鶏等の逃亡を防ぐため、木柵で圍まれてゐる。家屋はすべて高床建築で出入は梯子によつてなされる。

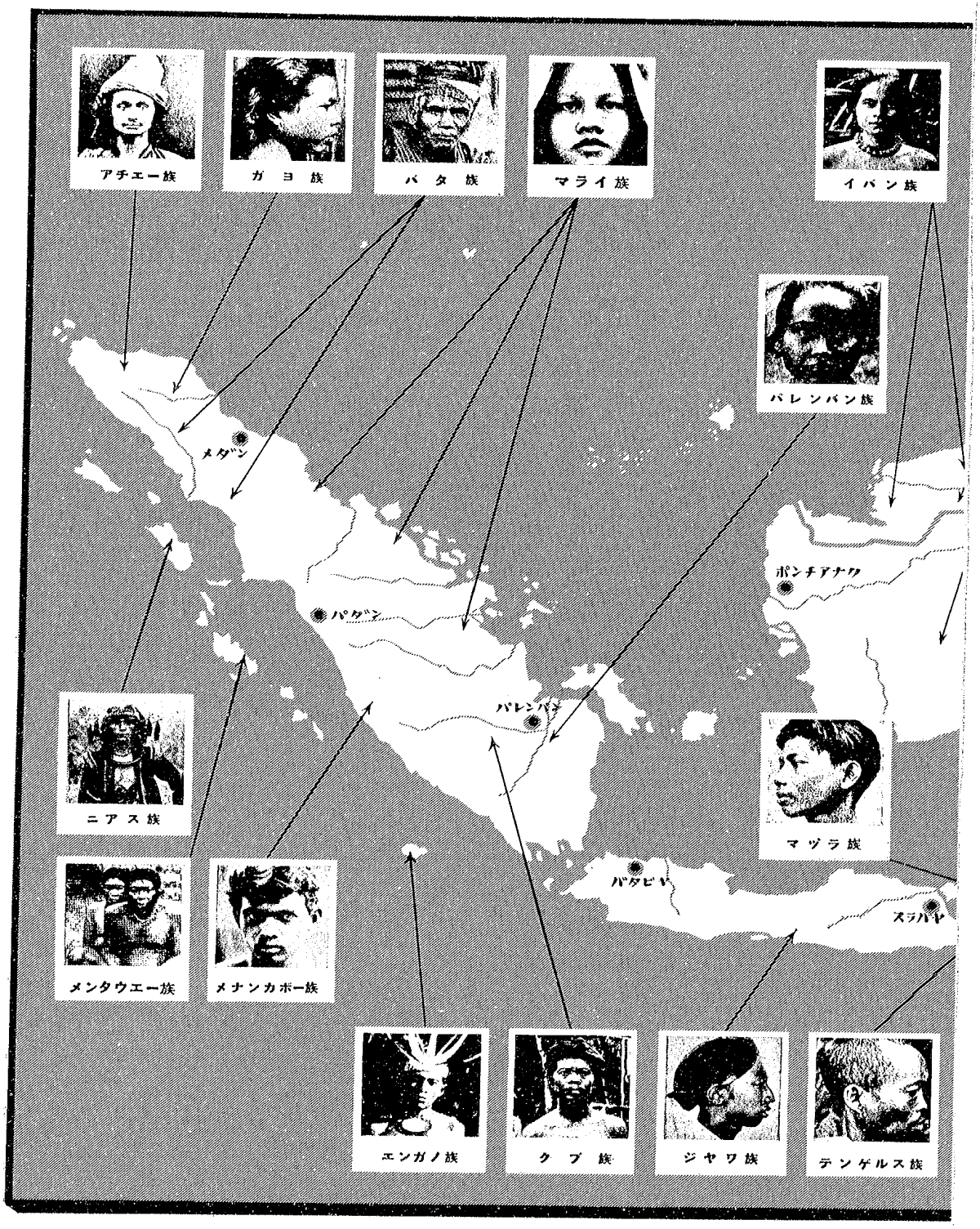
男子はパンの樹の樹皮から作つたタパの腰卷をまき、赤籐の帶、硝子玉の頸飾、腕輪等

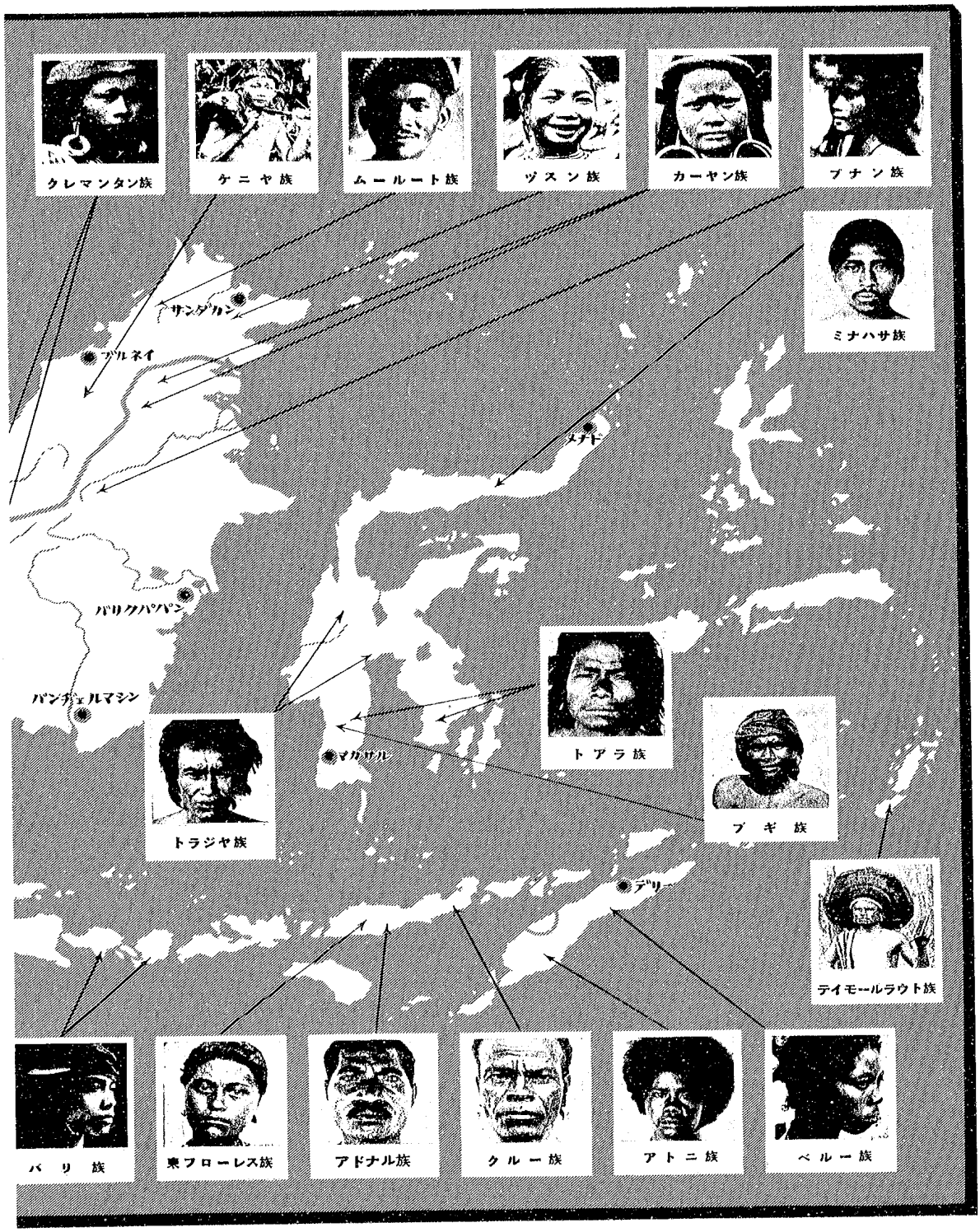
メンタウェー族の漁夫

をつける。女子はタパの腰卷を纏ひ、外出の際ははは芭蕉布で作つた上衣とスカートを着ける。男女とも、羊齒類、或は椰子の葉で編んだ帽子をかぶる。齒牙變形と文身は男女共通に行はれ、殊に文身は顏面、體部、四肢、指にまで及ぶものが見られる。

主要食物はパゲー島においてはタロ芋で、これに次ぐものはバナナである。然しシベルート島ではサゴ椰子が主食とされる。炊事には竹筒を用ひ、鹽は海水から作られるが、あまり使用されない。飲料には椰子水、砂糖黍の汁にバナナ及び若い椰子實の薄片を混じたポンチのやうなものが愛用される。米は近年輸入されたもので、北パゲーの歐化した村においてのみ耕作される。作物栽培にも男女の分業があり、タロは女子によつて、バナナは男子によつて作られる。タロは水澤地に作られるので、女達はカヌーを操つてこの畑に行く。狩獵は男子の仕事で、犬を使役し、集團的にこれを行ふ。獵具としては弓矢が專ら用ひられ、矢には毒液が塗られてゐる。漁撈もまた行はれ、網銛、釣具、魚毒等が使用される。魚毒にはデリス(Derris ellipitica)の根が用ひられる。

東印度諸島民族分布圖


アチエー族
ガヨ族
バタ族
マライ族
イバン族
バレンバン族
メダン
ポンチアナク
パダン
パレンバン
ニアス族
マヅラ族
バタビヤ
スラバヤ
メンタウエー族
メナンカボー族
エンガノ族
クブ族
ジヤワ族
テンゲルス族


クレマンタン族
ケニヤ族
ムールート族
ツスン族
カーヤン族
ブナン族
ミナハサ族
サンダカン
ブルネイ
メナド
バリクパパン
バンジェルマシン
マカサル
トアラ族
トラジヤ族
ブギ族
デリ
テイモールラウト族
バリ族
東フローレス族
アドナル族
クルー族
アトニ族
ベルー族

ジャワ

ジャワ島は小スンダ列島中の一大島で、その總面積 132,000 平方粁、島の中軸に 100 餘の火山が連立し、平野は海岸、河口沿岸に發達し、最も低い部分は不毛なる沼澤地となつてゐるが、他は肥沃で耕作に適してゐる。

人口は東印度諸島中最も稠密で、1930 年調査によれば 4,672,000、平均密度 31.56人（1平方粁）である（マヅラ島を含む）。種族別人口は**第6表**に示す如く、原住民 5,794,000、華僑 652,000、白人 203,100、インドネシア族 6,000、その他 58,900で、華僑勢力はこの島においても著しきものがある。

ジャワ島において最も有力なる民族はジャワ族である。ジャワ族はジャワの西部スンダ族の居住區域及び東部マヅラ島に面する灣の沿岸地帶を除く一帶の地に分布してをり、その人口 2,340萬、文化程度も高い。往昔、ヒンヅーの血を混へたものは、特にその上層階級に屬する者の中に見出されるといふ。スンダ族は島の西部に分布し、人口 765 萬を算へ、マヅラ族は人口 360 萬、マヅラ島及びその對岸に居を占めてゐる。これ等はいづれも言語文化を多少異にするが、體質的には大差なく、マライ族の分派で、新來住民層に屬する者である。またテンゲルス族は東部のテンゲル山地に住み、ヒンヅー教を信奉する原始生活を營んでゐる。

この島には悠遠なる古代から人類が棲息してゐた痕跡を止めてをり、その最も有名なものは、1891 年に和蘭の軍醫デュボアによつてベンガワン河左岸のトリニール附近に堆積する中部洪積火山灰層中から發見された直立猿人（Pithecanthropus erectus）の化石骨格である。この化石はデュボアによつて精査され、その結果、類人猿と人類との中間的體型を顯示するものとして發表され、學界に非常なる反響を齎した。彼の直立猿人說に對しては贊否交々あり、或る說はこれに贊同し、或る者はこれを人類とし、また或るものはこれを以て類人猿と斷じ、更にまたデュボア自身もその後自說を變更する等、これに對しての定說は未だ決定してゐない。然し解釋は如何にあらうとも直立猿人の舊さと、その具有する原始的身性には變りはなく、人類的特徵を有する世界最古の化石として、依然として學界注視の的となつてゐる。近年に至つてケーニッヒワルドによつて、同地附近から更に頭蓋化石が發見されたが、その頭蓋學的特質は直立猿人のそれと近似してゐるとのことである。また 1931 年、トリニールから餘り遠くないヌガドンの洪積層中から化石頭蓋が見出され、オッペノールトによつてソロ人類 Homo (Javanthropus) sloensis として發表されたが、これはネアンデルタール人類とロデシア人類とに近似する特徵を持つてゐるといはれてゐる。

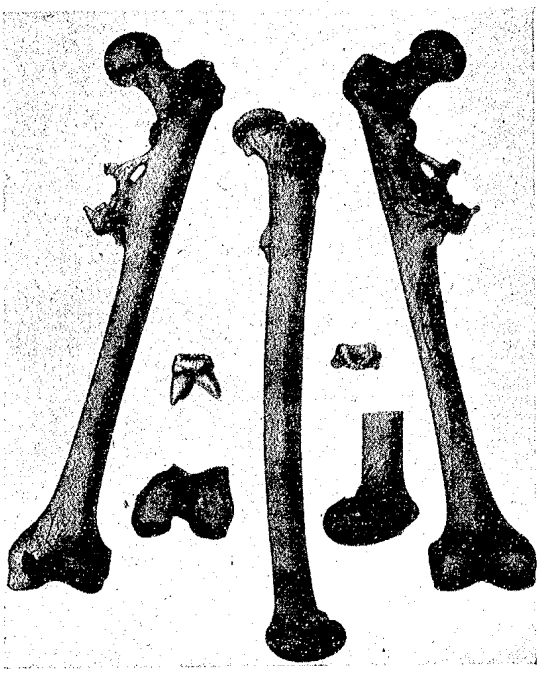
支那河北省周口店洞窟から發見された北京人類の骨骸について研究を試みたワィデンライヒは、直立猿人と北京人類との關係を論じ兩者が共通せる特質を具備することを指摘し更にソロ人類をネアンデルタール人類と同種に屬することを認め、このソロ人類を以て、直立猿人及び北京人類と眞正人類との中間を連ねるものとしてゐる。とにかく、ジャワ島

直立猿人復原圖

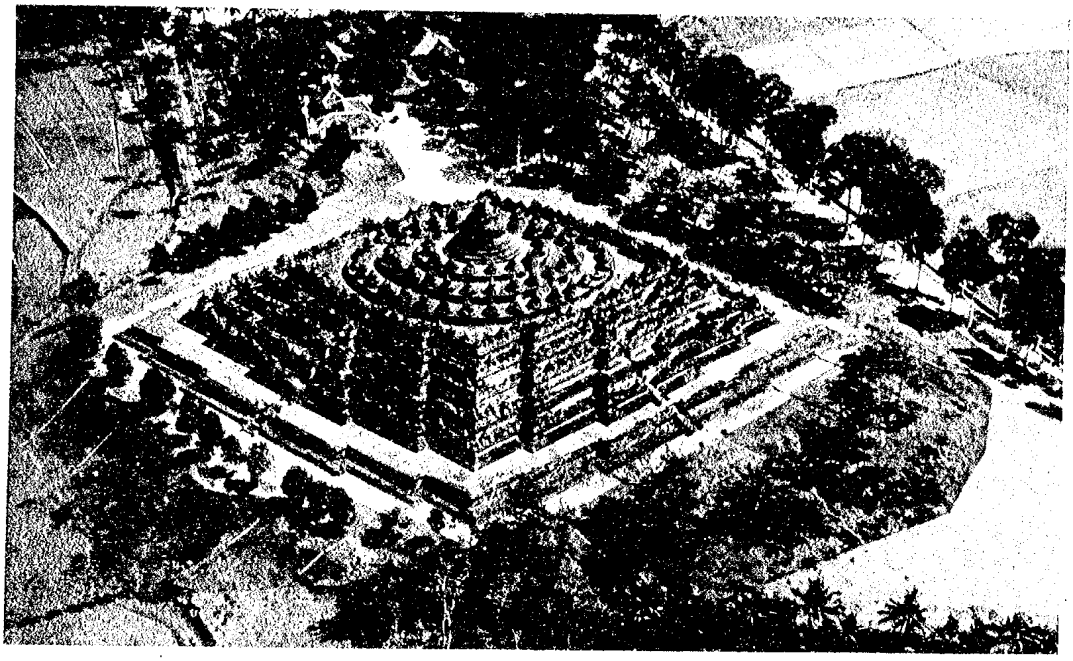
直立猿人の頭蓋骨

直立猿人發見地の指標

中央突出部の水溜が發見地



直立猿人の大腿骨と臼齒



ボルボドール寺院の遺跡

に北京人類と似通つた性質を持つ古人類の遺骨が存在することは、この地が洪積世頃まで大陸と接續し、人類的にも親緣關係を保有してゐたことを示してゐる。

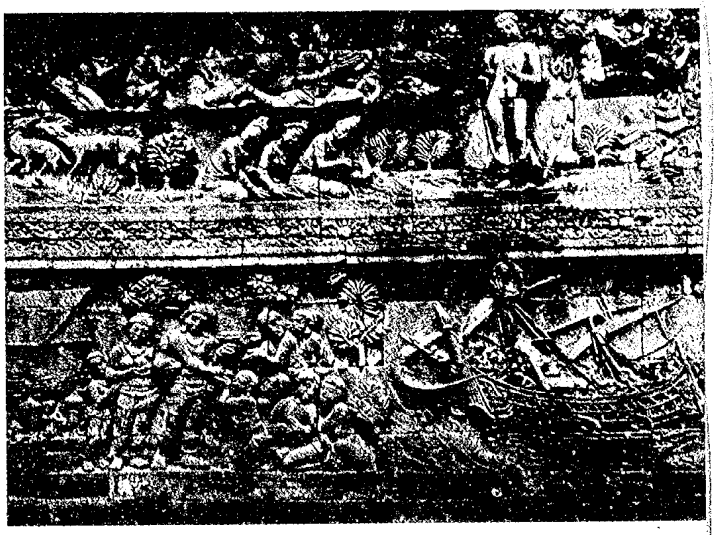
いづれにせよ、このソロ河沿岸の火山灰堆積層中には、化石人類の遺骸が相當豐富に埋沒されてゐるらしいことは、前記の如き諸事實から豫想することが出來る。今や東亞共榮圈の確立と共に、この貴重なる世界最古人類の遺跡は、これとほぼ匹敵する舊さと原始性を持つ北京人類の遺跡と共に、わが國の治下に置かれることとなつた。從つて從來、歐米學徒によつ獨占されてゐたこの種の調査研究が、わが學界を中心とする東亞の學徒の手によつてなされる日も遠くはないであらう。

ジャワの歴史は西紀1世紀頃、ヒンヅー族及び漢族がこの地と交易を開始した時からはじまる。古代ヒンヅー族はこの島に移住を試み、5世紀の初頭にはタルーマと呼ぶ婆羅門教國を建設したが、7世紀に至つてこの國は亡び、カリン國がこれに變つた。まもなくこの地の中部は佛教を奉ずるサインドラ王朝の支配するところとなり、多數の寺院が相繼いで建設せられた。雄大壯麗なるボルボドール寺院の如きもその一である。

サインドラ國進出の結果、カリン國は東部ジャワに後退し、その宗教である婆羅門教もこれに從つたが、9世紀に至つて前者は滅亡し、マランタン王國が新しく起り、その王トハルマワンシャは支那と修交し、バリ島を勢力下に置き、更にスマトラ攻擊を試みたが、これは不成功に終つた。

マジャパイト王國はこれに續いて起り、その初代の王ウィジャヤは、當時ジャワに向つて進攻中の忽必烈汗の遠征軍と通じ、その力によつて反對勢力を亡ぼし、事成るや忽必烈軍を急襲して、これを敗退せしめ、マジャパイト王朝の礎を基いたものである。

ボルボドール寺院内の塔と石佛

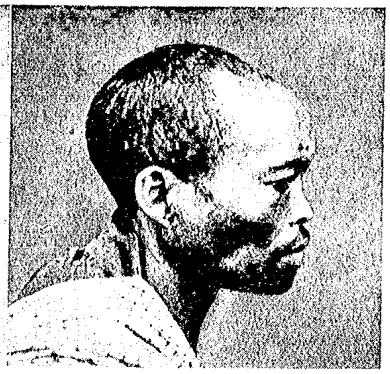


ボルボドール寺院の壁面浮彫（右方の浮木附きの船及び左方の高床建築に注意）

ボルボドール寺院の壁面浮彫（釋迦一代記を現す）

ジャワの貴族（印度型）

ジャワの女（下層マライ型）



テンゲルス族の男子

ジャワの家

街上にいこふ女達

更紗を作るジャワの女

ワヤン劇の假面作り

ジャワ族

マヅラ島及びこれに對する沿岸一帶のマヅラ族居住地域を除くジャワ島全地域に分布する海岸マライ族の一分派で、身長161.76糎、頭型指數 84.4、古くヒンヅーの血を混へ、また支那人と混血してゐるものもある。ヒンヅーの血を混じたものは、概して上層階級のものに多く見られる。

貴族は精緻な彫刻のある美しい家屋に居住し、天鵞絨や絹に刺繍した豪華な衣類をまとひ、寶石類を身につけ、外出にはパヤンと呼ぶ日傘を後から差しかけさせて歩くやうな贅澤な生活をしてゐるが、一般の生活はあまり豊かでない。稍々富裕なる者の住宅は客間（パンドポ）、客用寢室（プリンギタン）、家族の居間（オマア）の一部分より成り、これ等はたいてい廊下で連ねられてゐる。これより多少貧しい者の家は客間と居間の二つから成つてゐる。これ等の家には煙突はなく、窓のある場合も少い。貧困なる者は木や竹を籐で縛り合せ、アタップで葺いた小屋に住み、窓は全くなく、採光は入口からなされる。西部ジャワの家屋は床が高く、床下は家蓄置場に利用されてゐるが、東部になつては床は低く構築される。

農民男子の服裝は猿又をはき、その上に長さ6呎、幅 3-4 呎の格子、或は縞模様のあるキャラコのサロンをまき、シャツを着る。髪は髻のやうに束ね、上に布を卷き、後方で結ぶ。雨除け、日除けには編笠を使用し、胸の邊に煙草その他を容れた布袋を下げる。普通、男は家内ではサロンだけで生活してゐる。然し市街地の生活者はもつと歐化した風をしてゐる。女子の服裝は中部ジャワでは前の披いてゐない短い上衣に長いサロンをまきスレンダンと呼ぶ肩掛を纏つてゐる。髪は後で小さく束ねてピンで止め、若い婦人は美しい花をさす。また直徑半吋、長さ4分の1吋くらゐの耳飾をはめることもある。男女共に

日傘を掲げさせて街上をゆくサルタン

ジャワの米搗（臼の形に注意）

マヅラ族の女子　　マヅラ族の男子

腕輪、指輪を好み、小兒は足頸に輪をはめることもある。外出はたいてい跣足であるが、簡單なサンダルをはく者もある。

米を常食とし、飯は右手の拇指と食指、中指でつまんで食ふ。調味料として各種の香料を使用してゐる。水はたいてい煮沸してから用ひ、水差から直接飲むが、口唇が直接容器につかないやうに注意するし、左手は汚れた物以外には決して使用しない。

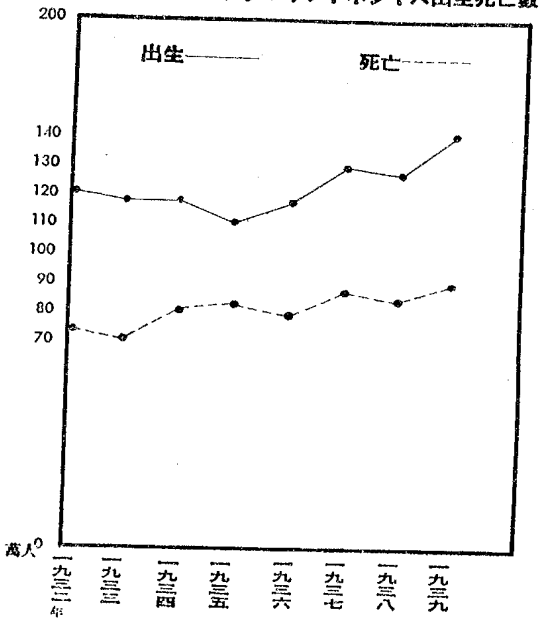
水稲を作り、耕作には水牛を使役する。

大部分の者は回教徒であるが、彼等の宗教の中には精靈崇拜的要素が多分に見られるといふ。上流社會では一夫多妻が行はれてゐるが、庶民階級においては一夫一婦制が普通である。

マヅラ島に分布するマヅラ族は、身長158.80糎、頭型指數85で、その體質、生活共にジャワ族に類似し、テンゲルス山中のテンゲルス族は、身長161.2糎、頭型指數79.71、原マライ的體質を保存してゐる。

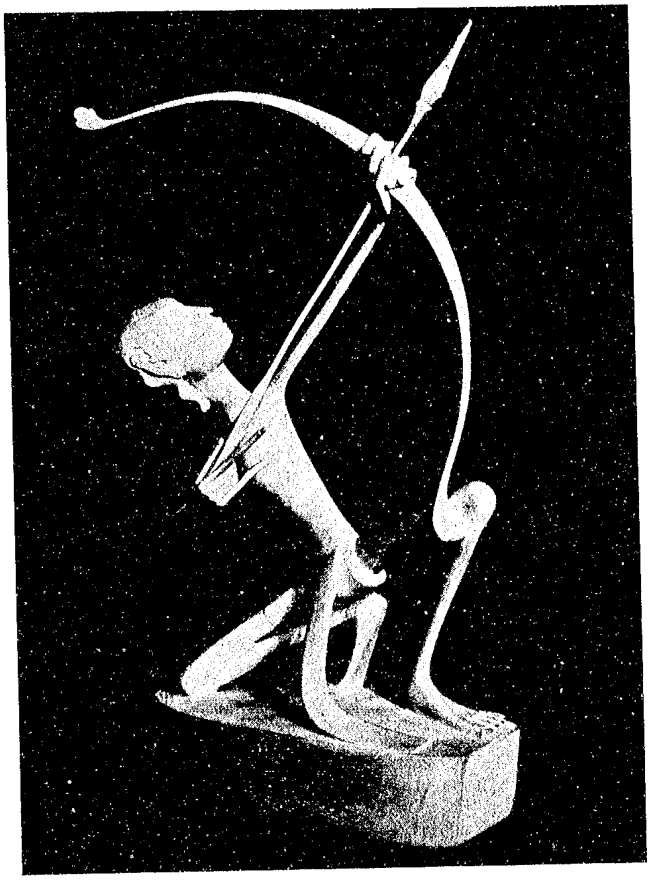
またスンダ族は島の西半、南側一帶に分布し、人口765,000、男子平均身長159.13糎、頭型指數85.53、開化マライの一族で、高床家屋に居住し、農業生活を營み、回教を信奉してゐる。

第6表：ジャワ・マヅラのインドネシヤ人出生死亡數



マヅラ族の鬪鷄

小スンダ列島



バリ族の彫刻

小スンダ列島は大スンダ列島の東に連なり、バリ、ロンボック、スンバワ、アロール、ウェルタール、タマール、バンダ諸島にいたる島嶼列と、スンバに始まり、ティモール、ティモールラウトを經てケイ諸島に終る島嶼列との二つより成立してゐる。

人口はバリ、ロンボック島において、その總數 1,803,000、その密度は1平方粁當り 175 人、種族別人口構成は、インドネシア人 1,789,000、華僑 11,000、歐洲人 1,000、東洋人 2,000 等である。ティモールにおいては人口總數 1,657,000、その密度は1平方粁當り 26 人で、バリ、ロンボックに比して遙かにまばらである。種族別人口はインドネシア人 1,646,000、華僑 7,000、歐洲人 1,000、東洋人 3,000 等で、華僑人口は第2位に位し、その根強い進出力を如實に示してゐる。

以上の數字は 1930 年の調査に據つたものであるが、舊蘭印政廳が、ここにインドネシア人と總稱したものを、細かく民族別に見ればバリ（バリ、ロンボック島東側）、ササック（スンバワ島）、スンバ（スンバ島）、マンゲライ（フローレス島西側）、ニヤダ（同島中部）、クルー（同島東部）、アドナル（アドナル島）、アトニ（ティモール島西側）、ベルー（同島中部）等の諸族となる。

小スンダ列島における古代民族史、或は文化史は現在のところ、明らかでない。

この列島の中で、ジャワに最も近接するバリは古代ジャワ文明（印度文明）の影響が強く、ジャワのクルタ・ネガラ王の時、バリは完全にその屬領と化し、マジャパイト王國沒落ののち、回教徒の勢力がジャワを席捲するに及んで、その他の婆羅門教徒の一部はバリに逃れ、この地において彼等傳來の宗教を保持し續けた。

またこの列島の中部に位するスンバワ、フローレス兩島は、16世紀頃、マカッサルを中心とするゴア王國の屬領となつてゐた。

この列島に對する白人の侵略は、西班牙、葡萄牙兩國人が先驅をなし、16世紀初頭、スンダ方面に據點を構へ、ここを足場としたが、おくればせに加つた和蘭人はゴアを降服せしめ、マカッサルを中心とし、そこに侵略の根據地を得た。

バ　リ　族

バリ島及びロンボック島の西半に分布し、人口1,111,659、文化マライ族に屬し、體質的にジャワ族と異らない。

衣服もジャワ族と大差なく、女子は普通の場合は、上半身裸體で乳房を露はし、下半身に色模樣のあるサロンを卷くが、祭時などには胸に布をまき、更にスレンダンを纏ふ。

家は高床家屋でない床の低いもので、建築資材としては粘土、自然石等を使用する。

家屋のプランは長方形で、壁は粘土、又は自然石で積み、屋根はアタップ、或は竹材で葺く。集合住宅はないが、村によつては一種

捧げ物を頭上に寺院にゆくバリの娘

の集會所が作られてゐるところもある。

米を主食とし、水田耕作が行はれてゐる。

婆羅門教が普及してゐるが、その教理は本來のものとかなり相違し、精靈崇拜的要素が多分に加味されてゐる。この教徒の間においては、厚葬の風が盛んで、葬儀は極めて華美盛大に行はれ、屍體は獸型の棺に收められ火葬とされる。嘗ては殉死の風習も存在してゐたといはれるが、現在では禁止されてゐる。

一部の住民は阿片吸引の悪習を有し、大麻を燃し、その煙を吸ひ、狂燥狀態に陷り、神憑りする者もある。

現在のバリ族は三つの集團より成立してゐる。第一はマジャパイト王國沒落の後、ジャワから移住して來た人々の後裔で、彼等は現在でもウォン・マジャパイトと呼ばれ、その或る者は過去においてヒンヅーの血を混へ、概して容姿端麗である。第二は婆羅門教の影響を受けないバリ族で、バリ・アガといはれ

バリの總本山ブサキ寺入口

バリ族の男子

バリ族の女子

木彫をするバリの男

バリの街頭の物賣り

る。第三は海岸地帶に占據し、回教を信奉するバリ・スラムで、これはマヅラ族の血を混へてゐる。

バリ族が過去において、高い文化水準に到達してゐたことは、當時彼等と交渉のあつた漢族の記錄によつて知ることが出來る。一例として舊唐書の婆利國傳を抄錄して見る。

『…國民は皆黑色で、耳に孔を穿つて璫をつけてゐる。王の姓は剎利耶伽、名を護路那婆といひ世襲で、眞珠や櫻珞で裝飾した冠をつけ、金牀に坐し、侍女は金花をちりばめた飾を帶び、或者は白毛の拂子を持ち、或者は孔雀の羽の扇を持つ。外出の時には象に乘り、金、太鼓を打鳴らして、瓢を吹いて奏樂する。男は髮を卷き、吉貝布を腰に卷く。氣候は大變に暑くて盛夏の如くで、收穫は年二回ある。』

以上の記事には、多少の誇張や誤解があるかも知れないが、とにかく古代バリの生活を彷彿せしむるものがある。

スンダ族の男子

スンダ族の村落

小スンダ列島の諸族

小スンダ列島の原住民の生活に關する調査は、まだ十分行はれてゐない。

この地方の家はすべて高床建築で、ティモール島のアトニ族の家屋はプランが圓型で、鐘型の草屋根が葺かれ、マンゲライ族も前者とほぼ同型式の竹材で骨組を作り、草で葺いた屋根の家を營んでゐる。またベルー族はプランが楕圓形の高床家屋を作るし、ニヤダ族は整然と配列した家並を持つ村落を營む。

住民はたいてい褌やサロンの類を纏ひ、耳飾や頸飾で身を飾つてゐるが、身體裝飾は概してその發達が顯著でない。

食糧は米、玉蜀黍、サゴ椰子、芋類等が、その主なもので、耕作法は一般に幼稚である。

原住民はメラネシア、或はパプア的體質を有するものと、原マライ的體質を有するもの及びその混血型より成り、文化マライ族の影響もかなり認められると考へられてゐる。

彼等の體質は、テン・カートに據れば、スンバ族は最も純粹で、印度人、又は歐洲人を聯想させる高身長の美しい體軀を有し、アドナル族には印度型とパプア型と、原マライ型が見出され、東フローレスのクルー族分布地の西側の住民の間には、パプア型が顯著に認められる。西ティモール族はベルー族より一層メラネシア的であるが、原マライ的體質はここでも矢張り確認される。ベルー族は皮膚が暗色で捲毛を持つたものと、皮膚が稍〻明色で、より身長の高いマカッサル族の體質に比す可き型のものとが認められるといふ。

東フローレス族の男子と女子

ベルー族の男子と女子

スンバ族の男子と女子

ニヤダ族の女子　　クルー族の男子

アドナル族の男子

アトニ族の男子　　アトニ族の村落

ティモールラウトの原住民（パプア族系の體質と文化を持つ）

ボルネオ

ボルネオはその總面積766,000平方粁を算し、世界第三位の大島である。人口はだいたい170萬と推定され、その密度は1平方粁當り僅かに4人を數ふるに過ぎず、極めて稀薄である。

このインドネシア人の中には奥地に居住する原マライ族に屬する未開種族が含まれ、ホース及びマクドガールに據れば、その總數は200萬くらゐで、内譯はクレマンタン族100萬以上、ケニヤ族約30萬、ムールート族約25萬、イバン族約20萬、カーヤン族約15萬、ブナン族及びそれと類似する放浪種族約10萬であるといふ。

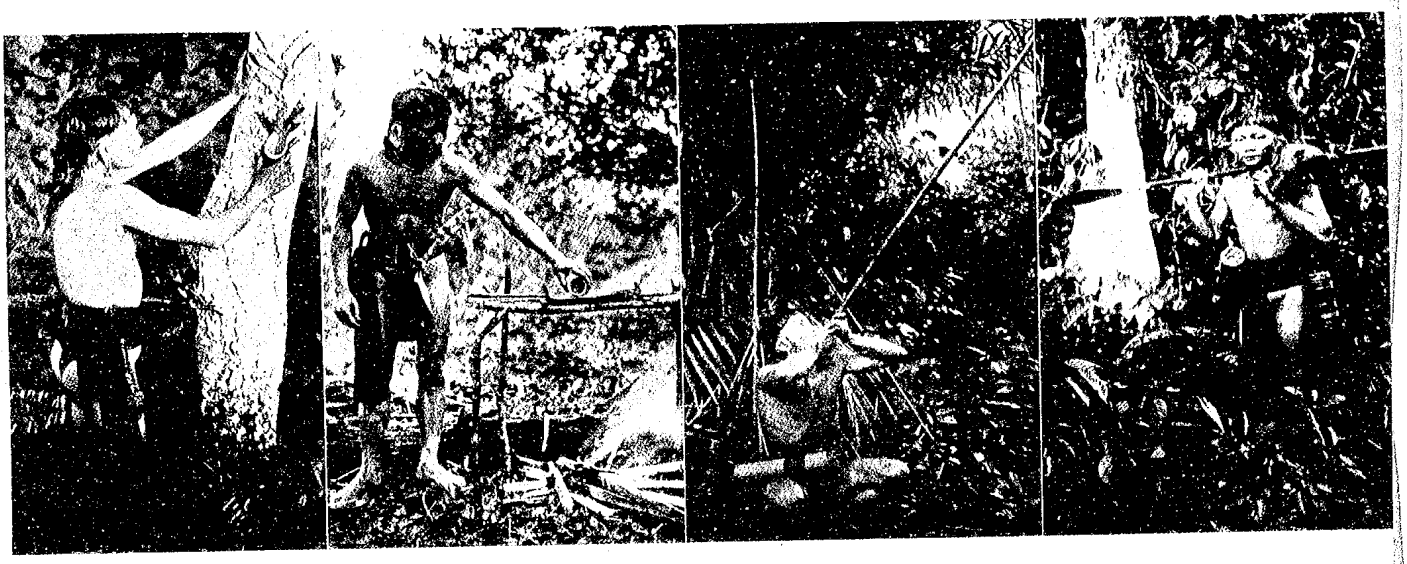
この地においても石器時代の存在は認められてをり、現にクレマンタン族の如きは石器類を保存し、且つそれに關する口碑も傳へられてゐるが、まだこれ等に關する組織的調査は行はれてゐない。

原住民は古く渡來し定着した原マライ族と新しく渡來した開化マライ族に分けられ、前者は主として奥地に、後者は主として海岸地帶に分布してゐる。然しこの島においては、この地方における古住民層に屬するヴェダ、ネグリトー系諸族はこれを認めることを得ない。ただブナン族の或る者に、波狀毛的特質を相當顯著に示現する者の存在に基き、その中に嘗てヴェダ系族の血が混入したものでないかといふ疑問を提出する學者もある。

これ等の原マライ族群は、いづれも東南アジアからこの島に流入したものであることはすべての者がこれを認めてをり、その經路に就ては二つの方向が推定されてゐる。即ち、ケニヤ、カーヤン等の諸族は、彼等の保持する文化、體質が、アッサム、ビルマ方面のナガ、カーレン等の諸族に近似する點から、この方面に故鄕を有するものと考へられてゐるし、ムールート族の如きは、その農耕技術がルソンの稻作種族のそれと全く同一系統に屬することから、これらの諸族との關聯が想像されてゐる。イバン族は最も新しい渡來者で、彼等はスマトラ、或はマライ半島方面から、前記諸族に遙かにおくれて渡來したものといはれてゐる。

嘗て東印度諸島を席捲した古代ヒンヅー文化の影響は、この島においては餘り顯著でなく、僅かにその東南地區に傳播されたが、殆ど繁榮を見ずに衰退し、まもなくジャワのマジャパイト王國の屬領と化した。

古くからこの地と通商關係を持つてゐた支那の古文獻に據ると、『その國は板を以て城を築き、城中に萬餘の住民が居り、十四州を統治してゐる。王城は貝多葉を以て屋根を葺くが、民家は草葺である。王の服の色は支那のそれに類似する。裸體、跣足で、臂に金圈をはめ、手には金練をつけ、布を纏つて、繩床に坐してゐる。王が外出するときは大布をひろげ、その上に座し、これを衆庶が舁ぎ、これを軟輿と呼んだ。五百餘人を從へ、前の者は刀劍、器械を持ち、後に從ふ者は香腦、檳榔等を容れた金盤を捧げる。戰舟が百餘隻もあり、戰ひには刀を持ち、銅鑄の甲を被り、形の大きい筒形の物をつけ、腹背を護る。器物には多く金を使用する。土地に麥を產しないが、麻稻があり、沙糊を食糧とした。羊、



ボルネオの盜人（毒液をとる・毒液を火で乾かす・毒矢を吹矢で放つ・獲物を肩に歸る）

鷄、魚がある。養蚕を行はないので、吉貝の花を以て布を織る。尾巴樹、加蒙樹、椰子樹の芯から、液汁を採り酒を造る。富人の婦女は花錦銷、金色帛を腰に纏ふ云々』（趙汝适、諸蕃志）とある。以て當時の文化を推考することを得よう。

その後 14 世紀末に至つて、マライ半島より移住して來たマライ族によつて回教がもたらされ、それは漸次この島の海岸地帶の開化地域に普及されるに至つた。

16 世紀に及んで、開化マライ族によつて、島の北部にブルネイ王國が建設されたが、この國の主權者の家系には、それ以前、この島に移民した漢族の血を混へてゐるといはれてゐる。

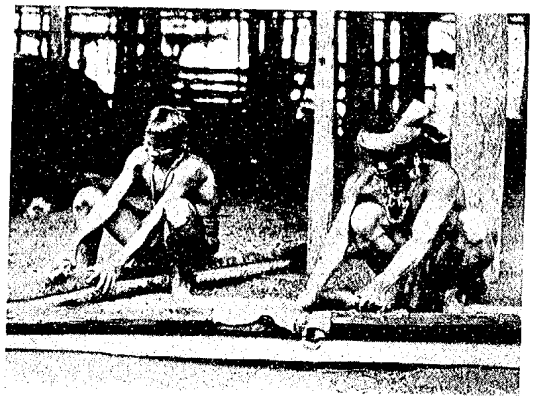
ボルネオと最初に交渉をもつた歐洲人は葡萄牙人で、彼等は 16 世紀初頭頃、ブルネイ族と交易を行ひ始めた。その後、ややおくれて西班牙人がこれと對抗したが、結局、前者の勢力に敵することが出來ず後退した。17 世紀に至つて既にジャワを確保した和蘭、續いて英國が攻略の手をこの地にのばすに至つたが、種々なる事情から蘭英兩國ともに、その全力をここに傾注するを得ない狀態にあつた。この機に乘じ、海岸地帶住民の一部は海賊と化し、盛んに附近を航行する貿易船を襲ひ通商を脅し、各植民地爲政者及びブルネイ國統治者を困惑せしむるに至つた。この時に當り英印混血兒として生れたジェームス・ブルックは巧みに兵を用ひ、この海賊を征壓することに成功し、その功によつてブルネイ王よりサラワック領を讓渡され、その地に據つて自らラージャと稱し、サラワック王國を建設するに至つた。まもなく英國は北ボルネオの覇權を掌握し、1891 年に至つて蘭英兩國に協定成立し、英は北ボルネオ、蘭は南ボルネオの統治に專心することとなつた。

カーヤン族

中央ボルネオ一帶の地に占據し、河川の沿岸に聚落を營む。彼等の身長は低く、頭型は

カーヤン族の女子

獨木舟を乘ぐる

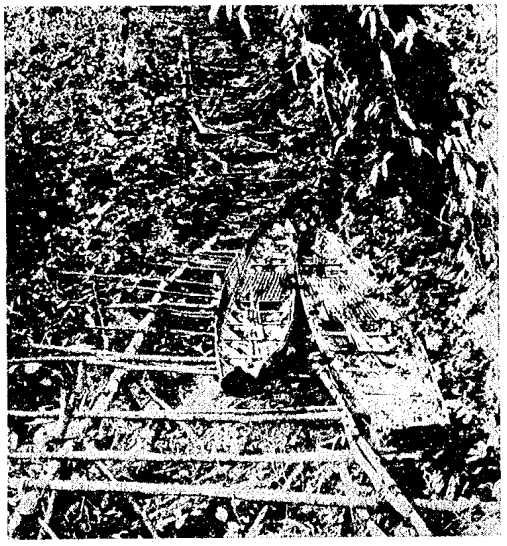


（上）樹皮布の製造（樹皮を剝ぎ木槌で柔軟にして水でさらす）（左）樹皮布の衣服

中頭、或は短頭に屬し、顴骨は餘り突起せず、鼻は稍く扁平に近いが、鼻稜は概して眞直ぐに通つてゐる。眼は斜眼の傾向があり、光彩の色は中等度である。毛髪は波狀を呈するものと、直毛なるものとあり、その色は黯黑色である。

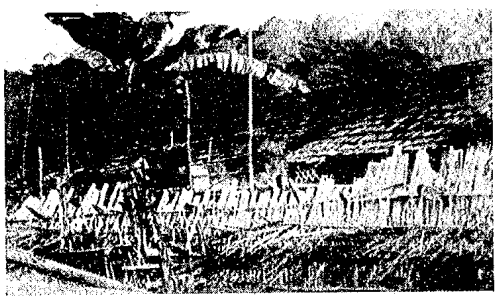
彼等の性格は極めて好戰的であるが、イバン族より兇猛でなく、宗教心に篤く、彼等の頭目を尊敬し、これに順應する。勤勉で勞働を厭はないが、保守的で、その動作は鈍重である。手工藝に最も秀で、精緻なる織物、刺繍、編籠、彫刻等を造る。

衣服はイバン、ケニヤ、クレマンタン等の諸族と大差を見ない。最も一般的なのは、男子の褌と女子の腰卷とである。これ等は以前は樹皮布で造られたが、現在では殆ど木綿布が用ゐられるやうになつた。褌は幅1碼、長さ 4-8 碼、前面に 18 吋ほどの布を垂らすやうにしてこれを緊め、殘つた部分は腹部にぐるぐる卷きつけてゐる。女子の腰卷は、その上端に紐がつけられてをり、それによつて腰邊に結ばれる。布の長さは膝に達する。勞働する際にはパヌンの如く、この腰卷の前を脚間を通して後方に廻してこれを止める。男女



山中で造つた舟を運ぶ棧道

長舟に乘つて出陣するカーヤン族



カーヤン族の住居（竹槍の防壁に注意）

共に戸外では綿布、又は樹皮布で作つた上衣を着用する。この上衣は日除けを目的とし、耕作、旅行等の際に使用される。外出のときには美しく編んだ編笠をかぶるが、これは晴雨兼用の冠り物である。身體裝飾としては、男子は耳に穿孔して山猫の犬齒、或は木製の栓をはめ、耳朶には銅、眞鍮製の環や玉飾を多數に下げる。この耳飾類の重さは2封度くらゐに達し、その重量のため耳朶は引き延ばされて肩にまで垂れるやうになる。頸飾、腕輪も、男女を通じて愛用される裝身具で、特に祖先から傳承されてゐる硝子製錬玉は、高價なる寶物として珍重されてゐる。

カーヤン族の住居はダイヤ諸族中で最も優秀である。聚落は河川が曲流し、陸地が半島狀に突出する部分に沿ふて營まれ、たいてい7–8戸の住居より成つてゐる。家の大きさは長さ200碼くらゐのものが多いが、大規模のものは400碼に達するものもある。幅は30呎から60呎くらゐが普通である。この長大なる長屋に普通2–300人の人間が起居するが、これに小兒及び奴隷を加へれば5–600人に達する場合もあるといふ。屋根組は柱で支へられ、25呎から30呎くらゐの床は、梁の下7–8呎の所に構築される。家の長軸にそつて板壁で長く區切られ、廊下と居室に分けられる。廊下の幅は居室より稍々せまく、居室は間口25－30呎くらゐの小室に區分される。この小室が各家族の家で、ここに全家族員と奴隷までが起居を共にする。ただ寢所はたいてい幕、又は壁で區切られてゐる。頭目の家は、この長屋の中央に位し、その前の廊下には壇が設けられ、來客との儀式的接見の際に使用される。然しこの廊下は一種の物置場で木臼をはじめ色々な道具、雜器の類が壁にかけられたり、雜然と置かれたりしてゐる。家への出入は梯子をもつて行はれる。梯子は自然木に足がかりとなる刻目をつけたもので、45度の角度でかけられてゐる。

米を主食とし、サゴ椰子、玉蜀黍、タピオカ、黍、パイナップル、蕃椒、南瓜、胡瓜バナナ、甘庶等を副食物とする。獸肉、魚肉等をも副食とし、獸類は吹矢、罠等を用ゐて獲り、魚類は毒流し、網、釣等によつて、これを捕獲する、米は陸稻で、燒畑耕作によつて栽培される、

ケニヤ族の頭目

ケニヤ族の日時計

ケニヤ族の踊

ケ　ニ　ヤ　族

ボルネオ中央部稍々北寄りの地域に分布し人口約 30 萬。身長は中位で、頭型は各種の變異を示し、顴骨は中等度に突起し、鼻は稍々扁平であるが、鼻稜は正しい。眼の位置は水平なもの、稍々斜眼なものとがある。毛髪も直毛、波狀毛が見られ、皮膚の色は淡褐色を呈する。

體質的にも文化的にも、カーヤン族と最も類似してゐる。體質はダイヤ諸族中で最も優秀で、皮膚の色はカーヤン、イバンの諸族より明色である。

性質は本來、闘爭的であるが、イバン族のやうに兇暴でなく、懇切で行儀正しく、社交性を持ち、頭目を尊敬し、これに服從する。

服裝はカーヤン族と類似し、男女とも褌、腰卷を使用し、外出には上衣、笠等を使用してゐる。耳飾、腕輪、頸飾等も殆どカーヤン族のそれと類似してゐるが、耳朶に垂下する耳飾の數はカーヤン族のものほど多くない。入墨は男女共に行はれてゐる。

家は構造外觀共にカーヤン族と類似する長屋造りで、これが1列に連なつて聚落を形成することがある。彼等の聚落は河川に沿ふ高い懸崖上に營まれてゐる。

米を主食とし、副食物その他は、殆どカーヤン族と異らない。

クレマンタン族

クレマンタン族とは、文化的、體質的に類似した部族の集合名詞であつて、彼等は中央ボルネオから附近一帶の地にかけて廣く分布し、その人口は100萬以上と推定されてゐる。彼等の身長は中位、或は短位で、頭型は長頭、毛髮は直毛を主とし、多少、波狀毛の者も見られる。皮膚の色は稍〻暗色に近い。體質、精神兩部門において、彼等は、一方ケニヤ族と、他方、ムールート族と聯繫を持つてゐる。性質は他のダイヤ諸族に比して好戰的でなく、理智的で社交的であるが、稍〻臆病である。

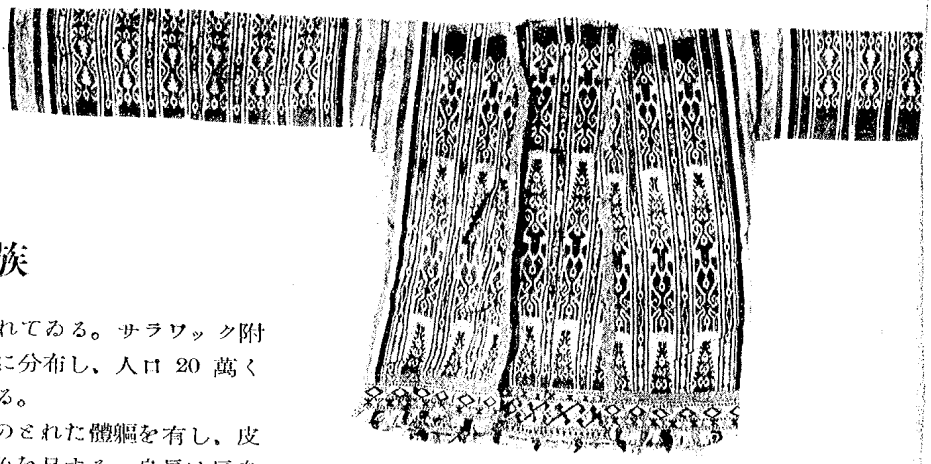
衣服はカーヤン、ケニヤ諸族と大差なく、身體裝飾もほぼ類似してゐるが、耳飾の中には栓狀を呈し、その前面に細金細工の施されたものが多く使用されて居り、頭部を變形する風習も、一部に認められてゐる。

クレマンタン族の家屋は、カーヤン、ケニヤ諸族のそれと多少の類似を示してゐるが、その規模は小さく、用材も竹、輕い木材等の如き簡便なものを使用し、屋根は草をもつて葺く。

武裝したクレマンタン族の若者

食物も前二者と大差を見ないが、ある部族では水稻を用ゐ、水牛を使役して、これを耕作する。この水田耕作は過去においてフィリッピン、或は佛印方面から傳へられたものと考へられてゐる。

クレマンタン族の男女



イバン族

海ダイヤとも呼ばれてゐる。サラワック附近、北ボルネオ一帶に分布し、人口 20 萬くらゐと推定されてゐる。

良好に發育し均整のとれた體軀を有し、皮膚は他の部族より暗色を呈する。身長は長身又は中身で、頭型は短頭が多い。顴骨は稍〻突起し、毛髪は直毛、或は波狀毛が多い。彼等の表情は明かるく活氣があるが、稍〻傲慢で洒落好きで、興奮し易い。非常に好戰的で、叛骨に富み、最も頑固な首狩種族である。彼等は以前マライ族の一部の組織した海賊の手先となつて働いたことがあつたが、まもなくその持前の慘忍性によつて先輩を凌駕し、附近の航行者を惱ましたことは有名である。

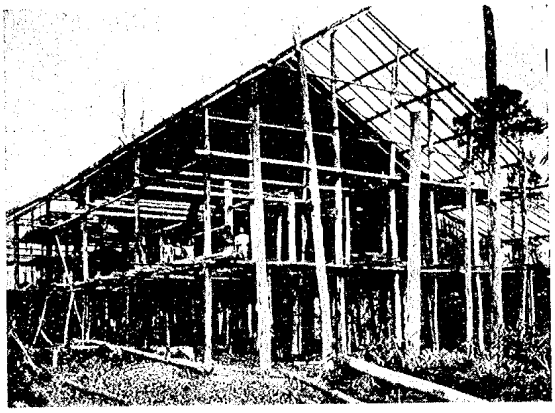
服裝は男子は褌、女子は腰卷を使用することは前記諸族と異らないが、その色彩は極めて派手で、男子はたいてい色彩の強い褌をしめ、頭部に美しいターバンを卷いてゐる。女子は半袖、前合せの、長さ腰、又は膝に達する上衣に短い腰卷をしめる。この衣服はたいてい美しい刺繍、或はボタン飾りで裝飾される。そして籐蔓に眞鍮を被せた螺線狀のコルセットをはめる。耳飾、頸飾、腕飾等も豐富に使用されるし、美しい羽毛を裝飾用に供することも普通に行はれる。

家はカーヤン、ケニヤ諸族と同樣の床の高い長屋建築であるが、柱は前者に比して稍〻細いものが使用され、その數も多く、且つその配列を異にしてゐるため、各居室の前の廊下は狹く、非常に混雜した感を與へる。

食糧はカーヤン、ケニヤ諸族と殆ど異らず、米を主食とし、燒畑耕作によつてこれを作る。

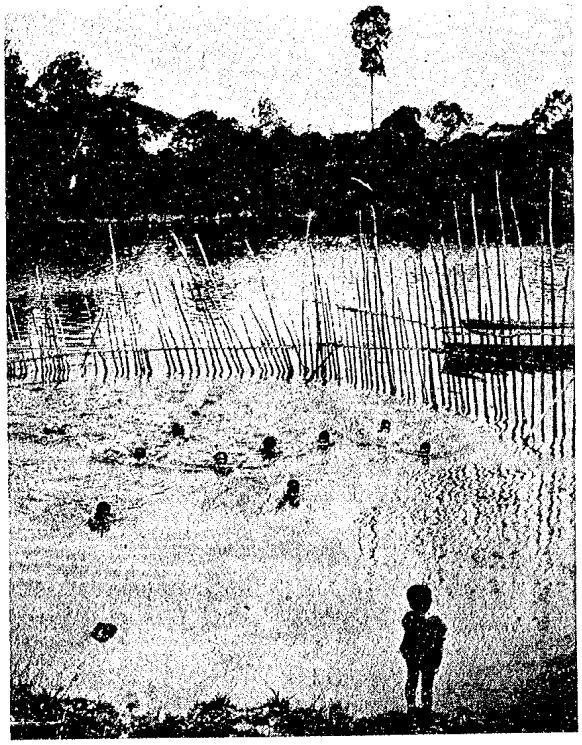
布を織るイバン族の女

齒に眞鍮をはめたイバン族の男子



イバン族の共同住居（建築中）

イバン族の共同住居（内部）



鰐よけの柵の中で遊ぶイバン族の子供

イバン族の女子

ムールート族

北部ボルネオに居住し、その人口約 25 萬、クレマンタン族に最も類似し、ヅスン、サバン、ケラヤン、タガル、トリンその他の風習、言語を多少異にする部族より成る。

身長は稍々高く、頭型は中頭、或は短頭、鼻は扁平で、顴骨は稍々突出する。眼は水平で光彩の色は暗褐色である。毛髪は直毛、又は波狀毛で、皮膚の色は多少赤味を帶びた淡褐色を呈してゐる。社會組織は甚だ不備で、頭目は餘り統師力を持つてゐない。農業技術は他の部族より進歩してゐるが、米から精製した米酒に耽溺する悪習を持つてゐる。

衣服は男女ともクレマンタン族に類似するが裝飾品その他は遙かに粗雜で、かつ乏しい。

家は前記諸族のやうな長屋式のものを營むが、クレマンタン族と同樣、稍々貧弱なものを構築する。

主要食糧は米で、米は主として水稻を作る。この耕作法は諸族中で最も進歩してをり、水牛を使役して土地を耕し、灌漑技術もまた發達してゐる。或者は二毛作を行ふし、永年にわたる土地の利用については、特に心を用ゐてゐる。

極めて定住性を有し、他の部族において見られるやうな舟運による移動を全く行はない。從つて、その聚落は河川から多少離れたところに位置してゐる。

ムールート族の頭目

ヅスン族の男子と寶壺

額を平にし顔を圓くする爲の幼兒の頭部變形（ミラナウ族）

プナン族

ボルネオの中央山地、カヤン川流域に放浪生活を營む部族で、その人口は10萬くらゐと推定されてゐる。身長は餘り高くなく、頭型は長頭、又は短頭で、鼻は扁平、眼は稍〻斜眼、光彩の色は概して中等度の明色を呈する。毛髪は直毛が多く、波狀毛も認められる。皮膚の色は明褐色である。性質は保守的で、臆病である。

家は他の部族と異り、極めて貧弱な樹枝と木の葉で作つた差掛小屋風のものを營み、衣服もまた變化に乏しく、男子は褌、女子は腰卷を使用する。身體裝飾品も、質量共に他の部族に比して甚だ劣つてゐる。

20-30 人づつ小群をなして叢林中を放浪し、野生のサゴ椰子の存在するところに暫時占據する。各群には頭目があり、これを指導する。河川の上流の盆地のやうなところが、その住居地域であるが、この叢林地帶の奥深くひそむ彼等を見出すことは、困難であるといふ。

殆ど農耕を行はず、吹矢で野獸や野鳥を狩し、また叢林の果物、根塊等を拾集して食糧に當て、また他の部族との交易の資とする。

船を造らず、旅行も全くこれによらない。彼等の唯一の工藝品は、籠、蓆、吹矢、サゴ椰子を加工する道具だけであり、布、刀、槍等は他の部族と物々交換によつてこれを得る。

プナン族の頭目

プナン族の男子

セ　レ　ベ　ス

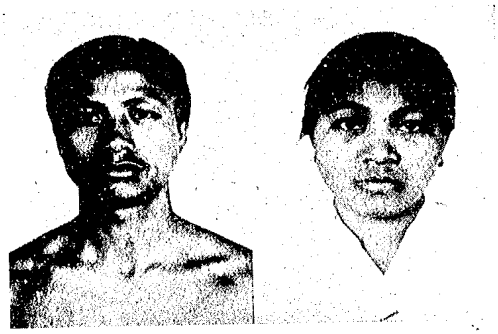
セレベス島は、その面積 189,536 平方粁、人口 4,232,000、1平方粁當りの人口密度は 22 人である。これを種族別に見れば、インドネシア人 4,174,000、支那人 41,000、歐洲人 8,000、他の東洋人 9,000 となり、華僑人口は他の島々と同様、原住民を除く他の民族を壓してゐる。

原住民はミナハサ、ブギ、マカッサル、トラジャ等の諸族に分れ、これ等のほか海岸地帶にはバジョー族が點々として散居してゐる。

セレベス島の古代文化については、まだ殆ど解明されてゐない。然し島内の各地に巨大なる石像や、石桶、石臼の類が殘存してゐる事實から推考すれば、この地も嘗て佛印からインドネシア、ポリネシアの一部にかけて傳播した古代巨石文化の影響を受けたことは明らかである。

この島に對する白人の侵略は１６世紀に始まる。初期の侵入者は西班牙人と葡萄牙人で、前者はメナドを、後者はマカッサルを據點とした。當時この島の西南半島一帶から小スンダ列島のスンバワ、フローレス兩島に亘つて土人王國であるゴアが繁榮し、マカッサルの町はブギ族の舟乘りがモルッカ諸島から齎した香料類の貿易中心地となつてゐた。西班牙、葡萄牙兩國に後れてこの方面に進出した和蘭人は、ゴア攻略を企てゴア王ハッサン・ウヂンとかねて確執あるブギ族のアルー・バラッカの援助を得てこれを破り、1667年にマカッサルを東印度會社保護領とし、この地を根據として漸次に同島をその治下に置くことに成功した。

中部セレベスの石像と石桶



ミナハサ族の男子と女子

ミナハサ族

セレベスの東北部に分布し、人口 380,000、海岸マレー族に屬し、その容貌は日本人に類似する者が多いといはれてゐる。

衣服は一般のマライ族と等しく、短い上衣にサロンを用ゐるが、近時歐化した風をなす者が多くなつてゐる。

家は高床家屋で、軒は深く通風よく作られ、部分的に洋風の加味されてゐる例もある。

米を主食とし、魚肉、豚肉等を副食物とする。米は水稻で、水牛を使役して耕作される。

住民には基督教徒が多く、勤勉で商才に富み、教育も或る程度普及し、一部の者は下級官吏、事務員、下士官となつて働いてゐる。

ブギ族

セレベスの南部ボニ灣沿岸一帶に居住するが、全島海岸地帶各地、ボルネオ沿岸、リュウリンガ島その他にも分布してゐる。

原マライ族に屬し、身長 160.9 糎、頭型指數 84.6、强健で均整のとれた體軀を持つてゐる。人口 1,533,035。

衣服は短いシャツ狀の上衣にサロンを纏ひ、頭にはターバンを卷く。聚落は水邊、又は水上に10數戸づつ群をなして營まれ、家は高床家屋で、居室の前には欄干風の緣があり、そこに梯子がかけられてゐる。水中にある家は小舟を家の下に止め、梯子によつて出入する。

古來、海洋民として發展し、漁業及び貿易に從事してゐたが、近年は陸地にも定住するやうになり、水田耕作やココ椰子の栽培をも行つてゐる。性質は傲慢なところもあるが、淡白で進取性に富み、勤勉である。航海術に長じ、その商才に至つては尤に華僑と對抗し得るといはれてゐる。

婦人の位置は高く、自由結婚が行はれ、男女はほぼ同權に近い。女子は各種の勞働に從事するが、最も得意とするのは機織で、縱縞及び格子縞の織布を相當多量に生産するが、手の込んだ精緻の製品は少い。

昔時、ヒンヅー教を信奉してゐたが、17世紀頃から回教に轉宗してゐる。

ブギ族の村・水上の高床家屋

ブギ族の男子

トラジャ族

セレベスの中部、東部及び東南部に分布し、人口 557,590、原マライ族に屬する。

男子は褌を纏ひ、短い上着をつけ、裝飾品を殆ど使用しない。女子は樹皮で造つた腰卷に美しい模樣のある寬い上衣を着、頭には鍔のない帽子、又は笠をかぶり、頸飾をつける。

聚落は 6-7 戸の家より成り、石塊を積み重ねた石壘によつて圍まれてゐる。家屋は高床建築で、構造細部はバタ族の建築と共通するところが多い。屋根は鞍型をなし、棟梁の兩端は突出し、この部に支柱が設置されてゐる。各戸にはたいてい穀倉が附屬してゐる。住居も穀倉もすべて美しく彫刻され彩色されてゐる。

米を主食とし、掘棒を用ひて耕作する。水田耕作をも行つてゐるが、水牛を使用する場合は稀である。男子は農耕のかたはら狩獵、漁撈を行ふ。獵には犬を使役し、槍を用ひて猪、鹿をとり、魚撈には網を使ふ。

樹皮布は主としてイボの樹皮を剝ぎ、灰汁で煮出し、水洗してのちよく打叩き、2-3 日保存して更に叩き、これを染色して仕上げるのである。

貴族、平民、奴隷等の階級に分れ、世襲されてゐる。奴隷は前二者と結婚することが出來ないし、その待遇はあらゆる點で甚だしく差別的ではあるが、特に酷使されるやうなことはない。

宗教は精靈崇拜である。死者は布で包み、小屋内に安置し、稍々白骨化した後、斷崖に穿つた横穴中に改めて埋葬し、前に木偶を安置し、死者が生前使用した道具類を副葬する。

トラジャ族の娘と男子

トラジャ族の家屋

トラジャ族の運搬風俗

男よりよく働くトラジャ族の女

トアラ族居住地帶から發見された石器類・彼等の祖先が使用したものか

トアラ族

セレベス西南半島の山地に居生し、身長は157.3 糎、頭型指數 82.2、毛髮は波狀を呈するが、個人的には捲毛狀の傾向を示す者もある。皮膚の色はブギ族より稍〻暗色で、ヴェダ族より稍〻明かるい。鼻は扁平で幅廣く、口唇は肥厚し、男子は髭を生やしてゐる。

家は現在ではマライ風の高床家屋を營んでゐるが、以前には洞窟生活を行つてゐた。サラシンの見聞によると、彼等の洞窟は内部に小柱で支へられた木の床が敷かれ、一洞窟にたいてい5-6名の家族員が生活してゐたといふが、より原始的な者は床を構築せず、直接地上に座臥したものらしい。

本來、裸體生活を營み、粗雜な樹皮布の製法を知つてゐるのみであつたが、近頃はブギ族の影響を受け、服裝も彼等のものを模倣するやうになつた。

ココ椰子の實を主食とし、玉蜀黍をも栽培する。農具としては大型で不恰好な木鍬があるのみである。

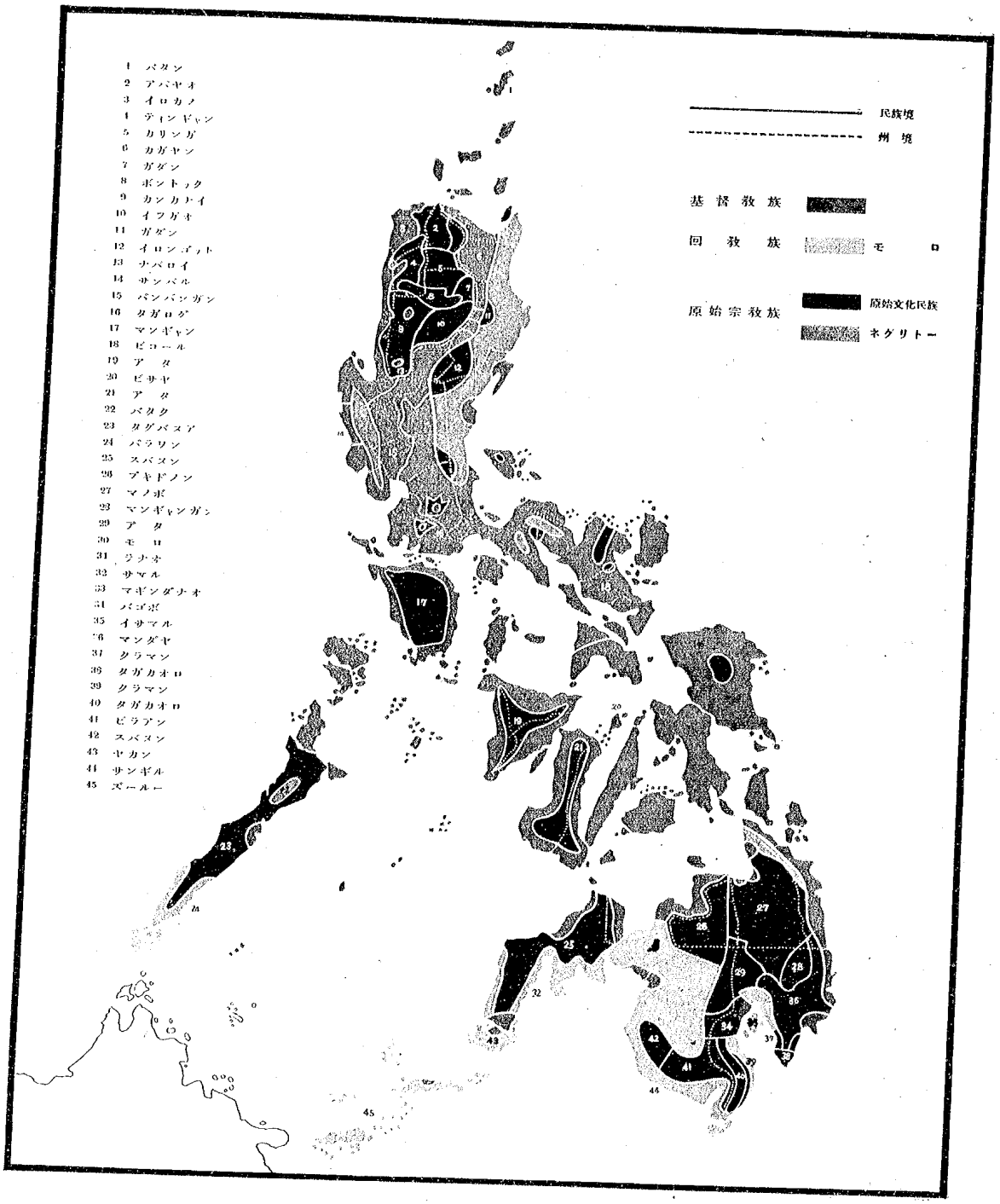
武器としては鋭く尖らせた竹槍があり、弓矢、吹矢等は知られてゐない。火は竹と竹とを磨擦せしめて起す。

一夫一婦制が行はれてゐる。

スマトラのクブ族、マライ族、サカイ族等と共に、インドネシアにおけるヴェダ系の最古人種層の一員と考へられてゐる。

トアラ族の男子

フィリッピン民族分布圖



フィリッピン諸島

フィリッピン諸島は總數7,083の島々より成り、その面積296,296平方粁、北はバシー海峽を隔てて臺灣に對し、地勢は急峻なる連山が海に迫つてゐるため、平野は餘り發達してゐない。

この地の石器時代文化に關しては、まだ信據す可き研究に乏しいため、明らかにされてゐない。ベイヤーはこの地に舊石器時代から後期新石器時代に及ぶ各種文化層の存在することを主張し、その編年を行つてゐる。彼の示す打製石片は、單にそれのみを見れば極めて舊石器的なものであるが、他の遺物との共存關係が明らかにされてゐないのは、頗るその論據を薄弱ならしめてゐる。ただ彼が後期新石器時代の所產と推定した手斧型石斧の一つに、臺灣各地及び香港附近で發見される背面に段狀の刻みの附せられた有段石斧が見出されるが、これは新石器時代末期に臺灣を中心とし、南支、比島にかけてかなり發達した磨石器文化圈が存在したことを明示する貴重な資料である。

石器時代終末期に續くこの島の歷史は、現在のところ暗黑である。この地の住民達は印度支那、スマトラ、ジャワにおいて見られるやうな輝かしい民族史をもつてゐない。彼等のある者は、過去において僅少のヒンヅー文化、支那文化、回教文化の影響を受けたが、それは單なる影響に止まり、彼等自身これを消化し發展させる域には到達し得なかつた。

1521年、マジェランの到着、そののち約50年、レガスピの初代總督就任以後、西班牙人の支配圈内にあつた一部の部族は、舊來の傳統を放棄して基督教文明を受容することとなり、近年にいたつては更にアメリカ物質文明の走狗となり終り、僅かに山間險峻の地に占據する少數民族—いはゆる非基督教族—のみが、固有文化の傳統を繼承してゐる。

1939年度におけるこの島の人口は、16,000,303、これを國籍別に見れば、原住民15,833,649、日本人29,057、華僑117,487、米國人8,709、西班牙人4,627、ソ聯人237、英國人1,057、ドイツ人1,149、佛國人197、和蘭人168、その他3,069、不詳901で、日本人在住者は華僑に次ぐ第3位にある。

原住民の部族的集團構成は極めて複雜で、その分類は學者によつて異るが、ベイヤーに據れば43部族に區分し得るといふ(**第7表**)。

これ等の諸部族を、主としてその體質に基いて概括すれば、ネグリトー族、インドネシア族、マライ族の3大群となる。この3者は各々渡來年代を異にし、ネグリトー族は最古住民層、インドネシア族は第2次住民層、マライ族は第3次住民層に屬すると考へられてゐる。最古住民層に屬するネグリトー族は、ルソン、ミンダナオ、パネー、パラワン等に散布し、次の住民層であるインドネシア族は、南方蒙古族的體質を有し、原マライ族と呼ばれるものと等しく、彼等は移住ののち先住民達を壓迫し、或はこれと混血した。アパヤオ、カリンガ、原始ガダン、イロンゴット、原始ビサヤ、マンギャン、タグバヌア、バゴボ、ビラーン、クラマン、タガカオロ、アタ、マンダヤ、マノボ、マンギャンガン、ブキドノン、イサマール、ティルライ、スバヌン、バジョ

ー等がこれである。マライ族は文化マライ族又はデュートロ・マライ族と呼ばれるものと軌を一にし、インドネシア族を山間に追ひ込んだといはれてゐる。イゴロット、イフガオ、ティンギャン等がその主なものである。

クレーバーに據れば、マライ族の身長は157—164 糎、頭型指數 80—85、鼻型指數73—85。インドネシア族の身長は 151—156糎、頭型指數 77—82、鼻型指數 89—102。ネグリトー族は身長 146—150 糎、頭型指數 81—85、鼻型指數 95—106 を算するといふ。

以上の分類のほか、原住民の信奉する宗教を基礎とし、これを基督教族、非基督教族、回教族等に大別する事も廣く行はれてゐる。

比島に存在する 43 部族のほかに、獨立した部族ではないが、メスティーソと呼ばれる一群がある。メスティーソとは西班牙語で混血の意味を有し、スペイン人、支那人、その他と原住民との間に出生した混血種である。

比較的教育程度も高く、彼等自身メスティーソであることを誇りとしてゐる。アギナルド、オスメニア、ケソン等の如き指導者達が、この出身であることは周く人の知るところである。

第7表：フィリッピン種族別人口

ビサヤ	3,977,210
タガログ	1,789,049
イロカノ	988,841
ビコール	685,309
パンガシナン	381,493
パンパンガ	337,184
イバナッグ	156,134
✱イフガオ	132,500
☪ズール	87,400
☪マギンダナオ	79,850
✿サマール	78,700
✱カリンガ	67,450
✱ボントック	63,258
✱イゴロット	61,308
☪ラナオ	58,350
サンバル	56,146
✱ブキドノン	48,500
✱ネグリトー	35,926
✱マノボ	39,600
✱セミネグロイド	46,015
ガッタン	21,240
✱スバヌン	31,450
✱ティンギャン	27,648
✱マンダヤ	25,000
✱アパヤオ	23,000
★タグバヌア	19,460
✱マンギャン	12,250
カラミアン	11,350
✱ビラアン	10,400
✱バゴボ	9,350
✱アタ	7,500
☪ヤカン	7,290
✱テルライ	7,150
✱タガカオロ	7,100
イバタン	6,392
✱イロンゴット	6,150
✱クラマン	3,600
イシナイ	2,647
✱マンギャンガン	2,500
✿サンギル	2,450
☪パラワン	1,940
✱イサマル	983
ドウマガット	352

☪回教族 ✱原始宗教族 ✿その他基督教族

ビサヤ族

タガログ族

イロカノ族

ビ サ ヤ 族

フィリッピン諸族中、人口第1位の部族(3,977,210)で、ビサヤ諸島に分布し、早くから基督教に改宗し、タガログ族と共に最も開化せるものである。古來、スペイン人を初め、多くの歐米人と接觸してゐた結果、その生活様式は歐化し、固有の風を消失するに至つた。

服裝も現今では、たいてい簡單な洋裝をしてゐるが、女子の中には稀にハタディオンと呼ばれる筒形のサロンをはくものも見られる。

中流以上の生活者の家は、概して洋式を採用してゐるが、それ以下、或は農民の間では依然としてニッパ椰子の葉で屋根を葺いた高床建築—いはゆるニッパ・ハウス—が行はれてゐる。

米を主食とし、魚類、甘藷等を副食とする。水田耕作は極めて盛んで、甘藷、蔗糖、マニラ麻、コプラの栽培も盛んである。

近年、その人口の增加著しく(增加率 1.8%)、教育もある程度普及し、政治的意識も熾烈である。

タ ガ ロ グ 族

マニラ市を中心に居住する人口第2位(1,789,049)の部族で、教育は普及し、文化程度は高く、政治的意識も強い。ビサヤ族と共にフィリッピン諸族の指導的部族をなしてゐる。

住居はビサヤ族と同様、中流以上は概して歐風を模倣してゐるが、ニッパ・ハウスも至るところで見られる。

男子は洋服を着け、女子も洋裝をなし、サヤを着用するが、老年の者の中にはタピスを用ゐる者もある。

米、魚肉等を主食とし、水田耕作は廣く行はれ、漁業もまた盛んである。コプラ、砂糖黍の栽培もなされ、紡織、製帽、製靴、刺繍等の諸業も相當發達してゐる。

イ ロ カ ノ 族

ルソン島北部の西岸から、ガンバール、パンガシナン、カガヤンの諸地方に分布し、人

ビコール族　　パンガシナン族　　パンパンガ族

口 988,841、第3位にある。

歐米文化の影響を受けてゐるが、ニッパ・ハウスに住む者も多い。

米、魚肉を常食とし、棉花、煙草の栽培も盛んである。

夙に基督教に改宗し、信仰心に篤く、勤勉で清潔好きであるといはれてゐる。進取性に富み、その一部の者は遠くハワイ方面にまで出稼ぎに出てゐる。

ビコール族

タガログ族とビサヤ族の分布地の中間に居住し人口は 686,309（第4位）、言語、風俗、體質ともにビサヤ族に近似するため、その一分派であると考へられてゐる。

米を主食とし、甘蔗、玉蜀黍等を副食とする。水田耕作を行ひ、マニラ麻の栽培もする。

パンガシナン族

ルソン島中部西岸のパンガシナン地方に分布し、人口 381,492、第5位にある。

昔時、スペイン人に反抗したが、歸順した後、基督教の教化を受けたけれども、現在にいたるまで改宗以前の慣習を保持してゐるといはれてゐる。

專ら水田耕作をなし、煙草、砂糖等を產出し、帽子、籠の製造をも行つてゐる。

アエタ族

フィリッピンのネグリトー族は、ルソン、ミンドロ、パネー、ミンダナオ、パラワン等の各島に點々として散在してゐる。アエタ族といふ名稱はフィリッピンのネグリトー族の總稱の如く使用されることもあるが、本來これは、パンガシナン、ザンバレス方面の同族に與へられた稱呼であつて、他の地方に居住する者に對しては、各々異つた名稱が附けられてゐる。

ネグリトー族の人口は、彼等の生活樣式が極めて移動的である結果、これを確實に知ることは不可能であるが、だいたい 3-400 萬くらゐと推定されてゐる。

身長は極めて低く、殊にルソンのアエタ族

の如きは男子平均身長 139.7 糎に過ぎない。頭型は短頭で、鼻は扁平、廣鼻型に屬する。皮膚の色はチョコレート色を呈し、頭髪は螺線狀をなす縮毛である。

男子は褌をしめ、女子は腰卷を纏ふ。男子は頭髪を短く刈つてゐるが、女子はこれを切らない。皮膚に傷を附け、その痕跡をもつて裝飾とする瘢痕裝飾は、男女を通じて行はれてゐる。裝身具としては植物纖維で編んだ頸輪や、樹核、骨片等を連ねた頸飾の類のほかには殆どないが、稀に櫛が一種の裝身具として女子の頭髪に挿されることがある。

家屋もまた極めて原始的で、片流れの屋根を持つた差掛小屋のやうなものが作られてゐるのみである。これは椰子、又は草の葉を編んだ方形の屋根板をつくり、その一邊を地面につけ、その中央に支柱を立てて、これを斜めに立てかけ、家族はその下で生活する。屋根の大さは、下に住む家族員數によつて多少異るといふ。

アエタ族の差掛小屋

未開狀態にあるアエタ族は、拾集生活を營み農耕を知らない。從つて彼等の食糧は、狩獵の獲物、或は掘り集めて來た根莖、拾ひ取つて來た果實等より成つてゐる。動物性食糧としては野豚、鹿、野鳥類、蜥蜴、蛙、川魚、蜂蜜、蛹等がある。これ等のうち、大形の野獸は弓矢を使用し、集團狩獵によつてこれを

アエタ族の男子

アエタ族の女子

バゴボ族の鋸齒

バゴボ族の鋸齒施術

獲つたり、或は鼠の類をもつて捕獲したりする。魚は弓で射つたり、藥を用ゐたり、魚毒を流してこれをとり、蜂蜜は蜂の巣を煙で燻してから採取する。

肉類はたいてい火で焙つたり、或は青竹の筒に容れ、これを火にかけて蒸してから食用とする。炊事はすべて女子の任務とされてゐる。

武器は弓矢を主とし、弓は多く椰子をもつて製作され、その長さ2米、矢は竹製で約1米あり、彼等の低い身體に對し、甚だ大きなものである。矢には時に毒矢が用ゐられるといふが、毒の化學的成分はまだ解つてゐない。

バゴボ族

ミンダナオ島の南部、ダヴァオ灣の西北岸の山間に分布し、人口9,350。身長は158.6糎、頭型指數78.8、鼻は扁平に近く、毛髮は波狀を呈する。

衣服は極めてよく發達してゐる。男子は肌に密着する下着をつけ、その上に色糸をもつて刺繍され、小玉類をもつて飾られた上衣を羽織り、下に短いズボンをはき、腰に刀をたばさむ。女子は男子と同樣、刺繍と玉飾の附けられた稍く長目の上衣を纏ひ、下にゆるやかなズボンをはく。耳飾、頸飾、踝飾の類、及び鑽齒、染齒の風は、男女を通じて盛んに行はれる。

家屋は切妻、草葺の高床家屋で、普通單室より成る。各部落には頭目があり、その家は一般家屋と構造的に等しいが、規模は更に大きく、部落民の集會所としても使用される。

米を主食とし、甘藷、玉蜀黍、バナナ、サゴ椰子等をもつてこれを補ふ。耕作は燒畑耕作で、男女共にこれに從事するが、概して女子の任務とされ、このほかに女子は炊事、機織、籠造り、土器造り等を行ふ。男子の仕事は專ら狩獵と戰爭とされてゐるが、鍛冶、大工の如き特殊技術を要するものも亦、その職域と考へられてゐる。武器としては槍、刀、楯等が使用される。

宗教は精靈崇拜で、一夫多妻制度が認められてゐる。

カリンガ族

ルソン島北部、カリンガ、アパヤオ州に分布する體質的にも文化的も多少相違する部族群の總稱で、人口 67,450 を算する。

衣服は男女共、身體に密着するシャツ狀のものをつけ、女子は下にスカートをはく。身體裝飾としては、兩性を通じて耳飾、頸飾の類が用ゐられ、染齒、文身の風も見られる。

家は草葺小屋で、籐を連ねた壁をめぐらし二室より成る。聚落の規模は小さく、山間峻險の地に營まれる。

米、甘藷等を食用とし、米は陸稻で燒畑耕作によつて栽培される。農耕は一般に女子の仕事であり、その技術は原始的である。豚、犬、鷄等を家畜として飼育する。

部落ごとに頭目があつて、これを支配し、宗教は精靈崇拜、一夫多妻制が認められてゐる。

カリンガ族女子の盛裝

マンダヤ族の女子

マンダヤ族

ミンダナオ島のダヴァオ灣の東側、シガボイ半島に占據し、その人口 25,000。

身長 158.9 糎、頭型指數 84.6。皮膚の色は稍々淡色で、毛髮は黑褐色、直毛であるが多少波狀を呈する傾向も認められる。顴骨は突起し、鼻は扁平で、口唇は厚く稍々外反してゐる。

男子は刺繍を施した寬い襦袢風の上衣に、ゆるやかなズボンをはき、女子は青地木綿に美しく刺繍した上衣にスカートをつける。外出時には男子に限つて笠を戴く。女子は前髮を切り下げ、他の部分を後頭部において束ね美麗なる飾櫛をさす。男女とも耳飾、頸飾、腕飾等を愛用し、染齒、鑽齒の風がある。

住居は高床家屋で、高床家屋の祖原型とも考へられる一種の樹上家屋も營まれてゐる。これは地上 15-20 呎の高さのところで大木杭を切り、これを基本としてその高さに幾多の杭を立て、ここに床をつくり、屋根はニッパの葉をもつて葺く。家は單室で梯子によつて出入される。

米、玉蜀黍、甘藷等を食用し、米は陸稻で燒畑耕作によつて作られる。狩獵は男子の職務で、犬を使役し、鹿、野豚等をとる。

武器には槍、刀、楯等があり、弓矢もまた使用される。

スバヌン族の女子

スバヌン族

ミンダナオ島、サンボアンガ半島に分布し、人口 31,450。内陸に居住する者はネグリトー族、海岸に占地する者はマライ族の血を混へてゐる。

衣服として、男子は肌に密着した上衣と股引、女子は華美に刺繍され、飾玉を連ねた上衣を使用する。

家屋は高床建築で、床を支へる杭には、自然の立木を適當な高さの部分で伐採し、これを列立させ、その上に床をつくるところの一種の樹上家屋に近い形式のものもある。

米、甘藷、タロ芋、サゴ椰子、南瓜、トマト等を食糧として作り、燒畑耕作を行ふ。

この部族はモロ族と境を接して居住するため常にこの優勢なる部族の壓迫を受け、一部のものは彼等の支配下にあつたため、その體質的、文化的影響は特に著しい。スバヌン族とモロ族との混血種、或は彼等の中で回教に改宗した者は、普通カリブガンと呼ばれてゐる。

マノボ族

ミンダナオ島の東北部、アグサン川の流域地方に主として居住し、その人口 39,600。

衣服と身體裝飾とは、既述のマンダヤ族と近似してゐる。

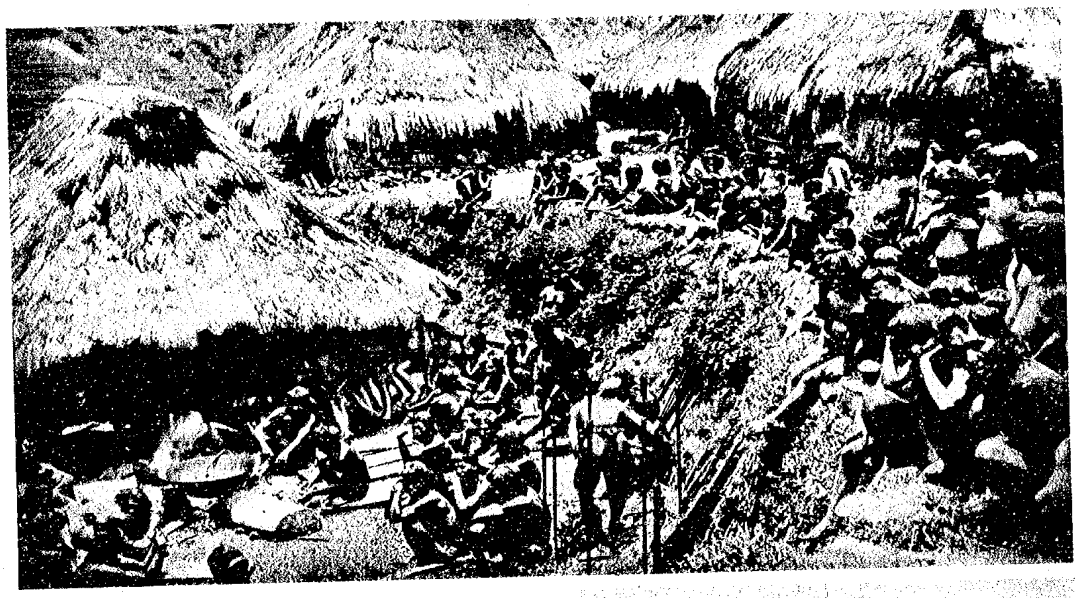
家屋は高床住居で、屋根は棕櫚の葉をもつて葺かれ、杭の高さは數米に及ぶ。家の四圍に低い壁がめぐらされ、その上部は吹通しの窓となつてゐて、内部には簡單な爐が設けられてゐる。

米、甘藷、タロ芋、サゴ椰子、玉蜀黍等を食糧として栽培し、豚、犬、鷄等を家畜とする。魚類及び野生の鳥獸の肉類が重要な副食物となることはいふまでもない。

米は陸稻で、燒畑耕作を行ふ。すべて農耕、機織は女子の勞働、狩獵、戰鬪は男子の任務とされてゐる。武器としては、短劍、槍、楯、弓矢等が使用される。

精靈崇拜を行ひ、部落には頭目があり、會議等の際には、その指導、統師をつかさどる。

弓を射るマノボ族



イゴロット族の村落（次頁）

イロンゴット族の女子

イロンゴット族

ルソン島中部のヌバエ、ビスカヤ州山間、森林地帶に居住し、ネグリトー族の血を混へ、ネグリトー族を除く比島原住民としては最も未開状態にある種族の一つで、その人口6,150を算する。

叢林に圍繞された要害の地を卜して、粗雜なる草葺小屋を營み、相寄つて小聚落を形成するが、定住性に乏しい。

裸體生活をなし、男子は褌をしめ、頭は長髪となし、女子は短い腰卷を纏ひ、腰飾、耳飾をもつて裝飾とする。

米を主食とし、燒畑耕作によつてこれを作る。農耕は男女共にこれに當り、男子はこのほか狩獵、戰爭等をその任務とし、女子は炊事、機織、編物等を行ふ。

武器としては弓矢、槍、楯、斧等が使用されてゐる。

イロンゴット族の踊

イゴロット族

ルソン島中央北よりのボントック、ベンギュエット、レパント、アンブラヤン等の各地の山間に居住し、人口 61,308。原始マライ族の文化狀態を顯示する部族といはれてゐる。

男子は褌、女子は腰卷をつけるが、衣服は一般に發達せず、袖無し風の外被の類が見られるに過ぎない。身體裝飾としては男女ともに文身を行ひ、特に男子の文身には精巧な例を見ることが出來る。

比較的大きな聚落を營み、聚落は幾多の家（アフォン）より成立する。アフォンといふのはボントック地方の住居の總稱で、その中に2種のものが含まれてゐる。第一は個人の住宅で 15×12 呎、入母屋風の屋根を持ち、高さ3呎半の腰壁をめぐらしたもので、これは富裕者のための家である。第二はカ・ユ・フォンと呼ばれる、より小規模の家で、土壁をもつて閉鎖的に構築され、貧しき階級、又は寡婦の家として使用される。以上のほか長老集會所（ファウイ）、青年集會所（パ・バフナン）、少女集會所（オラッグ）があり、オラッグは試驗婚の行はれる場所として有名である。

イゴロット族の集會所と聖樹—聖樹には精靈が宿ると信じられてゐる

米を主食とし、甘藷、麥、豆類、玉蜀黍等を副食とする。植物質食糧の中で、彼等は豆類を最も好み、米、玉蜀黍、カモテ、粟等がこれに次ぐといふ。米は土器にいれて煮沸され、カモテは2吋位の大さに輪切りにしてゆでられる。調理の際にはいづれも鹽を使用しない。

米種は水稻で、大規模の水田耕作によつて栽培される。水田は山腹に伴ふて構築された階段狀水田で、特異な景觀を呈してゐる。

舊時より金鑛の採集を行ひ、製鐵に關する技術を知り、甘藷より砂糖を製し、また食鹽泉の水から鹽を造る方法をも心得、手工藝に長じた性勤勉の民である。試みに彼等の一日の行事の時間割を示せば次のやうになる。

男女とも午前3時半—4時頃起床、食事の用意をしたり、豚に飼料を與へたりする。まもなく娘達はオラッグから歸宅、6時—6時頃、全員食事。7時—7時半仕事に出る。午後1時晝食、6時半—特に忙しいときは7時—7時半歸宅。直ちに食事、この食事は家に殘つたもの、或は早く歸宅した者が調へる。全員食事後、子供等は直ちに各々の集會所に赴く。8時頃就寢。以て彼等の勤勞ぶりを察する事が出來よう。

ボントック地方の住民の聚落には、政治的中核をなす頭目の如きものは存在せず、すべてのことは長老達の合議によつて決定されるのであるが、長老集會所はかうした會議の時に使用される。以前は盛んに首狩を行つたが、現今では平和な民と化し、各種の勞働に從事してゐる。

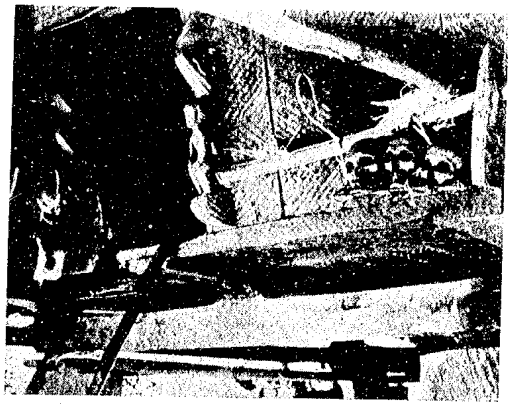
イゴロット族の鑛夫

イゴロット族の米搗

イゴロット族の戰士

イゴロット族の女子

イフガオ族の住居



イフガオ族の住居の入口

イフガオ族の木製長櫃子

イフガオ族の男女

イ フ ガ オ 族

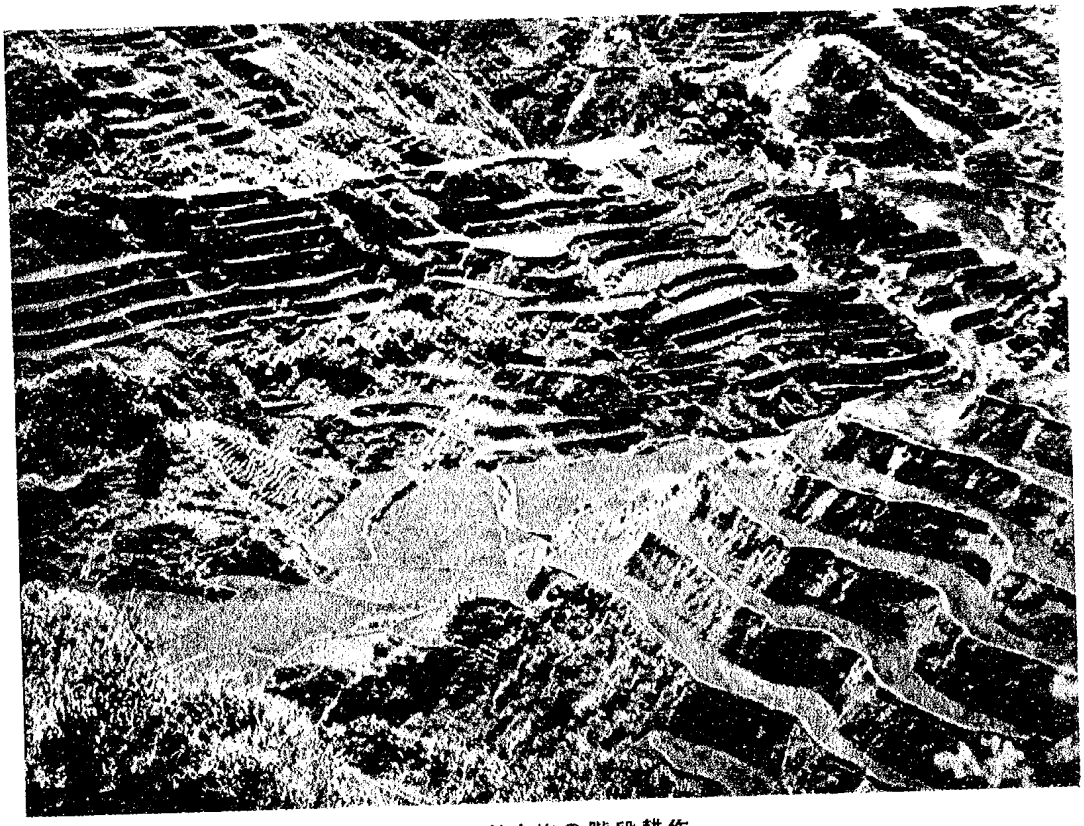
ルソン島中央山地、イフガオ地方に占據し、人口 132,500。イゴロット族と境を接し、文化的にも、體質的にも、これと最も親緣關係を有する部族である。

男子は毛髪を短く切つて周圍にたらし、衣服はイゴロット族と類似してゐる。男子は胸、女子は腕に文身を行ひ、耳飾、櫛等を用ゐ、儀式の際には珠玉、羽毛をもつて裝飾とする。

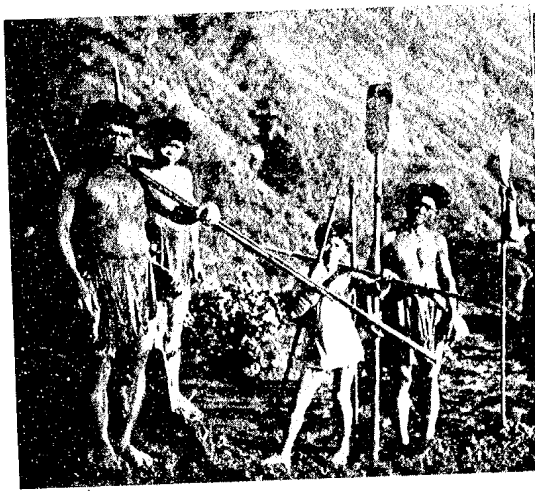
家は高床家屋で、四注式の草葺屋根をもつてゐる。

米を主食とし、大規模の水田耕作を行ひ、杓子狀を呈する木鋤をもつてこれを耕す。水田はイゴロット族と同樣な階段狀水田で、數千呎の山腹にまで及び、複雜なる用水渠を通じて灌漑され、階段狀に水田を境する石壁の延長は恐らく 12,000 哩以上に及ぶと推定されてゐる。

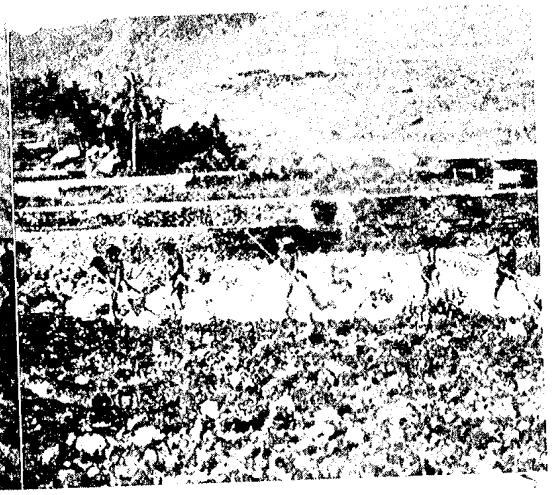
勞働を厭はない勤勉な民となつてゐるが、昔時は極めて好戰的で、常にイゴロット族と爭ひ、相互に首狩の應酬を行つたこともある。



イフガオ族の階段耕作



木鋤を持つイフガオ族



木鋤によるイフガオ族の耕作

モ　ロ　族

フィリッピンの回教民族は、一般にモロ族と呼ばれてゐる。モロといふのは、スペイン語で回教徒を意味する言葉である。

ミンダナオ、パラワン、ズールー、サマール諸島に住み、その慣習、言語等の相違によつて、ズールー・モロ、ラナオ・モロ、マギンダナオ・モロ、サマール・モロ、ヤカン、サンギル、パラワン等に細別される。

衣服は短い上衣に股引をはき、ターバンをまく。女子はジャケットを着け、寛いズボンをはく。歯牙を研いで變形し、これを染める。

家は高床家屋で、地上に建てられたものと水中に建てられたものとがある。

米、魚を常食とし、水田耕作を行ひ、麻、棉等をも栽培する。

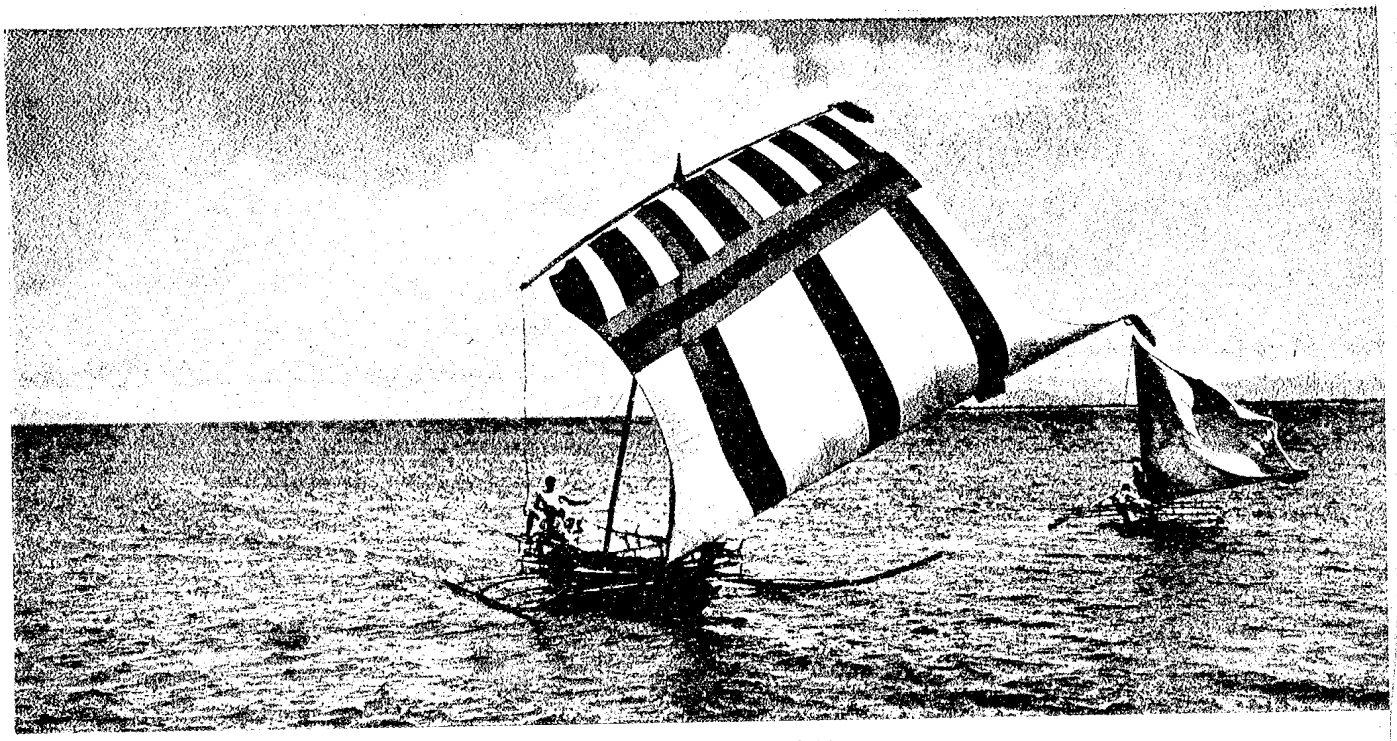
手工藝に秀で、青銅象眼細工、細金細工等の技術には極めて優秀なものがあり、殊にマキンダナオ・モロ族の如きは青銅を鑄て大砲(ランタカ)を製作した事すらある。

回教を信奉し、アラビア式の文字を有し、この字をもつて自ら印刷した書籍も存在する。戒律を嚴守するが、自尊心が強く、排他的で熱狂し易い性質を持つといはれてゐる。

一夫多妻制が認められ、以前は奴隷制度も存在してゐた。

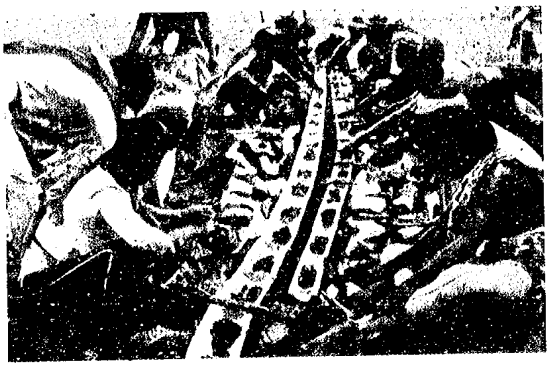
往年、アメリカ勢力に對し最後まで強力に反抗した話は、改めて説くまでもない周知のことである。

モロ族の水上住居



南海を彩るモロ族のカヌー

モロ族の若者



會食・割竹の一節が一人前

モロ族の家の入口

モロ族の頭目の一家

參 考 文 獻

A. SARRAUT: Indochine. PARIS, 1930.

P. GOURON: L'indochine Française. HANOI, 1929.

M. ABADIE: Les Races de Haut-Tonkin. PARIS, 1924.

H. BAUDESSON: Indochina and its Primitive People. LONDON.

M. HURLIMANN: Burma, Ceylon Indo-china. BERLIN, 1930.

K. DÖHRING: Siam. HAGEN, 1923.

W. W. SKEAT & C. O. BLAGDEN: Pagan Races of The Malay Peninsula, LONDON, 1906.

N. ANNANDALE & H. ROBINSON: Fasciculi Malayenses. LONDON, 1903.

J. LÖEB: Sumatra.' WEIN, 1927.

O. J. A. COLLET: Terres et Peuples de Sumatra. AMSTERDAM, 1925.

K. DE ZWAAN: Anthropologie der Menangkabau. AMSTERDAM, 1908.

B. HAGEN: Die Orang Kubu auf Sumatra. FRANKFURT, 1908.

C. S. N. HURGROUJE: The Achehnese. LEYDEN, 1906.

KLEIWEG DE ZWAAN: Die Insel Nias. HAAG, 1914.

D. J. H. NYESSEN: Somatical Investigation of the Javanese. BANDOENG, 1929.

G. KRAUSE: Bali. HAGEN, 1920.

F. SARASIN: Versuch einer Anthropologie der Insel Celebes. WIESBADEN, 1906.

H. J. T. BIJLMER: Outline of the Anthropology of the Timor-Archipelago. WELTEVREDEN, 1929.

M. BROWN: The Dutch East. LONDON, 1914.

A. KRÄMER: West-Indonesien. STUTTGART, 1927.

A. W. NIEUWENHAUIS: Quer Durch Borneo. LEIDEN, 1904.

C. H. HASE & W. MCDOUGALL: The Pagan Tribes of Borneo. LONDON, 1912.

O. RUTTER: The Pagans of North Borneo. LONDON, 1927.

C. H. HOSE: Natural Man. LONDON, 1914.

C. LUMHOLTZ: Through Central Borneo. NEW YORK, 1920.

J. DENIKER: The Races of Man NEW YORK, 1900.

W. HUTCHINSON: Customs of the World. LONDON.

J. HAMMERTON: Peoples of All Nations. LONDON.

H. N. HUTCHINSON, J. W. GREGORY, R. LYDEKKER: The Living Races of Mankind. LONDON.

A. C. HADDON: The Races of Man. LONDON.

A. MATSUMURA: A Gazetter of Ethnology. TOKYO, 1908.

BRITISH MUSEUM: Handbook to The Ethnographical Collections. LONDON, 1910.

昭和十八年四月

厚生省研究所人口民族部

030
305

人口問題研究所図書